

ブラジル日本文化福祉協会創立 50 周年記念

文協 50 年史

História de 50 Anos do BUNKYO



1955 ~ 2005

ブラジル日本文化福祉協会



刊行のことば	ブラジル日本文化福祉協会々長	上原 幸啓
祝 辞	駐ブラジル連邦共和国日本国特命全権大使	鳥内 恵
祝 辞	在サンパウロ日本国総領事	西林万寿夫
文協歴代会長		
文協 50 周年記念式典		
功労者表彰		
第 1 部 文協 50 年のあゆみ		1
序 章 創立まで一世代とその背景		2
1. 日本人会の役割 2. 情報空白の時代 3. 母国救援運動 4. 日本人協力会の発足		
5. 日本館の建設 6. 協力事業の大きな成果		
第 1 章 サンパウロ日本文化協会の創立		10
1. 協会創立の構想 2. 準備委員会から創立まで 3. 就職相談部の設置 4. 反響よんだ奨学金制度		
5. 日伯文化普及会の設立		
第 2 章 ブラジル日本移民 50 年祭		19
1. 笠戸丸移民 2. 日本移民排斥の背景 3. 移民 50 年祭委員会の結成 4. 文化センターの建設と山本会長の訪日		
5. ブラジル政府の好意 6. 三笠宮殿下ご夫妻を迎えて 7. 全伯で盛りあがった記念行事		
8. 日系社会の実態調査 9. 県費留学生制度のはじまり		
第 3 章 日本文化センターの建設		34
1. 文化センター建設の背景 2. 建設案が決まるまで 3. ピラチニンガ文体協への呼びかけ		
4. 会誌「コロニア」と広報活動 5. 建設委員会の設立 6. 建設工事の起工と募金運動		
7. 第 1 期 A 工事の完了 8. 第 1 期 B 工事の完了 9. 文化センターの落成式		
第 4 章 皇太子殿下ご夫妻の訪伯		50
1. 文化活動の推進 2. 100 万コト基金の設定 3. 各団体からの協力 4. 宮坂会長と藤井事務局長の訪日		
5. 皇太子殿下ご夫妻の訪伯 6. 明治 100 年・移民 60 年祭		
7. ブラジル日本文化協会への脱皮		
第 5 章 ブラジル日本移民 70 年祭		62
1. 企画委員会の設置 2. 延滞会長のヴィジョン 3. 文化事業の活性化 4. コロニア資料保存委員会		
5. 田中総理一行の来伯 6. 中沢体制の誕生と史料館の建設		
7. 史料館建設委員会の設立 8. 移民 70 年祭企画委員会の発足 9. 移民史の節目—移民 70 年祭		
第 6 章 ブラジル日本移民史料館の建設		77
1. 史料収集委員会の設置 2. 梅村博士の来伯と基本構想 3. 展示実施シナリオの作成		
4. 笠戸丸とブラジル丸 5. ブラジル日本史料館の落成式 6. 史料室の建設		
第 7 章 充実発展を目指して		87
1. 学術研究費補助 2. 相場会長の誕生と 70 年史の編纂 3. 文協組織の拡充運動		
4. 創立 25 周年記念式典 5. 総合スポーツセンター構想 6. パンアメリカン日系大会		
7. 鈴木総理と浩宮殿下の来伯		

第 8 章 ブラジル日本移民 80 年祭	99
1. 尾身会長の就任と新人の台頭 2. 室内体育館と文化施設の建設 3. 日本語普及センターの誕生	
4. 常陸宮殿下ご夫妻の来伯と 80 年祭委員会の発足 5. 80 年祭の挙行	
6. ふるさと創生訪日団	
第 9 章 2 代会長の誕生と新時代への展開	112
1. 事業活動の見直し 2. 日系団体代表者会議の開催 3. 移民八十年史の刊行	
4. 日系美術館の落成と創立 35 周年記念 5. 国外就労者情報センターの設立	
6. 日系コミュニティの将来	
第 10 章 文協 40 周年と日伯学園構想	121
1. 日伯修好 100 周年記念 2. 橋本総理の来伯と日伯学園構想 3. まず「教育理念」の確立を	
4. 創立 40 周年を迎えて	
第 11 章 天皇・皇后両陛下の訪伯と移民 90 年祭	130
1. 成果をあげた『皇室外交』 2. 全伯日系団体の統合へ 3. 90 年祭典委員会の再編	
4. ブラジル日本移民 90 年祭 5. 日伯学園構想委員会の結成 6. 文協を連合会へ改組へ	
7. 戦後 50 年史展の募金を再開	
第 12 章 戦後史料展示場の開設	148
1. 難航した会長選挙 2. 全伯日系団体連合会の結成 3. ブラジル日系団体連合会の創立	
4. 戦後史料常設展示場の開設 5. 文協創立 45 周年 6. 神戸港移民乗船記念碑の建設	
第 13 章 新世紀を迎えたコロニア	165
1. UNEN の発足 2. 会長候補選出で再び難航 3. INS S 問題解決へ向け慈善団体として登録更新	
4. 日本移民 100 周年準備委員会の発足 5. 日伯学園構想を記念事業に 6. 文協会長・副会長人事を一新	
7. 文協改革の年 8. 上原文協がスタート	
第 14 章 ブラジル日本移民 100 周年へ向けて	186
1. 祭典実行委員会の発足 2. 節目が重なった 2003 年 3. 宙に浮いたブラジル日系連 (UNEN)	
4. 100 周年記念事業案 5. サンパウロ 450 年祭と日本館 6. 小泉首相の来伯 7. 日伯総合センター構想	
終 章 文協 50 周年式典と記念事業	200
1. 100 周年の前夜祭に 2. 日系社会の団結を 3. 文協史上初の直接選挙	
4. 08 年を日伯交流年に 5. 再浮上した日伯学園構想 6. 文協 50 周年式典	
第 2 部 日本館・ブラジル日本移民史料館・国士館大学センター	217
日本館の 50 年・コロニア再統合のシンボル 開拓先没者慰霊碑	218
ブラジル日本移民史料館 100 周年を機に歴史の再確認	232
国士館大学センター さらなる施設の充実を	247
第 3 部 座談会	251
座談会 (1) 文協の 50 年を振り返る	252
座談会 (2) 文協への要望と展望	266
座談会 (3) 若い世代からの声	283
第 4 部 文協創立 50 周年記念行事紹介	299
第 5 部 年 表	311
文協 50 年史の執筆を担当して	330
あとがき	331

(本文庫は「文協50年史」の主な内容の抄録です)



初代会長 山本喜吾司

東京都牛込出身。1892年9月17日生。東京大学農学部卒業、三菱合資会社に入社、北支での棉花栽培に従事した後、1926年10月15日、「もんでびでお丸」でサントス港着。1940年、東山事業の経営者に昇任。1954年、サンパウロ市創設400年協賛力委員会委員長としてイビラプエラ公園に日本館を建設。55年、サンパウロ日本文化協会を設立させた。1958年、連邦政府より「南十字星勲章」を授与。同年、日本政府より勲四等旭日章、64年、勲三等旭日章を授与。



第2代会長 中尾 熊喜

熊本県玉名郡横島村出身。1900年1月24日生。1914年3月、名義上の養子として坂上重次の「形式家族」の一員として石巻丸で渡伯。1927年、下元健吉らとコチア産業組合を創設。初代専務理事を務める。のち組合から離れ、1936年、肥料工場「カナカオ化学工業株式会社」を設立。1955年、サンパウロ日本文化協会設立とともに副会長、1963年、山本会長の死後、会長に選出され、文化センターの第1期工事を完成させた。1969年、勲三等瑞宝章を受章。



第3代会長 宮坂 国人

長野県諏訪市豊田出身。1889年7月15日生。神戸高商（現神戸大学）卒後、東洋移民合資会社に入社。1927年、ブラジル拓殖組合（ブラ拓）が設立されると、現地機関ブラ拓の専務理事として1932年に着伯。移住事業と関連事業を推進させた。サンパウロ日本文化協会の設立と同時に評議員会長に就任。65年3月、第3代会長に就任。アウジトリオの建設を実現させた。67年、勲三等旭日章、68年、連邦政府より南十字星章、77年、勲二等瑞宝章を授与。



第4代会長 延満三五郎

広島県加茂郡豊栄町出身。1909年8月8日生。神戸高商卒後、33年に鐘紡に入社。第2次世界大戦後、ニューヨーク鐘紡社長時代にブラジルに工場建設の指令を受け、54年来伯。71年4月、第4代会長に就任。72年4月、ブラジル独立150年祭日系協力委員会を発足させ、第1回国際民族舞踊大会を開催させるなど、工芸展や生け花、ラン展など対ブラジル社会にも参加を呼びかけ、日伯文化交流に大きな成果を挙げた。1981年、勲四等瑞宝章を受章。



第5代会長 中沢源一郎

高知県加美郡加我美町岸本出身。1907年5月23日生。30年、東京大学文学部卒、33年8月20日、サントス着の「ぶえのすあいえす丸」で渡伯。1939年、ジュケリー農産組合（後の南伯農産組合中央会）の専務理事に就任。74年以後理事長として84年12月の逝去まで在任。1975年4月、第5代会長に就任。「ブラジル日本移民70年祭典」とその記念事業「日本移民史料館」の建設、文協ビル4～8階の建て増し事業を完成させた。79年、勲三等旭日章を受章。



第6代会長 相場 真一

北海道足寄郡足寄町出身。1908年2月17日生。小樽高商卒後、家族と共に1930年着伯。アリアンサ移住地の富山移住組合に勤務。1934年、ブラ任に就職。47年、南米銀行へ転出以後、南銀グループ経営審議会々長、南米安田保険社長を歴任。79年4月、文協会長に就任。任期中に文協ガラージを完成させ、「日本移民70年史」を刊行した。また総合スポーツ・センター構想に取組み、10万平方メートルの所有地を寄贈。86年、勲三等瑞宝章を授与される。



第7代会長 尾身 信一

東京都世田谷区奥町町出身。1921年7月5日生。1932年8月、家族と共に「ぶえのすあいえす丸」で着伯。モジアナ線のファゼンダに配属され、1949年にサンパウロ市に移転するまで農業に従事。1953年に尾身兄弟商會を設立。67年、サウデ文化体育協会を設立して会長に就任。78年には「子供の園」理事長に就任。この間、文協の運営にも携わり、83年4月、文協会長に就任。任期中に室内体育館など全ての施設を完成させた。93年、勲四等瑞宝章を受章。



第8代会長 山内 淳

サンパウロ州アラウソウパリス出身。1931年9月20日生。マッケンジ大学工学部電気科と土木科を59年に卒業。84年、アソシアダス・ド・イビラング大会会計科卒。1973年に協和電設と合併でポビエル・キョウワ株式会社を設立。マッケンジ大学在学中から文協活動には積極的に参加。91年4月、2度として初の文協会長に就任。96年8月、橋本龍太郎総理の来伯に際し、日伯学園建設の必要性をあげ日本政府の支援を要請した。2003年、勲四等瑞宝章を受章。



第9代会長 岩崎 秀雄

東京都大田区出身。1922年3月1日生。1935年、神奈川県立川崎中学を中退。家族と共にサンパウロ州オリベイロン・プレットのカフェー園に入植。37年サンパウロ市へ移転。45年、ジュケリー農産組合に就職。71年常任理事で組合を辞職。三井肥料株式会社へ営業取締役として入社。77年、専務取締役に就任。サンパウロ日伯看護協会副会長時代に日伯友好病院建設副委員長を務める。95年伯国東京都友会々長。99年、文協会長。2003年、勲四等旭日小章章を受章。



第10代会長 上原 幸啓

沖縄県那覇市出身。1927年11月26日生。1953年、サンパウロ大学理工学部・土木工科学科卒。64年、理工学博士。69年より80年までユネスコ「世界水分10年計画」ブラジル代表。81年、理工学部教授。86年、南極研究旅行。96年、サンパウロ市名誉市民権。97年、大阪市立大学名誉教授。同年、サンパウロ短期科大学名誉教授。2000年、サンパウロ大学理工学部名誉教授。2003年、文協会長。2001年、勲四等旭日章を受章。

第1部

文協50年のあゆみ



序 章

創立まで ― 生いたちとその背景

1. 日本人会の役割り

“日本人が3人集まれば会をつくる”とはよく言われることばだが、遠く祖国を離れて異国に移り住んだ日本移民にとって、それは言語・風俗・習慣の異なる真文化のなかで、互いの郷愁をいやし、相互扶助の活動をするための手段でもあった。

大半が錦衣帰国を夢みて移住した戦前の移民にとって、日本人会を組織する最大の目的は、会員相互の親睦と、子弟の日本語教育にあったといえる。

ブラジルの日本移民がはじまって25周年を迎えた1933年には、日系人口は約14万人ほどになり、各地に日本人会、青年会、日本語学校が増え、教育・スポーツなどを通して全伯的な日本人の連帯を意識させるような動きがはじまってくる。それらは当時の日本の政治情勢を反映して、そのほとんどが在外公館主導のもとに行われていた。

これら官憲主導のものとは別に、スポーツ面は民間主導型といえ、1931年からはサ

ンパウロにおいて全伯邦人陸上競技大会が開かれるようになり、1933年からは全伯少年陸上競技大会、野球大会が開かれた。さらに1936年には全伯青年野球大会が開催されるなど、それぞれ組織がつくられ、やがて全伯的な催しとなっていった。

こうして各地に散在している日本人の連帯意識が芽生えはじめたものの、統一日本人会のようなものはなかなか出現しなかった。

初期の植民地では、道路つけから橋架け、さらにそれらの定期的保全工事など、共同作業を必要とすることが多く、このような役割は、奥地だけでなく都市近郊でも同様であった。つまり新開地で必要な相互協力、相互扶助の役割を果すのが日本人会であり、1930年代になって各地に農協が設立されるまでは、農協的な役割りまで果していた。このため日本人集団地が増えるにつれて日本人会も増加し、1930年代末には約450の日本人会があったと推定されている。

全国的ではなく地方的な連合会としては、1933年にノロエステ鉄道、パウリスタ鉄道沿線の約300の日本人会を網羅した『バウルー管内日本人連合会』が設立された。これは1925年に上塚周平、星名謙一郎の2人が、現実には存在しなかったノロエステ鉄道沿線、ソロカバナ鉄道沿線の日本人連合会の名前で日本政府に85万円の低利・長期融資を申請して成功しているが、再び同様な融資を申請（これは実現しなかった）するため

の母体として設立されたもので、当時は多くの日本人会の連合体を組織するのは、このような実利につながる必要があることが必要だったようである。しかし、連合組織はなかったとしても、1930年代後半には、邦人社会の一体感はきわめて濃くなっていった。

1937年に日本は日中戦争に突入したが、戦争は理屈なしに日本人を一体化したし、さらにそれを促進したのは、それ以前から昂まりをみせていたブラジルのナショナリズム的政策であった。



ピニエイロスに完成したコチア産業組合最初の倉庫（起工は1934年5月10日）

2. 情報空白の時代

日本政府の補助と指導で日本語学校は急増し、1938年には全伯で476校に達している。ところがブラジル政府は外国語の授業を次第に制限し、1938年12月をもって外国語学校、主として日、独、伊の学校が全面的に閉鎖されたのである。子弟教育を重視していた日本人にとって、この外国語授業の禁止はなによりの圧迫と受けとられ「日本人は迫害されている」との意識がつよくなり、子弟を教育のために帰国させる者が増加している。

前述のように日語学校の運営は、日本政府から領事館を通しての移植民補助によっており、極端な国家主義が昂まった当時の日本から派遣された教育専門の主事連によって、日語教育は指導された。この間に培われた“日本精神”や日本国粹主義の風潮は、ブラジル政府側の弾圧にもかかわらず、むしろその反動として地下に潜り、激化されたともいえ、戦後日系コロニア未曾有の悲劇の母胎となった。

1934年の改正憲法で移民二分制限法(注)が決まって以来、次第に強まった国家主義的政策は、必然的に外国移民取締りの強化となって現れ、その被害をもろに受けたのが日本移民であった。ベルリンで日独伊三国同盟が調印された1940年、日系社会では

8月に南米銀行が設立され、9月には日本病院の開院式が行われている。1941年に入ると、外国語新聞に対する検閲制が強化され、太平洋戦争の勃発によって、日系社会の言論機関は実質的にその機能を停止した。

ブラジル語の読解困難な大部分の日本移民は、情報の全てを日本語新聞に仰いでおり、それら情報源の発行禁止であり、ここから戦後、日本語新聞が再刊されるまで、大半の日本移民に情報空白の時代がつづくのである。

1942年1月、ブラジル政府は対枢軸国との国交を断絶。

枢軸国人に対する取締りを強化して、枢軸国語の使用を禁止、旅行には許可証（サルボ・コンズット）が義務づけられた。さらに敵性国資産に対する資産凍結令が発せられ、産業租合や有名商店への干渉がはじまる。同年6月、渡辺マルガリーダ夫人を実行委員とする『聖市カトリック日本人救済会』が設立されて救済活動を開始。

同会は1953年5月に名称を『救済会』と改め、1957年に開設した『憩いの園』を中心に救済活動がつづけられている。

1945年8月15日の日本の敗戦による戦争終結は、それまで一体感をもっていた日系社会に、あくまで日本の勝利を信じたい者と、敗戦をいち早く理解した者との対立によ

る未曾有の混乱を引き起こした。この日系社会の分裂は、各地の日本人会や農協などの団体だけでなく、親族から家族のなかにまでおよび、テロによる殺人まで起こる悲惨な結果となり、日系社会に深い亀裂を生じさせた。

(注) 移民二分制限法とは「各国民の毎年の入国数は、過去50年間に入国し定着した各国移民それぞれの総数の2パーセントを超えることはできない」というもので、諸般の状況からみて、それが日本移民を対象としたものであるのは明らかであるとされた。

3. 母国救援運動

戦後日系社会を震かんさせたカチ・マケの対立抗争による臣道連盟(注)のテロ行為は、ブラジル政界にも反響し、1946年8月、憲法審議会の本会議において、日本移民入国禁止の条項が99対99で挿入賛否が半々にわかれたとき、議長メーロ・ビアンナの反対投票で否決されるという危うい状況のなかで、日系社会のほとんどがこのことを知らず、戦勝派の行動はさらに長期にわたってつづけられたのである。

こうした状況のなかで、敗戦の認識運動に携わっていたサンパウロの有志間で、戦火による破壊と物資不足に苦しむ祖国の同胞を救助しようという話がもちあがり、救助運動組

織化のための団体『日本戦災同胞救援会』を結成して、募金活動がはじめられた。その救援物資がL A L A (国連救済復興委員会)の手を経て日本へ送られたことはよく知られているが、『コロニア戦後十年史』(パウリスタ新聞社)では、この救援活動が日系社会におよぼした影響について、次のように論じている。

救援運動は「戦争の災禍にうちひしがれた祖国」の認識の上になんて行い得た運動であって、敗戦派、認識派が中心となって活動したものであるが、一面、コロニアから日本への義援金は、第二次大戦以前の満州、日支事変の際にも募られたことがあり「戦争した祖国への手伝い」という見方から「勝ち組」にも割合ムリなく納得された。少なくとも黙って見過ごし得る事柄だったということが考えられる。このことは、広い意味の認識運動からすると、極めて重大であって、救援運動が“認識”へのヨスガとなり、融和への橋渡しとなったことも少なくないと思われるのである。

この救援活動も名称を『日本同胞救援会』と改めて継続されたが、1950年7月、解散総会が開かれ、3年半にわたる救援活動の幕を閉じた。解散後「この連絡機関をコロニアの中央機関として継続させたい」という要望がかなり

あったが、機が熟さなかったものか、中央機関設立の運びにはいたらなかった。しかし、戦中・戦後の長く暗い日々を過し、分裂状態にあった日系社会は、はじめて団結する気運の萌芽をみたのであった。

(注) 1945年9月、サンパウロ市に本部をおいて正式に発足。勝ち組(信念派、強硬派)に属する諸団体を傘下に集めた中心的な機関として結成された。



1948年9月、民間人として始めて来伯した津曲恒太郎氏に日本の実情を聞く聖市有志。左から赤尾、矢崎、菅山、古谷、宮坂氏、二人おいて津曲氏(於トキワ)

4. 日本人協力会の発足

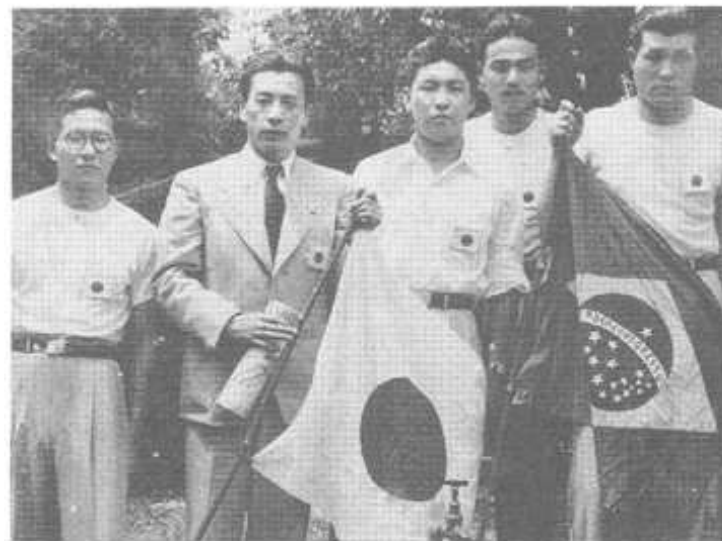
ブラジルの日系社会が日系コロニアの名称のもとにまとまりをみせるのは、1954年1月25日から1年間にわたって開催されたサンパウロ市創設400年祭に際して、市当局の要請をうけ、祭典協力委員会が設立されたときからである。ここで当時の主な出来事をみると、まず46年(サンパウロ新聞)から47年(パウリスタ新聞)にかけて日語新聞が復刊され、日系社会における日語によ

るコミュニケーションが復活する。

1946年10月、パ紙の発刊に際して書かれた文書(注)では、日本語新聞の廃刊後、在伯日本人社会は「全ク盲目ニ等シク大戦終了後ニオイテ戦争終結ニ関スル兎角ノ議論ガ輩出シタノモ大戦四ヶ年ニ亘リ殆ド世界ノ大勢ト隔絶シタ生活ニ終始セル余儀ナキ結果ト観ゼザルオ得ナイ」と述べている。

1949年にはサンパウロ学生会(後アルモニア学生寮を建設)が発足。50年には古橋広之進(トビ魚)一行の水泳選手団が来伯、各地で熱狂的な歓迎をうけた。枢軸国人の資産凍結令が解除されたのもこの年で、ブラジルの総選挙で日系初のサンパウロ州議に田村幸重が当選。2世の文化体育クラブ(ピラチニング・クラブ)が創立されるなど、2世層の成長を印象づけたことは、1世層の精神的な転換を促す強力な動機となった。

1953年には正式に日本とブラジルの国交が回復し、戦後初の大使・君塚慎が着任。この年、目伯通商協定も調印された。



古橋選手一行の来伯は、各地で熱狂的な歓迎をうけた。

1953年1月、戦後初の移民がサントスに到着。2月には戦後家族移民の第1陣として、アマゾン地方に入植する辻移民、7月にはマツト・グロツソ州ドラードス植民地の松原移民、10月にバイア州ウーナ植民地への入植者の到着と、永い空白期間のあと再開された“新しい日本人”の移住は、日系社会に新鮮な活気を与え、新時代への展開を示すものであった。

1950年11月、枢軸国人の資産凍結が全面的に解除され、この自由な経済活動復活の基盤のうえに、日系社会は新しい指導理念と中核となるべき拠点を求めていた。こうした時期にサンパウロ市創設400年祭への参加を要請されたのである。凍結が解除され、再び東山事業総支配人に復帰した山本喜誉司は、この祭典への協力を通じて日系社会の一元化を促し、さらに日本の伝統的文化をブラジルに紹介する好機とみて、石黒四郎総領事を訪ねて祭典の意義と、コロニア参加の必要性を説いた。

(注) 河合武夫資料「ASSUNTO “SHINDO”」

日本人協力会の発足

紆余曲折を経て1951年12月、桜クラブで祭典参加を決定する創立総会が開かれ、財団法人聖市400年祭典日本人協力会(会長・山本喜誉司)が正式に発足し、戦前・戦

後を通じてはじめて日系社会の統一組織が誕生したのである。第1回実行委員会では、記念事業としてイビラプエラ公園内に日本館、美術館を建設し、さらに付属日本庭園を造築してサンパウロ市に寄贈するという案が発表され、各地代表は募金協力、事業完遂に対し、力強い協力を約した。

日本人協力会が配布した趣意書のなかで、「サンパウロは我々にとって、既に懐かしい第二の母国と言わねばならぬ。そのサンパウロ市創設400年祭に当たって、この意義ある記念事業に協力することは、私達がこの地に栄え得たことを感謝すると共に、44年間の永きに亘る開拓苦難の跡を、ブラジル歴史の一頁に綴り込むことにもなるのである。」と述べ、「この400年祭記念事業に参加することが、日本人の声価を高める所以であり、またブラジルに協力するという我々の誠心を表明する絶好の機会でもある。」と結び、事業達成への協力と支援を要請している。

日本側に祭典の意義を理解させ、その協力を確保するために1953年1月に訪日した山本会長は、日伯中央協会を協力会の代行機関として委嘱するとともに、外務省、日伯中央協会を足場として7ヶ月の滞在期間中、あらゆるコネを利用して精力的にPR活動を展開している。しかも、この日本訪問は、まったくの自費によるものであった。

山本会長が携行した要望条件は、

- 1、日本政府においても相当額の予算を計上して、“国情展”“見本市”をはじめ、その他の催し物に参加すること。
 - 2、1954年の1カ年を通じて催される20余種の国際学術会議や、各種国際スポーツ競技、美術展、各種芸術祭に日本代表を派遣すること。
 - 3、日本朝野の有力者をもって組織する慶祝使節団を派遣すること。
 - 4、在留邦人が8千万円を目標として募金し、日本館を建設するが、中に展示すべき日本文化を誇る出品物の寄贈。
 - 5、在留邦人を激励する母国の精神的援助。
- 以上であった。

滞日中の山本会長の行動を『サンパウロ四百年祭』（聖市四百年祭典日本人協力会）では克明に記しているが、6月には毎日新聞が400年祭典の企画行事を詳細に報道した。また日本館の設計者、堀口捨巳博士から日本館ならびに日本庭園の設計図と説明を受け、設計図と堀口博士の談話が、山本会長の祭典企画の説明とともに朝日新聞夕刊社会面トップ5段抜きで報道され、日本側の気運に拍車をかけた感があった。

7月8日には吉田首相を目黒の公邸に訪問。首相は「日伯親善のために貴方がたのやっ

ている仕事は、極めて重大である。私も大いに力を入れるから、そちらも大いにやってもらいたい」と激励している。翌9日には高松宮殿下との会見が実現。朝日新聞（13・07・53）は“天声人語”欄で祭典問題を取りあげ、この祭典には立派な日本文化を送りたいものだと説き、読売新聞も祭典への参加問題を扱うなど盛り上がりを見せた。

首相官邸で開かれた外相茶会では、岡崎勝男外相が祭典参加の必要性を説明し、「政府は1億2千万円の予算を計上、在留民団は8千万円を募金しているが、なお諸事業に要する費用が不足であるから、日本の民間もこれに呼応し、極力寄付金を集めて協賛の実をあげていただきたい」と強力な民間援助を要請した。

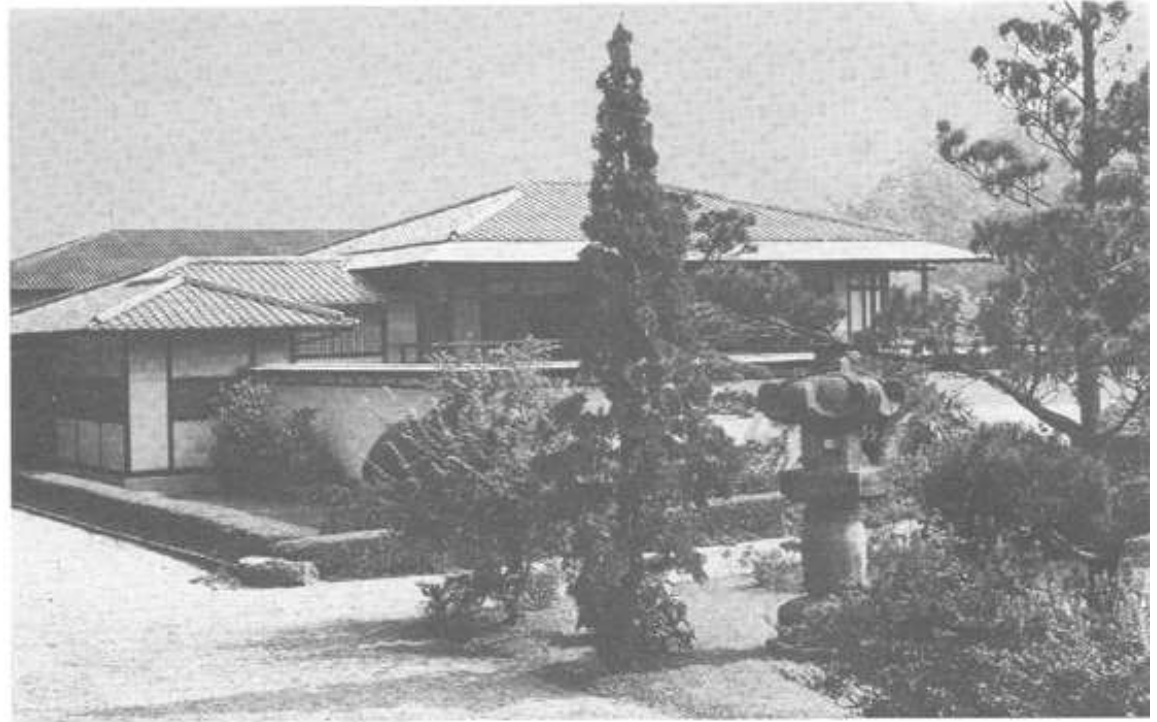
この結果、日本側の総予算は国情展、慶祝使節団派遣費1億2千万円、見本市政府補助金7千万円、民間拠出金3千5百万円、計2億2500万円となった。

5. 日本館の建設

1953年8月、大きな成果を携え7ヶ月ぶりに帰伯した山本会長は、9月に桜クラブで聞かれた第1回全伯地方委員総会の席上、日本での交渉経過を報告し、祭典参加推進工作が順調な進展をみたことにふれ、「ブラジルが日本にとって如何に重要な国であるかということが判ってきたからである。しかし、その根本は現地在留民が多年いばらの途を切

り拓いて、今日の発展を見せていることによるもので、しかもその陰には数多くの犠牲者をだしている。その犠牲者の霊魂が全日本の心を揺さぶり動かしたのである。」と、祭典参加の意義を強調、涙でしばし立ち往生となる場面があって、場内から感動のむせび泣きが聞えるという劇的シーンを展開した(注1)。日本朝野の負担と協力に応える重大責任と、現地における募金活動との板ばさみとなって心労する山本会長の心情を、参会者一同は強く受けとめ、募金運動に対する一層の熱意が盛り上がっていった。

サンパウロ市では、当時、強いまとまりをみせていた『洗染業者組合』や『ヴィアジャンテ・クラブ』(セールスマン・クラブ)が協力、また“勝ち組とみ



堀口捨己博士の設計になる日本館の建築は、54年8月15日に竣工した。

られていた団体や個人が協力の手を差しのばしてきたことも大きな力となった。募金運動は全伯にわたって行われ、916団体を網羅するにいたり、募金総額は926万4,000クルゼイロに達した。

1954年3月には、岡崎外相を会長とするサンパウロ市400年祭参加協議会が外務省内におかれ、同時にサンパウロには千葉総領事を事務局長とする400年祭日本事務局が設置された。日伯中央協会も日本文化の紹介に尽力、日本館の資材送出や技師、職人の斡旋なども担当して協力している。

日本館の建設は、吉田内閣の解散やジャニオ新市長の就任による祭典委員の辞職問題などで、一時、実行委員会では建設をとりやめ、東照宮の模型を造って、これを納める小木造館と付属庭園を建設して献納することに計画を変更した(注2)。しかし、この案に対して山本会長が強力に反対し、再び日本館を建設して、そのなかに工芸美術品展示場を設けることが決定するといういきさつがあった。

1955年11月、協力会解散後、日本館管理委員会が設けられ、祭典委員会の後を引き継いだイビラプエラ特別委員会と交渉して、その永久保存権を獲得した。しかし祭典後は日本館を訪れる客足も少なく、支出がかさむばかりで、その維持費の捻出に苦慮した。

当時「コロニアの道楽息子日本館」という陰口がささやかれ、市庁への返還論さえ出ている。

管理委員会も法的責任者というだけのもので、実際の管理事務は一切サンパウロ日本文化協会が代行し、赤字の補填は、すべて山本会長の私財によって賄われた。1960年10月、管理委員会は解散して文化協会がその事業の一部門として管理経営を受け継ぐことになった。この時、35万余クルゼイロの赤字は、会長の私財をもって埋められたのである。(注3)

(注1)『サンパウロ四百年祭』100ページ

(注2)『サンパウロ四百年祭』88ページ

(注3)『コロニア』誌35号10ページ

6. 協力事業の大きな成果

1954年9月6日、ガルセス州知事夫妻を迎えて、日本館の公式落成式が挙行された。州知事は「日本人コロニアが400年を記念するため、このような美しい心のこもった贈り物をサンパウロ市に残していただくことは、州知事として心から感謝にたえない」と謝辞を述べ、ギレルメ・デ・アルメイダ祭典委員会総裁は「各国コロニアに率先して、熱心

に祭典事業を推進し、しかもこの見事な日本建築をこの地に永久に残していただくことは、独りパウリスタ市民としてのみならず、ブラジル国民として感謝申しあげたい。今後この日本館が、日伯文化交流に寄与することを心から祈念してやまない」と謝辞を述べ、日系コロニアの協力を称えた。

1954年10月13日、岡崎勝男外相を団長とするサンパウロ市400年祭慶祝親善使節団一行が、サンパウロのコンゴニマス空港に到着。日伯国交史上はじめての現職大臣を迎え、さらにニツポン号（毎日新聞社主催世界一周機）以来、14年ぶりの日の丸機を見物するため、雨に煙る空港は5,000の日系人で埋まった。

1955年1月6日、日本館式場で祭典委員会による表彰式が挙行された。これは日本人協力会の活発な協力活動に対して、心からの謝意を表すもので、表彰されたのは ①先駆移民 ②4世③高齢者で、先駆移民として鈴木貞次郎、安田良一、後藤武夫、隈部五百子、西沢為蔵の5氏が表彰されている。こうして、サンパウロ400年祭参加事業は、成功裡に終了した。

1955年10月15日、南米劇場で2年11ヶ月にわたる協力会の解散総会が開かれた。山本会長はその席上で「日本館の建設によって、両国間に新たな認識と了解ができあがりつつあること、コロニアは一大事があれば結束して立ちあがる。すなわちコロニア健

在なりの感を特に深くしたことは、協力事業のこつの大きな成果であった」と、コロニアの熱意と結束が、この大事業を完遂させ、日伯文化の交流に大きな足跡を残したことを強調した。

400年祭典への参加で示した日系コロニアの統一行動は、当時カチ・マケの対立で混乱状態にあった日系社会に外部からの光をあてて一元化への成長をうながし、まだ感情的なシコリは残っていたとしても、喪失した自信を回復させ、再統一の端緒となったことで意義は大きい。

この協力委員会が発展的解消をとげて、サンパウロ日本文化協会の設立へとつながっていくのである。

*参考資料として、戦前の部分は田尻鉄也氏より提供された資料、および『サンパウロ四百年祭』（聖市四百年祭典日本人協力会）を参考にした。なお、日本館の建設についての詳細は第2部を参照。

第1章 サンパウロ日本文化協会の創立

1. 協会創立の構想

戦後、日本との国交が回復し、移住の再開によって“新しい日本人”が増え、奥地からサンパウロ市やその近郊への転住者が急増するにつれて、サンパウロ市内に日系人を統合した団体が必要だとする強い要望が一部からあがっていた。

奥地からの転住の主な動機は、主要農産物の低価格が恒常化したこと、ブラジルへの定住を決めた以上、子弟の教育に都合がよいことのほかに、当時まだあった「陰鬱なカチ・マケの争いからの逃避」も理由の一つとしてあげられている。

日本人であるという意識を精神的な支えとしてきた戦前に移住した1世層にとって、母国の敗戦は、その支柱を見失わせ、大多数の移民が抱いていた錦衣帰郷の日本志向から、ブラジルへの定住傾向が圧倒的に強まってくる。「在留民」「邦人社会」は「日系人」「日系コロニア」として2、3世をふくむ総称となり、在伯同胞社会はコロニア・ジャポネーザの略称としてコロニアと呼ばれるようになる。

こうした状況のなかで、聖市400年祭への協力を契機として、協力会を中心に全伯の日系が一丸となった感を与えたが、その編成を先頭にたって推進した山本喜誉司は、名実

ともに日系コロニアのリーダーであった。サンパウロ人文科学研究所が刊行した『山本喜誉司評伝』（1981年）では、「コロニア人として」とした概説（96ページ）で、山本を次のように論じている。

何れにしても、まだカチマケ抗争の余燻さめやらぬ52年、サンパウロ400年祭を機として日系コロニアの“大同団結”をよびかけた山本のけい眼はただならぬものがある。分裂したコロニアのまとめ役は誰かがやらねばならぬ大仕事であったが、まさに『天の時・人の和・地の利』をみて乗りだしたのが山本であった。

この時、山本が最も苦心したのは“人の和”であった。一方では戦前からの指導勢カー若干の名をあげるならば、海興の宮腰、ブラ拓の宮坂・加藤、商工界の蜂谷、一匹狼の高岡一を代表する先輩たちとことを謀りながら、他方では新興の指導勢力を動員することに成功した。それは戦前のいわゆる“御三家”（注1）中心の旧勢力に配するに、地元勢の新興勢力の合流であった。例えばコチアの下元、肥料の中尾、南伯の中沢をはじめ、奥地に分散する有力者の動員がそれにあたる。

日本人協力会の解散に先立って「せっかく団結したこの組織を、全伯的な日系コロニア

の中核となる拠点として、全伯連合日本人会的な組織に移行させたい」とする強い希望と動きに対して山本は「まずサンパウロ市に確固たる組織をつくらなければ、全伯をリードすることは難しい」と主張し、同会参与の宮坂国人とのあいだで後継団体設立の構想が進められていた。

この結果、サンパウロ日本協会（仮称）の創立構想がととのった55年9月、山本邸に7邦字新聞社（注2）の代表と協力会（藤井）、日伯中央会（秋山）の事務局長を招いて『サンパウロ日本協会』設立懇談会が開かれた。席上、発起人（山本喜誉司、宮坂国人）から設立趣旨の説明が行われ、全員の賛同を得て中核団体設立の構想が具体化することになった。

ここで当時の日系コロニアに眼を向けると、55年9月にはコチア産業組合が連邦政府移植民院との間でとりきめ、農村の次三男対策として独身青年のみを受け入れることにしたコチア青年移民の第1陣が到着、移住の新しいケースとして話題となった。同じく9月には、前年に設立された日本海外移住協会連合会（海協連）につづいて、日本海外移住振興株式会社が設立され、60年代初頭までの戦後移住の最盛期を迎える。

この時期になると日系社会も大きく変化して世代交代がすすみ、都市部への転住が増加、それに伴って新しい地場産業が誕生してくる。また戦後移住の再開とともに、日本からの

企業進出も盛んになり、56年1月に“50年を5年で”というスローガンを掲げて大統領に就任したジュセリーノ・クビチェックの登場で、さらに拍車がかかる。パウリスタ新聞(14・02・57)は“押すな押すなの企業進出”という見出しで、その盛況を報じている。

このように日本との交流が活発化してきた1955年の1月に起こった“桜組の街頭デモ”(注3)は、戦後10年にして、いまだに日本の勝利を信じる勝組の存在を印象づけるものであった。

(注1)戦前の日系社会では、海外興業株式会社(海興)、ブラジル拓殖組合(ブラ拓)、東山事業を御三家と称した。

(注2)パウリスタ新聞、サンパウロ新聞、ブラジル中外新聞、南米時事、昭和新聞、週刊報知、サンパウロ・マガジン。



1955年から始まったコチア青年移住は戦後の日系コロニアに大きな話題を提供した。

(注3) 55年の1月から5月にかけて、サント・アンドレー市に本拠をかまえた桜組挺身隊は、集団生活をはじめてブラジル引き揚げ運動をはじめ、街頭行進をおこなってブラジル側マスコミを賑わせた。

2. 準備委員会から創立まで

1955年10月15日、南米劇場において、サンパウロ400年祭典協力委員会の解散総会が開催されたが、同時に出席者140名のもとに、サンパウロ日本協会創立準備委員会が開かれた。まず創立準備実行委員70名が推挙され、この中から創立総会準備委員15名が選ばれ、創立準備委員会が発足した。

協力会の残務があつたとはいえ、祭典が終了して4ヶ月半も解散しなかつたことは「生まれでるものの胎動期間だったともいえる」と『コロニア十年史』では述べている。この世継ぎ団体は、一応サンパウロ市を中心としたものだが、最終的には全日系コロニアを対象としていることは、協力会解散に先立って、山本、宮坂両氏の名で発表された「サンパウロ日本協会（仮称）設立準備趣意書」で、次のようにはっきりと表明されている。

(略) もし全日系人の連合体を組織しようとするれば、まずサンパウロ市に日系人の大部分

の信頼をうるに足りるような、一つの日系団体を創設することが先決問題となってきます。このことは、実はサンパウロ市内居住者のみの問題としても、その解決を焦眉の急といたすものであります。ひとたびサンパウロ市に立派な日系団体ができあがれば、奥地ならびに他州との連絡もまことに容易に解決されることと考えます。

奥地の方々には右の事情をご諒察ねがって、ここしばらくサンパウロ日本協会成立の成行きを注視していただき、もし立派な日本協会ができあがりました上は、その定款の定めるところに従って、続々と入会をお願いいたし、遂に全伯連合体にまでもってゆかれる努力をしていただきたい次第であります。

この全日系コロニアを統合する連絡機関の母胎となる構想をもつサンパウロ日本協会創立準備委員会は、前述のように協力会解散総会の直後、同じ席上でおこなわれたのであった。

11月25日、南米銀行サロンで開催された第5回創立総会準備委員会には山本、宮坂両世話役および中尾、須貝、平田、井上、鈴木、山本（勝）、木原、中沢、破魔、藤平、竹中、中久保、平井、安瀬、羽瀬各委員全員が出席、協会の事業を年度通常事業と長期事業のこつに分けて行うことを確認し、次の項目を決議した。

◎通常事業

- 1、会館が建設されるまで、適当な場所を借入れて協会本部を設置する。
- 2、情報部を設置して会報を発行し、会の事業進行状況および国内、日本、世界の情勢などを報告する。
- 3、娯楽部を設けてバイレ、シネマの夕などを催す。
- 4、社会部を設けて既成の慈善団体、文化団体およびスポーツ団体を後援する。
- 5、文化部を設置して図書館を設け、図書を閲覧させるほか、講演会、講習会などを催す。
- 6、会計部を設置して会費を徴収し、年度事業の費用に充当させる。
- 7、よろず相談部を設置する。

◎長期事業

- 1、奨学制度を実施する。
- 2、運動場建設期成部を適当な時期に設置して運動場を建設する。
- 3、慈善事業部を適当な時期に設置して、養老院その他慈善施設を建設する。
- 4、文化事業奨励基金部を適当な時期に設置して、文化研究者を補助する。

創立総会準備委員会によって事業計画、予算案、定款など会の基本要項が審査され、会

の名称はサンパウロ日本文化協会（ソシエダーデ・パウリスタ・デ・クルツーラ・ジャポネーザ）とすること、ならびにこの会が行なう事業の基本路線は次の5項目とすることを決定した。

- 1、在伯同胞相互の親睦と文化的地位の向上を目指す啓蒙運動。
- 2、将来の日系コロニアの後継者である2世の育英事業。
- 3、戦前、戦中を通じてブラジル人がもっていた日本および日系コロニアに対する誤解と偏見を除くための日伯文化交流事業の促進。
- 4、在伯同胞の利益を擁護するための代表機関的役割をつとめる。
- 5、それらの事業を推進する拠点としての日本文化センターの建設。

こうした慎重な準備のもとに、創立総会が1955年12月17日、ニテロイ・ホテル5階サロンに磯野勇三総領事ほか78名の出席者を迎えて開催され、サンパウロ日本文化協会が誕生した。この準備委員会がそのまま理事会となり、会長に山本喜誉司が推され、会長指名で中尾熊喜が副会長となった。中尾は終始、山本会長の女房役としてコンビをつづけたが、根本的な見解の差もあった。山本会長が政治家的発想をもって日本側から資金を引き出したのに対して、中尾は補助金に頼ることを好まず、日系コロニアの自律的解決

を主張している。

役員構成は次のように推薦された。

◎評議員会

会長＝宮坂国人 副会長＝長谷川武 第1幹事＝佐藤常蔵 同第2＝花城清安。

◎理事会

会長＝山本喜誉司 第1副会長＝中尾熊喜 同第2＝須貝アメリカ 第1常任理事＝井上忠志

同第2＝平田進 同第3＝竹中正 第1会計理事＝安瀬盛次 同第2＝羽瀬作良。山本勝造 木原暢 中沢源一郎 鈴木悌一 破魔六郎 藤平正義 中久保益太郎 平井格次 鈴木威 鷺塚時哉 高橋勝 杉田ジョージ



1955年12月17日の創立総会で誕生した、山本会長を中心とする第1回理事会。

サンパウロ日本文化協会の設立は、やがてはじまる日本移民50年祭への始動と、日本文化センターの建設という大きな事業をひかえて、日系社会の中枢機関としての役割を果たし、日系コロニアは新しい形成期に入るのである。

サンパウロ日本文化協会は、以後『文協』と略称されるようになり、62年3月に本部がサン・ジョアキン街の現在地に移転するまで、文協の事務所はリベルダーデ街90番6階に設けられていた。

3. 就職相談部の設置

文化協会の最初の仕事は ①会員の獲得 ②地方団体との連絡 ③会館建設と50年祭事業に対する日本政府の補助金申請準備で、368名の創立会員を獲得した。さらに事業としては、まず奨学生制度をはじめ、56年度にはすでに6名の大学生を援助しているが、この奨学制度と慈善事業の設置案を含む長期事業計画は、多分に中尾副会長の意思を反映したものといわれた。また56年10月からは、会の機関誌として『会報』の発行がはじまった。

文協発足以来、完備した図書館の設置が要望されていたが、愛読者寄贈運動が功を奏して、2ヶ月ですでに約2,500冊にのぼる寄贈を受けている。さらに良書の収集や読書

活動を推進させる目的で、図書規定を設けて「図書館友の会」を発足させた。

また日本との交流が盛んになるにつれて知名士の来伯も増え、文協の文化活動も活発になってくる。一例をあげると、56年2月、ニテロイ・ホテル・サロンで催された泉靖一東大助教授（当時）の『在伯邦人と同化問題』と題した講演会には、約600名の聴衆がサロンを埋めた。泉教授は翌57年9月、再び同サロンで『南米の古代文明』についての講演を行なっている。

1953年7月、ガルボン・ブエノ街に初の日本人経営の映画館（兼ホテル）を建設した田中義数は、文協創立以来、文協発展に大きく寄与した一人だが、当時、日系コロニアの主な集会や講演会はこの大サロンで催されるのが常で、しかもそれは田中の好意で行なわれたのである。東洋街の今日あるのは、シネ・ニテロイのお陰といっても言い過ぎではなく、田中はリベルダーデ商工会の生みの親でもあった。

1956年10月、文協内に設置された就職相談部は、戦後移住の最盛期を迎えた当時の世相を反映して、早急な開設の必要にせまられていた。戦後移住は戦前移住の最後から10余年の空白期間の後、1953年から再開された。この後続移民の来伯は、日系社会に新しい活力を与えたが、反面移住初期に起こりやすい種々の社会問題を発生させた。

当時日本から導入された移民は、辻、松原の企画移民、養蚕移民、コチア青年移民など

で、さらにこれらと同数の呼寄せ移民が移住してきたが、その大半が農業の経験がなく、着伯早々サンパウロ市に職を求めて集中し、いろいろな問題をおこして日系社会に不安の陰を投じていた。

相談部が設置された前後をみても、国援法適用で日本へ送還される者、移住地からの脱落者、自殺事件、はては殺人事件、職もなくリベルダーデ街周辺にたむろして問題をおこす新来青年など、新聞紙上を賑わす事件が相ついで起こっている。

第2次大戦を境に移住が途絶えたことから起こった断絶は、なにかにつけて戦前の旧移民と、戦後の新移民との間にズレを生じさせ、対立した。相談部では、それらの收拾にあたり、正常な職につかせる努力をつづけた。なおコチア青年の場合は、コチア産組移民課が相談部の役割をはたしている。

当初は藤井事務局長が担当して相談に応じていたが、相談者の数が激増したため、片手間では間にあわなくなり、1960年の4月から専門の職員をおいて、本格的に取り扱うようになった。1960年からは日本政府の補助金も交付され、相談部の存在が知られる



転職相談部は、戦後移住者を対象に始められた。

ようになると、生活相談から結婚相談、はては夫婦喧嘩の仲裁まで「よろず相談所」の観を呈した。

この就職相談部は、1959年1月に設立された日本移民援護協会(サンパウロ日伯援護協会の前身)が、戦後移民の援護を主体とした活動をはじめた機会に同協会に移管されたが、62年6月末日に移管が完了するまでに、13,641名を取りあつかい、その80%が戦後移民によって占められていた。

4. 反響よんだ奨学生制度

文協創立当初から、奨学基金を設定することが計画されていたが、奨学金は基金の設定をみてから始めることになっていた。ところが「金額は少なくとも、できるだけ早く実施することが必要である」との一部理事の提案によって、会費のなかから奨学金を給与することになり、56年度から実行の運びとなった。

奨学生制度の熱心な推進者であった副会長の中尾熊喜は、奨学金とその基金設定について、次のように述べている。

一略一コロニアはすでに50年の歴史を有し、経済的にも余裕ができ、社会事業にも幾

分手をつけてもよい時代になっているので、コロニアが一致団結して、3年計画なり5年計画でこの事業を完成しようと思えば、1万コントや2万コントの基金を築くことは、たいてい困難ではないと思われる。一略一わがコロニアでも、現在ブラジル社会の第一線で活躍している2世の大部分は、戦前、教育普及会の給費生であることを見逃してはならない。もし教育普及会の奨学金がなかったとしたら、2世のブラジル社会進出は、10年あるいは20年遅れたとみて差し支えないと思われる。

選考委員として平田進、須貝アメリコ、木原暢、鈴木悌一の諸理事が審査にあたり、選考基準を家庭事情30点、学術30点、人物30点、勉学期間20点として厳重な採点の結果、初年度の5名と次年度の7名が選ばれた。

以後、育英事業は文協のもっとも重要な事業のひとつとしてつづけられたが、1976年度より新規募集をうち切り、採用中の奨学生が全員卒業した1981年をもって、この制度は中止された。なお1979年度からは、国際協力事業団よりジャミック奨学金制度が実施されるようになり、事業の運用は国際協力事業団の要請によって、文協が行なっている。

“飛魚”事業基金

戦後まもなく、水泳の古橋選手一行が来伯したとき、全伯から歓迎費をつのり、その残金が保管されていた。最初これを基金としてプール施設の建設が計画されたが、資金面その他で中止され、鷺塚、斎藤（幸）、鈴木（威）三保管責任者によって保管されていた。

この残金の使途は、5カ年を過ぎた場合、日系コロニアの代表者が集まってその始末方を決めることになっていた。ところが5年の期限が過ぎ、たびたび相談会が開かれたが使途の決定にいたらなかった。

こうしたときにサンパウロ日本文化協会が創立され、山本会長はこの水泳基金を全伯的な意義をもつ文協の一事業に用いることを考え、その譲渡方を非公式に保管責任者に申し入れていた。責任者側はこの件を水泳選手団歓迎委員長の大河内辰夫その他の関係者に計り、文協へ譲渡する承認を得たため、文協では1957年3月の理事会において、正式に受納の申し入れをするため、中尾副会長、安瀬会計理事、鷺塚理事が大河内を訪問すること、および受納のあかつきには、これを奨学基金とすることが決定した。

こうして4月2日、全伯陸上競技連盟に文協が寄贈する優勝旗授与式につづいて、水泳基金の譲渡式が行なわれ、保管責任者の鷺塚時哉より中尾副会長に手渡された。

5. 日伯文化普及会の設立

1955年10月16日、400年祭で日系コロニアがサンパウロ市に寄贈した日本館において、日本人協力会の閉会式が催された。その席上でブラジル側委員から「このような日伯友好の実をあげた会を、このまま消滅させるのは惜しい。“日本友の会”のようなものをつくって継続させようではないか」という強い要望があり、平田進、井上忠志、安田フアビオら日系2世の有力者を中心に、準備委員会が結成された。

こうした動きに山本喜誉司、宮坂国人、下元健吉ら日系コロニアの指導者も積極的に賛同、1956年6月、磯野総領事の肝いりで総領事公邸において発起人会が開かれ、名称も正式に「日伯文化普及会」(Aliança Cultural Brasil Japão 通称アリアンサ)として、その定款が承認された。

発会式は同年11月17日、日本館の広間で行なわれ、出席者150名、創立会員は200名を超え、前サンパウロ400年祭委員長のギレルメ・デ・アルメイダを会長に、副会長に山本喜誉司、マリオ・ホプネル・ツトラを推し、評議員会長にフランシスコ・トレド・ピザ、副会長に中尾熊喜が選出された。

顧問としては、日本側から古谷重綱、宮坂国人、下元健吉、ブラジル側にはフランシスコ・マタラーゾ・ソブリニョ、アシス・シャトウ・ブリアンといった錚々たる顔ぶれがそ

ろっている。

2年目からは副会長の山本喜誉司が会長に就任したが、活動の主体が2世や準2世の知識層であったため、ブラジル上層部とのつながりも強く、日伯文化交流の上で非常に大きな役割を果たすことになる。こうして文協の外郭団体として日伯文化普及会が創立され、事務所を文協内において活動をはじめた。

その目玉事業は日本語教室の設置で、それも従来の教育法ではなく、視野をブラジル人に対する日本語教育にまで広げ、日本文化の理解と摂取を計ることを目標とした。そのため日本語教科書刊行委員会（委員長・山本喜誉司、編集・武本由夫）を設け、日本の帝国書院から全額資金援助を受けて日本語教科書（全八巻）の編纂をはじめ、編集を完了した64年8月に解散して、新たに日本語の普及と振興を目的とした「日本語普及会」（委員長・宮坂国人）が設立された。

この日本語普及会は、組織上は日伯文化普及会に属していたが、69年6月に独立した別組織となって「ブラジル日本語普及会」となった。しかし、78年4月には合併によるメリットとして質の向上と資金の充実が期待され、再び合併して名称も「日伯文化普及会」から「日伯文化連盟」へと改称された。

2006年11月17日、日伯文化連盟（榎尾照夫会長）の創立50周年記念式典がサ

ンパウロ市議会で開催され、式典に出席したクラウジオ・レンボ州知事は、日本文化のブラジル社会への普及に尽力してきた同連盟半世紀の歩みを祝福した。同知事は祝辞のなかで、第2次世界大戦時にブラジルでの日本移民が直面した問題にも言及し、それらを克服した現在、多文化維持の重要性を強調している。(注)

(注) 日伯文化連盟では現在、日本語・外国人用ポルトガル語の語学講座や、折り紙・生け花・絵画・マンガ・書道・和紙絵・ラツピングなどの文化講座のほか、日本政府認定日本語能力検定試験も実施。

聖市では文協をはじめ、ヴェルゲイロ、ピニェイロスなどで学校を経営し、約1,400人の生徒が学んでいる。

『山本喜誉司評伝』(サンパウロ人文科学研究所)の座談会「山本喜誉司の思想と日系コロニア」のなかで、文協設立当時の山本の思想と行動を、鈴木悌一、斎藤広志の両氏は次のように語っている。

鈴木 400年祭で山本さんが乗り出したのは、コロニアをまとめるというストラテ-

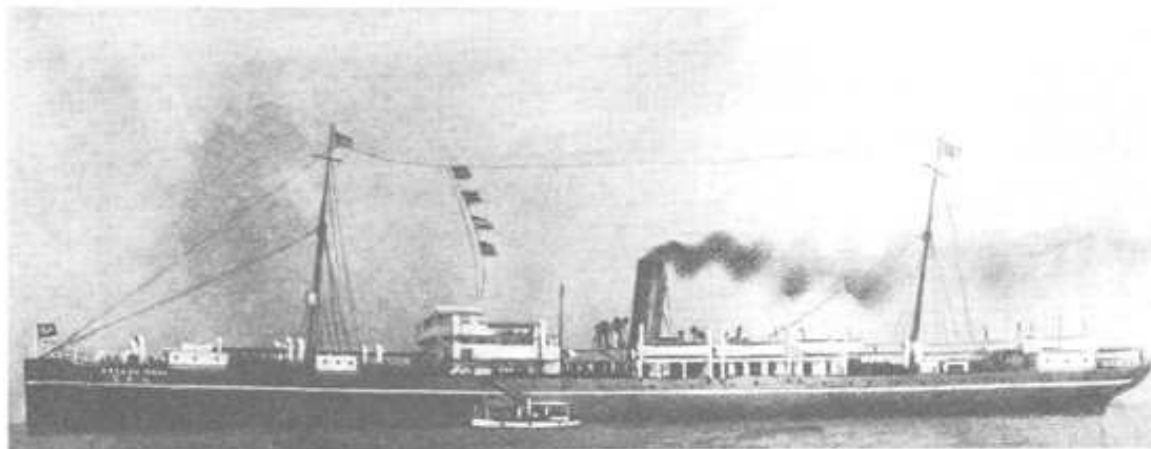
ジだった。恐らくそれ以外のなにものでもなかったんじゃないか。いわばコテならしだったが、それがうまくいったので、次は文化協会の設立へもってゆく。そのへんには一貫したものがあつた。山本さんの性格として、ことに当たっては細かい計算もした上で、よしとなれば凄いい情熱をもやす人だった。僕が感じるのはね、文化協会ができたとき、これによしというのではなく、山本さんの頭は別なことを考えていた。つまり文化交流の方へ頭を切りかえていた。彼のすべての行動がその目標に向かって集中していたときに、彼は死んでしまったという気がする。その辺だよ、僕が山本さんをエライと思うのは…。

齋藤 文協ができると、次にアリアンサ（文化普及会）をつくつた。続いて援護協会ができた。山本さんの言葉を借りると、彼はこれをコロニアの社会分化運動とよんでいるわけだ。援協ができればコロニアの福祉関係はそこにまかせよう。アリアンサにはブラジル関係をまかせよう。何とかの団体には他の仕事をまかせよう。そうすると、中心になる文協の仕事は何かといへば、それは文化交流だという大きな筋がでてきます。

第2章 ブラジル日本移民50年祭

1. 笠戸丸移民

ブラジルにおける日本移民の“原点”として、その名称が日伯交流史の発祥を感じさせる笠戸丸が、第1回農業移民781名（165家族733名、独身者48名）と10名の自由渡航者を乗せてサントス港に到着したのは、1908年(明治41年)6月18日で、この第1回移民が、サンパウロ州コーヒー農場への日本人雇用移民のはじまりである。



1908年6月18日、第1回農業移民781名を乗せてサントス港に到着した笠戸丸。

このコーヒー園契約雇用移民は、19世紀末に不足してきた奴隷労力の代わりとして導入されたもので、ほとんどがサンパウロ州のコーヒー園に配耕され、初期移民の大部分がイタリア移民であった。ところが1897年にはじまるコーヒー国際相場の大暴落で、ブラジル国内での不況が深刻となり、1902年には最大の移民送出国であったイタリアも、政府がブラジルへの契約移民の渡航を禁止した。

同じ時期に日本では、ブラジル移民の中止により（ママ。文庫編集部注・ブラジルは間違い？）、移民会社はペルー移民の送出をはじめたが、低賃金と苛酷な労働条件に堪えず、初期移民の多くがブラジルやボリビアへ流亡したことで知られている。その後、ブラジルではコーヒー価の回復とアマゾン流域でのゴム景気といった背景から、ブラジル側から日本移民導入の要請があり、時の杉村公使は各地を視察して、導入の可能性を検討し本省に報告している。

当時、日本では日露戦争終結後の国内での不況と、さらに米国での日本移民排斥の動きが激化してきたことなどから、新しい移住国を求めていた。

1906年、皇国殖産会社の水野龍社長は、サンパウロ州の農業地帯を視察して帰国、翌年9月に再び来伯してサンパウロ州農務長宮カルロス・ボテーリョと交渉して、「向う

3カ年に日本移民3,000名を導入する」契約書に調印した。(注1)

この契約によって、雇用移民の第1陣として1908年4月18日に笠戸丸が神戸港を出航するのだが、水野がサンパウロを視察した1906年には、すでに藤崎商会の野間貞次郎、後藤武夫、佐久間重吉、田中良作らが到着しており、他に自由移民として明穂梅吉、安田良一、隈部三郎といった、後に移民史に名を残す人たちが渡航している。

“移民の草分け”として知られる鈴木貞次郎は、水野の第1次視察の際に同船で、チリーに渡航するはずだったのを水野に説得されてサントスに上陸し、コーヒー園での労働体験を目的に、モジアナ線のチビリサー農場で働いている。

笠戸丸移民のサンパウロ移民収容所での行動は、コレイオ・パウリスターノ紙に載ったソブレード記者の記事がよく引用されるが、同記者は日本移民の姿をいささか好意的すぎる眼で観察し「…将来サンパウロの産業は、この

日本移民に負うところが大きいだろう」と予見しているが、サントス市のア・トリブーナ



初期の日本農業移民—バタタの植付けでの共同作業。

紙は、「オス・アマレーロス（黄色人）を導入することへの不安」を報じており、以後、日本移民導入に対する賛否両論は、戦後にいたるまで、その時代背景によって、たびたび提議されることになる。

笠戸丸で移住した契約移民165家族781名が各耕地に配耕されてからの経過をみると、各耕地ともに耕主側と争議を起こして脱耕、退耕をくりかえしている。第1回移民で契約をまっとうしたのは、4分の1にもみたなかった。争議の主な理由は「コーヒー樹が古く収穫量が少ないため、採集賃金が移民斡旋所で聞かされていたよりはるかに少ない」ことで、移民たちが渡航前に聞かされていた‘金は濡れ手に粟’式の誇大な宣伝と、現実とのあまりの格差によるものであった。

通訳5人男（注2）の一人、加藤順之助は、第1回移民の到着から配耕、さらに退耕にいたる経過を克明に記しているが、それによると「家族のほとんどが構成家族であり、一攫千金を夢みて、ブラジルには金の塊、ダイヤモンドのあるを信じ、随所に見出さるると思うてきた」ことが、第1回移民の失敗の原因であったと指摘している。

しかし、単身渡航が圧倒的に多かったアメリカ移民やペルー移民とちがいで、当初からサンパウロ州政府が一世帯あたり働き手が3人以上の家族移民であることを義務づけたことは、そのために形式だけの養子縁組や夫婦縁組の細工をするなど、問題を起こすもとに

なったとはいえ、コロノ（契約農）から自営農への転換を容易にし、結果的には子女の将来を考えて、定住への決意をうながすことになった。（注3）

（注1）「日本移民八十年史」34ページ。

（注2）通訳5人男と耕地名は、加藤順之助＝ドウモント耕地、平野運平＝グアタパラ耕地、峯昌＝カナーン耕地、大野基尚＝フロレスタ耕地、仁平喬＝ソブラード耕地、なお鈴木貞次郎も通訳としてサン・マルチンニヨ耕地に入っている。

（注3）「ブラジル日本移民70年史」10ページ。

*本項は主にパウリスタ新聞社『コロニア50年の歩み』（第1回移民の足どり）を参考にした。

2. 日本移民排斥の背景

日本人の海外移住の動機が、高賃金めあての出稼ぎであったのと同様に、ブラジルの場合も出稼ぎが当初の目的であった。そのため少しでも条件の良い他の農場に移動したり、職を求めて都市へ出る者、鉄道敷設工事への転出と、初期移民の流浪がはじまる。このことが日本移民は言語、風俗、習慣の違いから問題が多く、移動性がはげしくてコーヒー農

場労働者としては失格とみられ、のちに州政府補助金うち切りの遠因となった。

笠戸丸移民のサントス上陸以来、ブラジルの日本移民がたどった50年の歴史をふりかえると、時代によって、国際情勢の変化による日伯両国の国策の流れに翻弄され、ある場合には移民の側にその要因があったとしても、戦中・戦後のいまでは想像もできない排日的な状況のもとで、棄民とよばれ、蒼亡とよばれながらも、日本移民は自らの手で生活の途を切りひらき、生活の基盤をブラジルの地に築いていった。

戦前から日本人排斥の動きがくりかえされた背景には、排日移民法案を成立させたアメリカの影響もあろうし、その因となった日本軍部による中国大陸への侵攻やアジア進出の政策、また軍部による満州への移民契励策などが、ブラジルの知識層に警戒心を抱かせたこと、さらには過剰人口対策にほかならない日本政府の棄民政策によるものであった。

しかも徹底した日本精神教育を受け、錦衣帰国が念願であった大半の戦前移民の側にも、日本人排斥の因はあったのである。そのため戦前の日本移民がもっとも苦勞したのは、日本人に対する誤解と偏見との闘いであったともいえよう。

「ブラジルには人種差別はないけれども文化差別がある。ブラジルは西洋文明の伝統をつぎ、その外延にある。だから異質文明に対して文化差別がある。日本人は働らき蜂であり、働らき蟻といわれるけれども、やはり永い歴史で培った文化をもっているから、それを理

解してもらわなければいけない…」(注1)と常に語り「原始林は征服できても、文化的差別を征服することができなければ、いつまでも排日の材料は絶えないだろう…」(注2)と喝破した山本会長の先見性と理念が、戦後分裂状態にあった日系社会をまとめてサンパウロ日本文化協会を設立させ、さらに58年の移民50年祭と、文化センターの建設という大事業を始動させ、完遂させたのである。

(注1)「山本喜誉司評伝」172ページ。

(注2)「山本喜誉司評伝」100ページ。

3. 移民50年祭委員会の結成

1958年6月18日は、笠戸丸移民がサントスに上陸して満50年にあたる。すでにサンパウロ400年祭協力会の時代から、移民50年祭を行なうことを予定していた日系コロニアは、文協設立当初から準備をはじめ、日系コロニアの総意に基づく全伯的な事業として行なうべきという見地から、56年7月の理事会で「移民渡伯50周年記念事業は協会が音頭をとって、全伯から委員を募って委員会を結成すること」が決定、56年11月、南伯中央農産組合会館で開かれた創立総会において、正式に日本移民50年祭委員会が発足した。

この総会には安藤義良大使、磯野勇三総領事をはじめ4州20地方の代表76名が出席して、50年祭挙行を満場一致で可決、主催団体にはサンパウロ日本文化協会が当たることを確認し、50年祭委員会は別個の法人登録は行なわず、文協の特別委員会が担当することに決定した。会長には山本喜誉司が就任、理事には総会に出席した20地区の代表が選ばれ、1.000万クルゼイロの募金を目標に次の記念事業が発表された。

◎記念事業（58年度の対ドル換算＝ドル当りC r \$ 0. 138）

- 1、50年史編纂事業（60万クルゼイロ）
- 2、ジュケリー病棟建設費（50万クルゼイロ）
- 3、留学生日本派遣基金（100万クルゼイロ）
- 4、祭典事業＝50周年祝賀会、博覧会（日本側負担）、スポーツ祭典、芸能祭典等（200万クルゼイロ）
- 5、事務・募金費・予備費（140万クルゼイロ）

この祭典準備は1957年からはじめられ、北はアマゾンから南はリオ・グランデ・ド・スール州にいたる全ブラジルの、日系人の集団他は人数の如何にかかわらず、50年祭地方評議員会の名のもとに組織された。

地方によっては、戦後の混乱期に日本人会や青年会の組織が消滅した集団もあったが、

50年祭を機に再び組織が生まれた地域もあり、この地方評議員会の数は全伯で422に達し、地方評議員の数は4,498名におよんでいる。

4. 文化センターの建設と山本会長の訪日

文協では移民50年祭を迎えるにあたって、可能ならば日本文化センターの建設事業を早急に行ない、一部を完成させて、そこで式典を挙行したい意向もあったが、前述した事業をひかえて、さらに会館建設費を調達することは難事であった。1957年1月に開かれた50年祭委員会第1回全伯理事会では、文化センターの建設事業ならびに募金は、50年祭事業とはまったく切り離して行なうことが決議された。

しかし活動の拠点となる会館の建設は、1世が2世に贈る文化的な遺産としてもぜひ必要なもので、文協の通常事業と併行して進めるべきだという意見は、創立総会準備委員会の当時から強く、定款のなかにも次のように明記されている。

第41条 本会は適当な設備を有する自己の会館の購入または建設に努力する。

この定款の規定にしたがい、会館の建設は当初からサンパウロ日本文化協会の大きな事業目標になっていた。こうした強い要望によって、1957年5月の50年祭委員会理事

会において、記念事業として会館の建設を行なうこと、またサンパウロ日本文化協会会館とするはずだった名称も、サンパウロ日本文化センターに改称することが決められた。建設費は日本政府に記念事業補助金として申請することになり、記念事業として文化センターの建設が正式に決定した。

日本移民50年祭は、単に日系コロニアの祭典というだけでなく、43万と称した日系社会が養国ブラジルの厚遇のもとに繁栄している事実は、日本にとっても海外移住促進の面からみて、まことに意義ある祭典といえた。

この祭典の意義を日本政府および民間団体に呼びかけ、日系社会の実情紹介と、この祭典にたいする日本側の後援を確保する目的で、1956年11月、山本会長は訪日の途についた。滞在中に胃潰瘍で倒れたこともあって滞在9ヶ月、その間、政界への工作だけでなく、あらゆるチャンネルを利用して精力的にPR活動を展開した。山本会長は日本での印象を文協『会報』（第8号）で次のように記している。



アデマール市長を訪問した50年祭委員。左から山本、平田、須貝の各氏。

一略一かくて故国はのし上りつつある。日本国の視野は広くならざるを得ない。だがなかなか南米がその視野の内に確然と描きだされるところまで行っていない。我々の50年祭を良き機会として、南米を故国の視野に浮彫にしたいと私は考える。我が日系コロニアが徒にブラジルに融け込んでしまうばかりが能ではなく、立ちあがる母国の一つの支柱となることによって、日系コロニア自体も幸福となり、またそれが養国ブラジルに大きな貢献になるものであると私は考える。

同『会報』に掲載された山本会長の「後援促進に関する報告書」でも、戦争の結果、外国における日本人の移住先の大部分を失った現在、移住奨励を国策の一つとしている日本政府としては、ブラジルの日系社会に深い関心をもち、今後の発展を助長する方策をとるのは当然である…とする見解を母国政府および一般に認識させるためにも、祭典に対する後援はまず日本政府に願うべき筋合いのものと考え…と述べている。

山本会長の働きかけによって、日本政府は移民50年祭に対する協力を次のように決定した。

- 1、叙勲褒章の下付、木杯、褒状授与。
- 2、三笠宮ご夫妻による親善使節団の派遣。
- 3、移民50年史（後にコロニア実態調査に変更）編纂に対する補助。
- 4、2世留学生の増員。
- 5、文化センター建設費の補助。

山本会長は前出の報告書のあとがきで、400年祭に際しての対母国工作に比べて、今回は急所についての知識が豊富になったことを指摘しながらも「母国側にブラジルについての知識を持った人々が増加して、ブラジル日系コロニアの偉大さが母国人の間によく知れ渡ってきたことによることは争われない。げに、私の背後にある40万人の日系コロニアの実力こそ、今回の工作を容易にした主因である…」と結んでいる。

400年祭からサンパウロ日本文化協会の設立、それにつづく移民50年祭と文化センターの建設にいたる山本会長の一連の行動には、日系社会のために身命を賭して働こうという決意がみられ、山本理念に貫かれた深い洞察が感じられる。

1958年2月、藤山愛一郎外務大臣より鈴木総領事宛に「日本移民50年祭に対する援助に関する件」をもって、センター建設に対する補助金交付決定の連絡があり、この補助金をもとに50年祭委員会が第一に着手したのは、すでにセンター建設用地として移譲

協定が成立していた旧大正小学校あと(注)の所有権譲渡手続きを促進させることであった。

このように祭典準備に忙殺されると同時にセンターの建設事業も進めねばならず、事業推進のための募金も、記念事業内容が充実し強化されるにしたがい増額されたため、文化センター建設資金の調達は不可能となり、50年祭々典終了をまっけて行なうことになった。なお、この祭典のために集めた募金総額は1.436万クルゼイロ(約10万4.000ドル)に達している。

(注)戦前、日本文教普及会に対する日本政府補助金によって購入された旧大正小学校あとが、関係者の努力によって敵性財産として没収されず確保されていたため、日本文化センターを建設するという条件のもとに、文協と旧大正小学校関係者との間で移譲協定が成立し、センター建設用地の確定をみた。

5. ブラジル政府の好意

日本移民50年祭を挙げるにあたって山本会長が目標としたのは、この祭典を機会に對母国ならびに對ブラジル関係の面で、一新局面を展開すべき可能性についてであった。日本との関係については、母国官民の関心を高めるための一助として、この機を十分に活

用せねばならない。またブラジルとの関連については、当国における日本移民の歴史は他国に比べて新しく、しかも短い歴史においてさえ種々の問題を残している。もしこの祭典を機会に日伯両国に真の了解が生じるとすれば、これに過ぎる幸せはない…ということであった。

山本会長の働きかけによって、日本側はブラジル日系社会への関心を芽生えさせ、世論の盛りあがりによって皇族の訪伯が実現する。またブラジル側への工作では、2世役員の方の活動によって予期以上の成果をあげた。

クビチェック大統領は、日本移民50年祭にあたってのメッセージで、日本移民を次のように称揚している。

この移民50年祭典は単に日本人コロニアだけのものではなく、すべてのブラジル人のものである。我々は続々と来伯した日本移民がブラジルにもたらした利益を認識している。日本移民は1908年始めてブラジルの土を踏んで以来、ブラジルの活動に積極的に参加し、労働意欲だけでなく、豊富な経験をブラジルにもたらした。農業、工業両部門での日本人の経験が、我々に大きな利益を与えてくれたのである。

我々は日系ブラジル人40万の労働の結果を誇りをもって世界に知らせることができる。

この40万の日系人は、現在我々の創った文化と精神の中に完全に融合している。(略)

大統領のメッセージにつづいて、ジャニオ・クワドロス・サンパウロ州知事は、祭典当日を州の休日と布告した。またマセド・ソアーレス外務大臣は、外務省内に50年祭担当官を任命し、祭典行事に関してコロニア側との折衝に当たらせるなど、ブラジル側の好意は、祭典委員会が当初抱いていた心配をまったくの杞憂に終わらせたのであった。

新憲法制定の審議会で審議された「年齢および出身地の如何をとわず、日本移民の入国を一切禁止する」という苛酷な日本移民排斥条項挿入の危機から、わずか12年にしてこのようなブラジル官民の好意と理解を得たことは、移住の再開、工業化政策への呼応、2世層の各界への進出などが認識されたこと、さらにサンパウロ400年祭に際して示した、日系コロニアの総力をあげた協力の結実ともいえよう。

山本会長へのオールデン・ド・クルゼイロ勲章の授与は、



マセド・ソアーレス外相より山本会長へ勲章が授与された。

永年におたるブラジル農界に対する貢献と、400年祭の協力会々長としての努力、さらに50年祭委員会の主脳として日系社会の指導的立場にあるなど、日伯親善における活動が高く評価されたものである。

『ブラジル日本移民八十年史』では「日本移民50年祭は、初期移民の嘗めた辛酸、第二次大戦をはさんだ重苦しい排日の空気と不当な抑圧、戦後日系コロニアに起きた混乱に区切りをつけ、今後の日系コロニアの方向を打ち出したところに画期的な意義がある。」と評価し、「移住50年祭とそれに続く文化センターの建設は、多分に山本喜誉司会長の個人的な理念を反映したもので、この点、後の60年祭、70年祭、80年祭とはやや性格を異にしている。」(注)と指摘しているが、文化センターの建設は山本会長の遠大な理想の実現であり、日系社会の将来への指針を示すものであった。

(注) ブラジル日本移民八十年史 243ページ。

6. 三笠宮殿下の来伯

1958年6月11日、50周年祭典にご出席のため、日航機シテイ・オブ・オーサカ号で、三笠宮殿下ご夫妻がリオのガレオン空港にご到着になった。カテテ宮にクビチェック大統領を訪問された三笠宮殿下は、日本政府より大統領ご贈られた大勲位菊花大授章を

伝達され、大統領からはブラジル最高の南十字星勲章が贈られた。

6月15日には大統領の招待により、建設中の新首都ブラジリアを視察、17日に大統領専用機でリオを発ち、ジャニオ州知事夫妻、マセド・ソアレス外相らブラジル側関係者および日系人約2万5,000人が出迎えたコンゴニマス空港に到着された。

6月18日、セ広場の大寺院においてモッタ枢機卿によって執り行われた50年祭記念物故者慰霊ミサには、早朝よりつめかけた参加者1万3,000人が堂内から広場まで埋めつくした。記念ミサ終了後、旧大正小学校あとの日本文化センター建設予定地において、三笠宮殿下ご夫妻ご臨席のもとに文化センターの定礎式が行なわれた。

50周年記念式典は、6月21日にイビラプエ



コンゴニマス空港に到着された三笠宮ご夫妻。



クビチェック大統領と会見される三笠宮殿下。



安東大使、山本会長、コロニア代表と両殿下（上）、セー寺院を退出される両殿下（下）。

ラの工業館で三笠宮ご夫妻、ジャニオ州知事、アデマール・デ・バーロス市長をはじめ連邦、州、市の高宮出席のもとに盛大に挙行された。この日、祭典に参集した日系人は約2万人といわれている。式典での三笠宮殿下の心のこもったメッセージは、参集者に深い感銘を与えたが、その原稿は、式典前夜に殿下ご自身で書かれたものである。次にその一節を紹介する。

私共はスール・ブラジル、バンデイランテ、並びにコチア産業組合などで拝見した立派な施設や、日本内地ではなかなか見られないような見事な生産品の数々が、決してなまやさしい労働で得られたものではないこと、それだけにまた今日の日系人諸君の素晴らしい発展が、いやが上にも尊いものであることを、つくづくと感銘した次第であります。ここに衷心より皆様のご努力に対し、敬意を表します。—略— 皆様の母国日本は戦争で非常な損害をこうむりました。しかし今日では、すでにその惨禍を克服して、戦前に優るとも劣らない発展をとげつつあります。とはいえ、一面では極度の人口過剰になやんでおります。いろいろの社会悪も、実はこの人口過剰に起因するものが決して少なくありません。このような状態にある日本に対して、ブラジル国はこの上なく輝かしい光明を投げかけて下さいました。我々日本人は、この光明を感激をもって、正しく受け取らねばならないこ

とを、私共はこの短い貴国滞在間に、身をもって体験いたしました。私共は帰国後、日本の天皇陛下はじめ官民諸君に、この感激を詳しく伝える責任があると信じております。

式典当日行なわれた移民功労者表彰では、功労者494名(注)に対する外務大臣の表彰状と木杯、笠戸丸以前の渡伯者八名、笠戸丸移民生存者152名、高齢者57名にそれぞれ表彰状と記念品が授与された。

この木杯問題では、選考に疑問ありとする不満の声が各地で起こり、鈴木総領事が「選考が杜撰であったことは認める」と発言したため、選考を依頼された祭典事務局との間で責任の所在をめぐって泥試合に発展しそうな気配になった。急遽山本会長と鈴木総領事との会合が持たれて誤解はとけ、第2次目の残り500余人は総領事館が引き受けることになったが、表面上はともかく祭典委の協力があつたことは事実で、直接担当の重松領事は矢面に立たされ気の毒であつた・・・と、田中光義パウリスタ新聞元編集長は『文協四十年史』で、当時の様子をこう記している。

「アイツにやってワシにはくれんのか」とごねる者がいるし、「当地方には該当者一人もなし」などと互いに牽制しあう日本人会もあつたりで、木杯をめぐる話題は尽きなかつた。結局、第2次506人が大使館によって決定され、告示も大使館の名で行なわれた。6ヶ

月もかけて慎重に選考されたはずなのに、開けてみたら、3人ほど氏名が重複して発表され、「両手に花ならぬ木杯組」などと話題をさらい、お租末な“おまけがついた。ソツなく一千人を選び出すなど神業でないといけない相談と同情できるが、選に漏れた人の残念そうな顔は見るに忍びなかった。

(注) 50年祭を記念して功労者1,000人に日本外務省(藤山愛一郎大臣名で)から木杯が贈られることになり、戦前移住者12万人のうち半数の6万人が一応対象となった。選考は祭典委員会が中心となって各地からの推薦に基づき調査したものを総領事館に提出し、それによって該当者が決められた。

7. 全伯で盛り上がった記念行事

三笠宮ご夫妻はスザノ、モジ、ロンドリーナ、リンス、マリリア、プレジデンテ・プルデンテ、サントスと主な日系集落地をご訪問になり、各地で熱烈な歓迎を受けられたが、ロンドリーナでは空港から市庁への沿道に約5万人の日系人が出迎えた。

記念式典の庄巻は、ピラチニンガ文化体育協会がアニヤンガバウーで催した、日本情緒の趣向をこらした20台の山車での祝賀行進で、これは全面的にブラジル側に協力させ、日系コロニアをアピールした点で、1世にはできない2世の力を示したものであった。さ

らに全伯各地で日本移民50年祭の記念行事が盛大に挙行され、州や市政府も、それらの行事におしめない援助を与えている。

50年祭委員会は、三笠宮殿下ご夫妻の来伯をピークとして、つづいてノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士夫妻、日本政府派遣の石黒忠篤元農相を団長とする農業使節団、国民使節として元駐伯大使の沢田節蔵日伯中央協会々長を迎えた。また当地の祭典と日を同じくして、6月18日には東京日比谷公会堂で、ブラジル関係諸団体によって組織されたブラジル移民50年祭々典委員会主催の記念大会が催され、さらなる日伯親善を願って沢田会長の訪伯となったものである。

この他、親善議員団、早稲田大学野球チーム、日本卓球選手団、50周年記念国際柔道大会への日本からの参加、さらにコロニア各団体の行事が行なわれ、祭典委員会と事務局の活動は繁忙をきわめた。

祭典を通じて行なわれた記念事業では、

- 1、ジュケリー精神病院への病棟建設寄贈。
- 2、サントス移民宿泊所への補助。
- 3、カンポス・ド・ジョルドン肺結核療養所への補助。
- 4、留学生派遣基金の設定。

5、日本文化センターの定礎式。

6、養老院その他への補助。

7、コロニア実態調査

など19の記念事業の他に各種展示会の開催、日本からの各祝賀使節団の歓迎など、祭典委員会の主催もしくは共催した行事は42にのぼり、後援行事は72に達し、その合計は133件、この他、全伯422の評議員会が催した記念事業、祝典行事を加えれば、まさに未曾有の一大祭典であった。

1959年2月7日、2年3ヶ月余にわたって活動をつづけた日本移民50年祭委員会は、その目的を達して解散総会が開かれた。この総会の席上、50年祭委員会の残務は一括してサンパウロ日本文化協会に移管され、後日派生する問題については、すべて文協が処理することになった。また50年祭委員会に交付された日本文化センター建設補助金も、補助交付決定通知書第14条にしたがい、文協への権利と義務が移管され、文化センター建設事業は文協の手に移ったのである。

8. ブラジル日系人実態調査

当初、50年祭の記念事業の一つとして企画されたブラジル日本移民50年史の編纂は、

実際に着手する段階になって、日系人々口さえ推算があるだけで正確な数も判っておらず、南米への日本民族の大移動の歴史を後世に残す意図からすれば、正確な数字に裏付けられた移民史の基礎資料として、実態調査を先行させるべきだとして、祭典委員会から独立して「ブラジル日系人実態調査委員会」（鈴木悌一委員長）が組織された。

調査は1958年の移民50年祭を契機にはじめられ、延べ6,000人の調査員を動員、『ブラジルの日本移民』として東大出版会から刊行されるまでに、6年の歳月と18万ドルの経費をかけて集計が行なわれた。

この実態調査は日本移民史上空前絶後の大調査で、また世界における移民研究、調査にも類をみないものである。記載の統計表だけでも411、調査の対象はブラジルの日系人全員であり、現状（人口・経済・社会・文化）と歴史的背景（移民の母国における状態、着伯時の状態、その後の推移）などを調査目的としている。

調査には日伯両政府、民間団体、学界、個人が全面協力したほか、各地の日系集団地も積極的に協力した。日系コ



実態調査の資金集めに行われたリップアの景品に寄贈されたトラクターでご気遣いの鈴木委員長。

ロニアがまだ組織されていない地方は、各新聞社の協力で資料を集め、広大な地域に分散している日系コロニアの地域区分、調査手順を決めていった。

日系集団他のなかには、すでに地区別あるいは県人別の調査を実施し、また企画しているところもあって、そうした地区からの積極的な協力が委員会を感激させた。

特に日系人口が集中しているサンパウロ市内の調査では、洗染業者組合や婦人会、2世クラブが協力、洗染業の日系会員が準備調査として、市内の各地区ごとに日系人の所在を

確かめるといふ困難な仕事を引き受け、大都会に分散している日系人をほとんど洩れなく面接調査して大きな成果をあげた。

ブラジル日系人実態調査は、当初関係者の誰もが予想しなかった大がかりな調査となり、予算不足で何度も危機に陥ったが、日本外務省、ブラジル政府の補助金、日系代議士（平田進、内山良文）個人予算からの補助、民間寄付や、変わり種ではプロレスラー力道山の興行収益の寄付などで調査を続



田村大使と石井総領事に経過状況を説明する鈴木委員長。

けることができた。(注1)『鈴木悌一・ブラジル日系社会に生きた鬼才の生涯』(7月に

人文研より刊行予定)を執筆した鈴木正威は、「こうした大規模な調査が、移民の無償の奉仕と自発的な拠金によってできたということは、当時の日系社会がいわばゲマインシャフト的な共同体の固い絆にむすばれていたからであろう」と述べ、「一国の移民が生きる全体験をあますところなく調査するという試みは、ブラジルに渡った先輩移民—たとえばドイツ移民やイタリア移民にもまったく前例がないばかりか、世界でも極めて稀である」と評価し、その意義について次のように述べている。(注2)

こうした調査の重要な意義を認めたからこそ、日本でも充分ではなかったが政府の資金援助をはじめ、調査に大きな影響を与えた泉靖一(東大助教授=当時)などの学者グループが技術援助を約し、ブラジルでは連邦の統計局や民間のコンピューター会社やジョッキー・クラブ、さらにアメリカの財団や大学など、いわば各国の官民こぞって応援を買ってでたものと思われる。

この実態調査による日系人の州別人口分布が、その後の日系人口の推移や居住地域の拡大を考察する際の原点となっている。(注3)

調査による日系人口の総数は430,135人となっており、サンパウロ州が325.

520人(75.68%)、パラナ州が78,097人(18.16%)、両州で全体の93.84%を占め、特に戦前移住した日本移民のほとんどがサンパウロ州奥地に入ったため、日系人口はサンパウロ州に集中している。1950年代は日系人の都市集中が著しくなった時代で、58年にはサンパウロ市の日系人口はすでに7万人、日系人口の16.27%となっていた。(注4)

調査時における内訳は、1世が13万9,233人、2世以下のブラジル生まれが29万0,909人となって、1世32.3%、67.7%がブラジル生まれとなっている。『ブラジルの日本移民』は資料編と記述編の2部からなり、計1,200ページにおよぶ集大成で、鈴木委員長が訪日して印刷、出版まで携わって完成させた。なお、50年祭委員会では別に記念出版として、『物故先駆者列伝』(141ページ)と『笠戸丸』(136ページ)、『五十年祭写真画報』を出版している。

(注1)『ブラジル日本移民八十年史』244ページ。

(注2)鈴木正威『鈴木悌一』(第7章・ブラジル日系人実態調査)

(注3)『ブラジル日本移民八十年史』257ページ。

(注4)1988年にサンパウロ人文科学研究所が発表した日系人口調査では、サンパウロ市の日系人口は32万自000人で、日系人口の26.5%を占め、サンパ

ウロ大都市圏をふくめると、全日系人口の約40%がサンパウロ市周辺に集中していることになる。

9. 県費留学生制度のはじまり

日本移民50年祭典委員会では記念事業に留学生日本派遣基金を設定し、これが契機となって県費留学生制度がはじまった。当時、日本政府は国費留学生制度を設けて年間2名のブラジル人を受け入れていたが、日系2世はその枠から外されていた。つまり外国人の顔をしたブラジル人だけに限られていたのである。そこで祭典委員会では往復旅費を現地負担とすることにして派遣基金を設定し、日本側に協力を要請したのである。このように日系2世の日本留学の必要性は日系社会の急務とされていた。

移民50年祭慶祝使節団の一員として来伯した三木行治岡山県知事を宿舎のニテロイ・ホテルに訪ねた藤井卓治・初代文協事務局長は、戦中戦後の暗黒時代を切りぬけた日系コロニアが今後ブラジル社会に進出するためには、日伯両語を自由にあやつり、しかも高度なヨーロッパ文明を身につけた2世のブラジルへの貢献度を高めることだとし、日本語と日本人に最も身近な2世を留学させることがより効果的であると強調して、岡山県への県費留学生制度の設置に成功した。

これが発端となって1959年、県費留学生制度が設定され、翌60年3月、はじめて岡山県への留学生2名の派遣が実施された。

文協ではこの好機をとらえて全国都道府県知事あてに、山本喜誉司会長名で同制度の採択に対する依頼状と関連資料を送付した。依頼状で山本会長は「2世のブラジル社会への進出は目覚ましいものがあり、日伯文化の交流および親善関係の増進には、2世の協力なくしてはその推進が不可能な段階にあると言えます」と述べ、当時の日系コロニアの特殊事情と日本留学の必要性を説明、次のように県費留学生の引受け方を強く要請している。

在伯同胞が幸せな日々を過ごすためには、日伯の親善関係の保持ということが必須条件であります。この親善関係の推進に欠くことの出来ないのが優秀な2世の人材であります。ややもすれば伯人の中にあって、日本人の子供であるということに劣等感を抱きがちな2世に、日系2世であるという自信と誇りを持たせるためには、優秀な日本の文化を実際に見せなければ駄目であるということが、各県費留学生、日本政府の国費留学生などによって実証されております。この様なブラジルの日系コロニアの特殊事情をよくご了解いただきまして、貴県におかれましても2世の県費留学生をお引き受け下さいますよう幾重にもお願い申し上げます。

創立間もない文協が、事業費の大半をこの奨学生制度のために費やしてきたのは、日系コロニアに教育事業の必要性を認識させるとともに、将来日系2世の果す役割を最も重要なものと考えたからで、第2次世界大戦直後の日系コロニアを震撼させた未曾有の混乱期に学齢期を迎えた2世のなかには、日系であることに劣等感をもち、日本文化の後進性を信じる2世もいて、日伯文化交流の推進力にならなければならない彼等がこれではいけないということで、2世の日本留学促進運動を文協が強力に展開したのである。

添付資料では最後に“留学制度の必要性”を、「これら留学生が帰伯してから果す役割の大きさは、今更申しあげるまでもありませんが、我々1世が万金を投じても果し得ない日伯文化の交流促進、日伯の相互理解、日系コロニアの地位の向上、そして、ややもすると停滞しがちになる日系コロニアと母国日本との互恵的共存関係の維持ということを着実に推進してくれる訳であります」と結んでいる。



県費留学生試験（1982年度）

依頼状に添付した資料では「ブラジル日系2世の日本留学の必要性」と題して、次のような内容で当時のブラジルにおける日系社会の状況をかなり克明に説明している。

①2世教育への覚醒 ②2世大学生の現況 ③2世学生の日本文化に対する考え方 ④各県とブラジル移民の繋がり ⑤日伯留学生の交換状況とその必要性。

文協では50年祭を機会に日系大学生の実態調査を全ブラジルの大学について行なっている。その結果、日本移民がはじまって1956年までの大学卒業生数(出身校169校)は790名で、内訳を見ると歯科がもっとも多く、ついで医科、工科、化学関係で、ブラジルでもっとも恵まれた職業への希望が多い。次ぎに1957年の日系学生数を見ると(在学169校)、在校生が1,159名で、既に卒業生を上まわる数字が出ており、日系大学生の激増ぶりがうかがわれる。

県費留学生・技術研修員制度の現状

1997年までは、県費留学生と技術研修生の募集(1998年度)と統一試験(日、ポ語)が文協で行われていた。また文協はASEBEX(元留学生会)と共催で、訪日する留学生や研修生を対象に、日本の生活習慣や地理・文化を知るための「日本留学生講習会」

を毎年行っている。

ブラジル都道府県人会連合会（県連）が2004年12月に刊行した『ブラジル県連』第2号では、県費留学生・技術研修員制度の現状について、「外務省の予算削減により留学生・技術研修員制度は存続の危機にあり、留学・研修員OB・OGらがつくるASEBEXでは、制度継続のための活動を行っている。」とし、「技術研修員制度の実施活用こそは、日伯両国の技術の架け橋として、ブラジル国への貢献はもとより、留学生制度とともに今後の県人会発展、さらには日系社会発展の大きな要素となることは間違いなく、日本側の理解と援助が強く望まれている」と記述している。

現在は県連がASEBEXと合同で実施する日本語模擬テストや独自で試験を実施する県人会もあるが、97年までは県費留学生試験は文協が行い、当初は外務省への選考書類送付も文協が行っていた。

現在、日本側の受け入れ体制は各県によってさまざまだが、県費留学の場合は県内の国公立大学に留学することになる。また技術研修は、県管轄の公的機関や民間企業で受け入れられている。

参考資料

『日伯交流の架け橋』ブラジル兵庫県人会 2005年。 兵庫県人会資料（196

3、64、71各年度)。

『ブラジル県連』第1号(1983年)、第2号(2004年)。『コロニア』誌125、126号。

第3章 日本文化センターの建設

1. 文化センター建設の背景

戦後13年、日本移民50年祭が行なわれた1958年頃になると、各地に日本人会や文化協会などさまざまな日系団体が設立され、日系人相互の親睦や子弟の日語教育など、それぞれ会の性格にそった活動が活発に行われるようになる。

さらに戦後再開された移住のピークを迎え、それに起因する多くの問題をふくみながらも、永住を運命的なものとして納得し、しかも経済的基盤が確立しつつあった日系社会は、荒廃した祖国から近親者をブラジルに呼び寄せたいとする気持ちを誰もが持ち、日本から“新しい血”をいれることが、祖国と自分たちとを結びつける強い絆になると考えられたのは自然のなりゆきであった。

1953年1月18日、サントス港に到着した呼寄せ独身者51名を皮切りとしてはじまった戦後移住は、辻・松原移民（自営開拓農）、養蚕・コチア青年移民（雇用農）などの計画移住と、指名呼寄せによる自由渡航があり、話題性のある前者に焦点が当てられがちだが、実際には民間の移住斡旋業者が扱った自由渡航（農業移住）の方が全体の移民数の50%を上回っている。（注1）

特に戦後移住でユニークな存在は、コチア産業組合の「コチア青年移民」と、農拓協（サンパウロ農業拓殖協同組合中央会）受け入れの「産業開発青年隊」の独身青年移住で、前者がコチア産組の下元健吉専務を中心に導入体制を整えた日系コロニア主導型であるのに対し、後者は日本政府、建設省の長沢亮太技官が作成した「国土総合開発構想」に基づく、建設省主導型であり、独特の移住形式であった。（注2）

両者ともに現在も、それぞれ「コチア青年」「産業開発青年隊」の名称のもとに、強い連帯意識をもち、その行動力と組織力で、日系社会に大きな影響力を持つにいたっていることは周知のとおりである。

1955年からはじまったブラジルへの移住ブームは、1959年の7,041人をピークに、その後は減少の一途をたどり、企業の進出とともに増えた「技術移民」も、数としては大きなものとはならなかった。

前出の「ブラジル日本移民実態調査」でみるように、日本移民50年の歴史において、日系社会は人口構造の面で大きな変化がみられるが、産業構造の面をみても、質的な変貌をとげている。同調査では、全農業者の地位別構成では、1937年に35.5%であった自作農は、42年には44.9%、47年には51.1%、58年には64%と激増している。

他方、戦後の日系人の商工業界への進出は、農村経済を基盤として発展したものが多く、日系の農村人口の減少と第2次、第3次産業の増加は、戦後ブラジル政府の工業化政策にそって、同一の傾向を辿ったとみることができる。

このような社会的な背景のもとに、経済的な発展ばかりでなく、文化的な向上をも促進しなければ日系社会の健全な発展は望めないということから、サンパウロ日本文化協会が設立され、その拠点としての文化センターの建設が、協会設立当初から強く望まれていた。

当時、ポルトガル、イタリアはいうまでもなく、フランス、アメリカ、イギリス、ドイツはすでにセンターを持って活発な活動を行っており、数において日系コロニアよりはるかに少ないシリア系コロニアも、商工業界にゆるぎない地盤を築いて多くの人材を政界におくり、文化交流の面でも立派なクラブを経営して、その結束を誇示している。

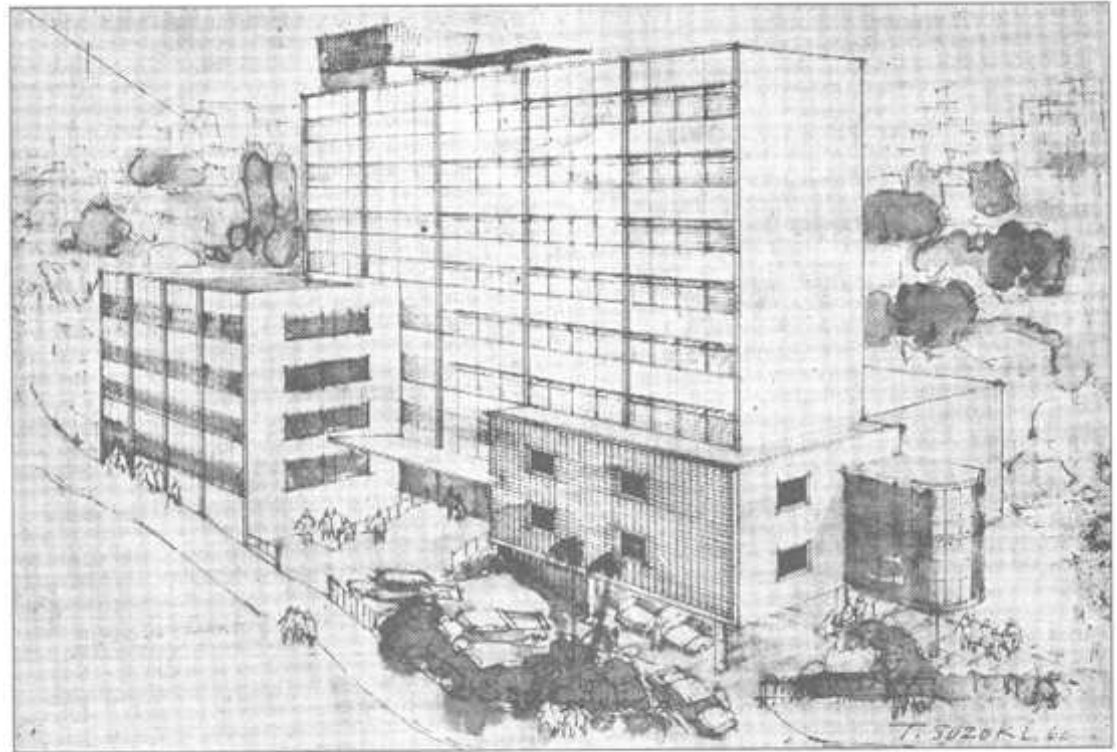
フランスやアメリカ、イギリスの文化協会は、当国での自国コロニアの親睦だけでなく、

それぞれ自国のPR活動を目的に、膨大な予算を文化面にあて、文化交流によって相互の理解と文化・経済両面の発展をもたらしている。こうした各国コロニアの活動をみると、遅ればせながら日系コロニアも、性格は異なるにしても一日も早い文化センターの建設が望まれたのは当然であった。

(注1) 日本移民八十年史
235 ページ。(注2) 同 234
ページ。

2. 建設案が決まるまで

50年祭の記念事業として日本文化センターの建設が決定したものの、日本政府に提出した補助金が交付されるまでは、建設資金を集めることは50年祭式典の募金を行なっている段階でもあり、不可能であった。



文化センター設計図、鈴木威（「コロニア」誌第26号・1960年）

1958年2月、日本政府から補助金交付の連絡をうけた山本会長は、早急に補助金受け入れ態勢を整えねばならなくなり、日本文化センター建設に着手することを発表、次のメンバーを指名して、文化センター建設特別委員会を設置した。

委員長＝山本喜誉司。

委員＝中尾熊喜、宮坂国人、中沢源一郎、平田進、鈴木悌一、鈴木威。

同年3月22日にパウリスタ新聞社サロンで開かれた総会において、山本会長からセンター建設の声明があり、文化センター建設への第一歩がふみ出されたのである。

50年祭委員会が日本政府へ申請したのは、建設予算884,000ドルの半額442,000ドルであったが、交付が認可されたのはその約五分の一の9万ドル(3,240万円)であった(注1)。この補助金をもって、すでに文化センター建設用地として移譲協定が成立していた旧大正小学校用地(注2)と、これに隣接する敷地総面積3,734平方メートルの土地が購入された。

こうして50年祭典準備のかたわら、既存家屋の取り壊しや整地に着手、6月18日の祭典当日、建設予定地において、三笠宮殿下ご夫妻臨席のもとに日本文化センターの定礎式が行なわれたのである。

このセンター建設計画は1956年のなかば、山本会長の努力によって文協内にその基

本資産設定特別委員会が設置され、大正小学校の敷地譲り受けの交渉が開かれたことからはじまったものだが、当時コロンビアの一部からは、文化センターの建設はサンパウロ日本文化協会の単なる本部だとみられがちであった。

しかし、400年祭協力会時代から50年祭、それにつづく文化センター建設にいたるまで、日系社会の中心機関としての実績をあげてきた文協が、日系社会の心のよりどころとなる拠点としての会館の実現を願って『文化センター』建設案が生まれたのである。

(注1) 補助金申請額はサンパウロ日本文化センター「アウジトリオ」建設説明書(1966年8月)参照。

(注2) 大正小学校の敷地および建物は、戦時中から戦後にかけて、マンテネドーラ・ピラチニングアの坂田、中山両氏の努力によって、敵性資産処分から免がれたもので、困難な経済事情のもとで維持され、所有権が確保されていた。



三笠宮殿下ご夫妻臨席のもとに行われた文化センター一定礎式。

「山本私案」と「宮坂私案」

1959年6月に開かれた理事会で、山本会長は次のような内容の「日本文化センター建設に関する山本私案」を発表した。

まず敷地は2.126平方メートルで、地下1階・地上13階の建物を建設。建物の使用計画では、地下にガレージ、地階に大ホール、1階サロン・デ・フィエスタ、調理室。2階は文化協会、目伯文化普及会。3階以上には地方団体聖市事務所、各県人会、2世団体など各種団体その他…となっており、建設所要資金と事業を進行させるための組織として、次の3案を提案したものであった。

【A案】文協が主体となって事業を行なうもので、そのための特別委員会を組織する必要があり、建設事業を遂行させるために自己の仕事を当分放棄せねばならず、その人選に難点がある。

【B案】日本文化センター建設会社を組織する方法。文協は特別委員会を通じて監督する。

【C案】B案のかわりに有力、誠実な建築業者に請け負わせる方法。

完成期日は資金繰りいかんによるが、事業を進行させる目標として次のように決められた。

1、地上2階までを1960年末完成。

2、それ以上の階を1961年に完成させる。

また完成後の運用については

1、日本文化協会が運用に当たる。

2、建設会社が建築完成後、管理会社となって管理する。

以上が山本私案の概要で、これに対して宮坂評議員会長から「宮坂私案」が提出された。山本私案が一举に13階建てのビルを建設するという大構想に対し、宮坂私案は最小限度に必要とするものから徐々に建築し、多年の歳月をついやして完全な文化センターを建設しようとする現実的な案で、次の3点があげられた。

1、現在の日系コロニアの現状からみて、一時に大きな物を建てることは至難である。

2、10万コントス（注）以上の仕事をするには、それに応ずる資金を少なくとも半分以上を持たねばならないが、文協にはその資金がない。

3、文協の現在および近き将来にもっとも必要なのは、約1,000人収容できるホールである。これはあらゆる集会に利用でき、一般に貸与する場合には収入を得ることができる。次に事務室、応接室、図書館をつくり、追ってそれを増大していく。

というもので、この案にそった建築の規模と予算、資金繰りが提案されている。

以上が日本文化センター建設の骨子となった案で、広く日系コロニアに紹介され、研究、討議された原案となったものである。

(注) 1942年までの貨幣単位1コント=1.000ミルレイスが、42年以後クルゼイロになった後も同様に使用された。

3. ピラチニンガ文体協への呼びかけ

日本文化センターの建設問題で議論百出、討議が重ねられている同じ時期に、2世団体のなかで代表的な団体といわれるピラチニンガ文化体育協会(ピ文体協と略)でも、独自の会館建設を決定し、一般に公表した。このため文化センターとピ文体協会館建設とが同時期となり、必然的に募金時期が重なり、建設資金の唯一の捻出方法である募金の範囲も大体層が決まっていることから、文協理事会では両者が話し合っ文化センター建設に合流してほしいという意見が大勢を占めた。

1960年6月22日、両者の代表が文化協会サロンに集まり、会館統合問題について話し合いが行われた。ピ文体協の会館建設は、第1期工事の600平方メートルの建物1棟をピニェイロスの同会本部の敷地を利用して建設するというものであった。文協としては、ピ文体協会館建設と文化センターの建設が同一目的であれば、文化センターに合流し

てはしいというのが、この会合の大きなねらいの一つであった。

当日は文協側から山本会長、中尾、中沢両副会長、大河内顧問、竹中正、須貝アメリカ、内山良文の各理事、ピラチニंगा文体協からは柳沼啓太郎会長、渡部和夫副会長、小野田ジョージ、植木茂彬、今野功の各理事が出席した。(注)

まず山本会長は、ブラジルの第一線に進出するようになった2世の成長に気づかなかった点を詫び、今後は文化センター問題にかかわらず、お互いに話し合っって仕事をしてゆきたいという希望を述べ、中沢副会長は、文化センターは1世が2世へ残し得る唯一の文化遺産だとして、「お互いが共通のものは話し合っって一つに纏めて建てたい」と合流に対する強い呼びかけを行った。中尾副会長も「建設目標と共通点があれば、どちらかに纏めることによって無駄を省きたい」と語っている。

これら文協側の要望にたいし柳沼会長は「文協の文化センター建設に反対して会館建設にふみきったのではなく、運悪く時期が重なっただけで、われわれの計画は5年前からのもので総会で決まっったことであり、中止することは難しい」と述べ、ピ文体協側の立場を説明した。

また両会の存立目的では、ピ文体協の第1目的はブラジル人としての意識に目覚めていない2世を、立派なブラジル人に育成することにあり、第2目的である日本文化の紹介に

は現段階では手がとどかず、第1目的のみにしぼられていた。これに対し文協活動の主なものは日本文化の紹介、1世を対象とした文化的啓蒙運動で両者の存立目的は異なっており、これの一本化は不可能であるという結論に達した。

いずれにしても両会の間で意志の疎通があったので、これを機会に緊密な連絡を保ち、話し合いの機会を作るという点や、事業面でも互いに協力して事業を推進することで意見の一致をみた。ちなみにピ文体協は1950年に創設された2世団体。創立メンバーには文協との会合に出席した理事の他に、上原幸啓、翁長英雄、大竹ルイ（後述の日伯総合センター設計者）など、錚々たる顔ぶれが揃っている。

以後、文化センターの建説は、歴代会長の手によって完成に導かれることになるが、土地の買収から始まって1997年5月に9階部分が完成するまでの年月は、実に40年の歳月を費やした大事業であった。そして山本会長が構想したように、日系コロニアの日本文化紹介、普及の拠点としての使命を果してきた。いずれにしても現在まで、文協が日系社会の中心機関としての役割を果したのも、文化センターがあったればこそであろう。

前述のように、文化センター建設への参加を断ったグループ、日系コロニアと距離を置く2世インテリ層の代表とされていたピ文体協の主要メンバーが、半世紀後に文協改革の舵取りを担う主役として登場する。後述するように、同メンバーを中心とする有識者が調

査研究した結果として発表した、『20年後の日系社会と日系人との連携事業について』（JICA支援協力）で創設が提言され、日本移民100周年記念事業のメイン事業に挙げられたのがピネイロスやUSPに近いヴィラ・レオポルジーナの『日伯総合センター』構想で、全ての日系関連機関を統合した文化センター・ビルの建設である。そしてこの構想は主に1世層からの反対意見で挫折した。100周年を契機に再び表面化したともいえる1世と2世の確執、歴史は繰り返す…と言えるのかもしれない。

（注）この項は『コロニア』日本文化センター落成記念特集号（1964年）掲載の安立仙一「日本文化センターのできるまで」を参考にした。

4. 会誌『コロニア』と広報活動

1956年10月に文協の機関誌として発刊された『会報』は、1960年の22号から体裁を替えるとともに、もっとふさわしい誌名をつけてはという案がだされ、検討した結果、『コロニア』と決定。編集方針も従来の事業報告を主体としたものから、よりバラエティーにとんだ内容の編集が試みられ、表紙もカラーになって趣きを一新した。

61年の『コロニア』27号からは理事会の決議で、文化センター建設を目標とする編集方針が決まり、毎号センター建設の進捗状況を紹介してPRの積極化を計っている。

表紙のデザインも日系画家に依頼、1962年の第32号から、玉木勇治の作品を皮切りに、福島近、高岡由也、田中重人、間部学、半田知雄、沖中正男、平山利子といったコロニアを代表する画家の作品が使われ、以後、大沢道生撮影の格調高い芸術写真が表紙を飾った。

ちなみに、当時この『コロニア』誌は隔月発行で、アメリカ、カナダ、ポルトガル、ハワイ、中南米諸国の在外公館、日系人諸団体、新聞社をはじめ日本の各界へ送付して文化交流の促進に努めている。

文協マークと文化センターの標語

広報委員会では、文化センターの建設状況とその使命と意義を、ラジオ・新聞を通じて紹介、一般の理解を促すために日ポ両語のパンフレットを作成して、「文化協会の必要性」「建設の規模」「文化センターが果すべき役割」などの認識につとめ、2世やブラジル人に知らせるという啓発も積極的に行なった。

またセンター建設に対する一般の意識を盛り上げるために、全伯から標語と文協マークの募集を行ない、標語2,500句、マーク350点の作品のなかから、マークは湯田東平(ジュンジアイ市)の作品に決定、標語は委員会で選んだ10句を邦字新聞で発表、一

般の投票で選ばれた加藤弘（リンス市）の作品『みんなで作てよう我等の殿堂』が入選した。

その後、インフレの昂進で難航した文化センターの建設は、この標語を合言葉として、コロニアの総力を結集することになる。

岸総理大臣の来伯

1959年7月、ヨーロッパ、南米など11カ国訪問の途上にあった岸信介総理大臣は、24日リオ到着、27日、イビラプエラ公園内の日本館で催された歓迎会に出席。コロニア産業展を観覧した後、場外広場の台上から、つめかけた約3,000人の日系人に50年の労苦をねぎらい、日伯親善の発展を説いて激励した。

文協ではこの好機に岸総理をセンター建設予定地に案内してセンターの必要性を説明、2億円にわたる日本文化センター建設補助を文書によって申請している。



山本会長の案内でコロニア産業展を観覧する岸総理。

ここで当時のコロニアに関する主なニュースをみると、59年1月に日本移民援護協会（サンパウロ日伯援護協会の前身）が創立され、3月には移民史に大きな足跡を残したブラ拓（ブラジル拓殖組合）が解散。6月18日には50年祭の記念事業として贈ったジュケリー精神病院の病棟贈呈式が行なわれた。この病棟建設を記念事業として発表した当時、かなりの批判もあったが、数字的にみると、日本移民がブラジルに入国して以来、過去50年間に約2,500人が同病院の世話になり、59年の時点で約450名の患者が入院していた。

明るい話題としては画家の間部学が、第5回サンパウロ・ビエナールで国内大賞、第1回パリ青年ビエナールでブラウン賞（最高賞）を獲得、ブラジルにおける美術の年間総合最優秀賞である第1回レイネル賞を受賞して、国際的な画家として脚光を浴びたことである。

ブラジルの首都がリオからブラジリアに遷都された1960年11月、日伯移住民協定が調印されたが、この移住協定が発効した63年10月には、すでに戦後の移住もピークを過ぎており、協定の活用はほとんどされなかった。また61年1月には、東京で日伯文化交流を促進するための文化協定が、日本側小坂善太郎外相、ブラジル側デシオ・デ・モウラ駐日ブラジル大使によって調印されている。

こうした時期に、日系コロニアでは文化センター建設への気運が昂まり、「文化センター建設委員会」の設立が提案され、そのための「企画準備委員会」が発足、設計・監督は鈴木威技師、施工は塚本彰技師に依頼することが決まった。以後、企画準備委員会で検討した事項を理事会に提案して承認を得る方法がくりかえされ、文化センター建設案は最終的な決定案への道をたどった。

5. 建設委員会の設立

山本、宮坂両私案の発表や外務省からの督促などによって、建設案が次第に具体化しつつあった時期に、高岡専太郎博士から同氏名義で管理されていた互生会の土地3アルケールを、文化センターの建設に役立てるのであれば提供するとの申し出があった。(注1)

さらに1960年4月、元日伯農事協会所有の土地(聖市タボン区)2アルケールが正式にコチア産業組合に譲渡されることに確定し、コチア産組は100万クルゼイロを文化センターに寄付することが決定した。(注2)

このように資金面では大口寄付が二つも相つぎ、資金計画に明るい見通しがついた60年5月の理事会で、1億2,700万クルゼイロの建築予算で13階建ての日本文化センターを建設することは、現状から規模が大きすぎるとして山本私案は大巾な修正を余儀な

くされた。

従って山本会長は、理事会の意向を加味した「修正案」の作成にかかったが、これは宮坂、中沢、山本勝造の各案を参考にしたもので、現状に即した必要なものから第1期、第2期というように徐々に建設を進めるというものであった。この案の特色は、日本政府からの補助金がぜんぜん計上されていないことで、コロニアの経済力でできる範囲内で建設する方針がうちだされたことである。

しかし、後述するように、補助金申請問題は紆余曲折をたどり、計3.600万クルゼイロ（15万8.600ドル）を日本政府からの補助金によって建設することが、最終的な建設計画案として承認された。三笠宮殿下ご夫妻による定礎式以来、この最終案にいたるまで、実に2カ年の歳月をついやしたのであった。

50年祭の記念事業としてはじまった文化センターの建設は、日系コロニア全体の総意に基づいて建設すべきという声が当初から強く、従って全伯から建設委員を選出して、全伯的な性格を備えた実行機関によって行なうのが妥当だとする考えのもとに建設委員会（注3）が設立され、その発会式が1960年10月8日、シヤーフローラ・サロンで盛大に催された。

(注1) この土地は戦前、結核療養所建築予定地としてコロニアの寄付によって購入されたもの。

(注2) コチア産組と元農事協会々長・山本喜誉司との間で、土地の所属をめぐって話し合いが行なわれ、石井総領事立会いのもとに「不動産名義移転登記に関する覚書」が交換され、コチア産組の所有資産と確定したもの。

(注3) 顧問＝安東義良大使、石井総領事。委員長＝山本喜誉司。副委員長＝中尾熊喜、中沢源一郎、井上忠志。参与＝宮坂国人、蜂谷専一、大河内辰夫、大平清実、延満三五郎、村井忠三郎、太田知庸、羽瀬作良、加藤好之、後藤武夫。資金委員67名、広報委員28名、法務委員9名、財務委員6名、監査9名、地方委員57名、相談役48名、設計監督1名、施工者1名、技術顧問7名、以上合計249名。

このほか委員会の補佐機関としてサンパウロ評議員384名をもって組織された。

6. 建設工事の起工と募金活動

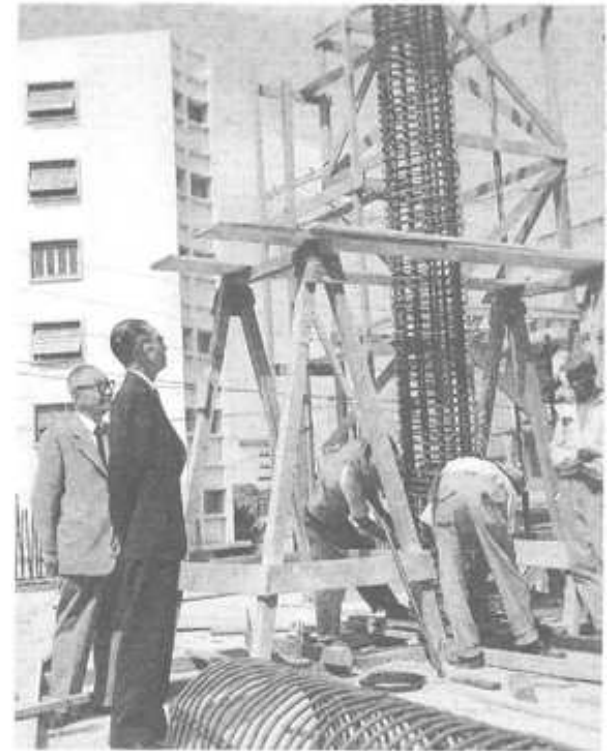
建設委員会がまず着手したのは、建設予定地にある旧家屋の取り壊し作業からで、60年10月からはじめられたが、連日の雨で工事の進捗が遅れ、1ヶ月で終了する予定の基礎工事に約3か月かかったことは、全体の進行にも大きく影響してセンターの完成を遅ら

せることになった。

募金活動では60年8月に、まず蜂谷専一個人で100万クルゼイロの寄付申出があり、これを皮切りに東山銀行、南米銀行、ジャグアレー肥料、南伯産組がそれぞれ50万、山本喜誉司、宮坂国人30万、中沢源一郎20万(各クルゼイロ)と寄付申し込みがつづき、きわめて順調な募金活動がはじめられた。

募金は好調で、60年12月には2.000万の大台に達している。しかしインフレによる建築予算の大幅修正が必要となり、目標額は当初の2.500万から61年8月には3,500万に引きあげられ、事務局では藤井事務局長を先頭に募金連絡員を各線、各州に派遣して、建設の意義を説明するとともに寄付金の勧誘につとめた。また中尾副委員長はじめ各委員が分担をきめて、寄付金獲得に奔走している。

募金活動が順調に進捗していた61年6月、文協創立以来最大の不祥事件が発生した。それは集金人による公金横領で、公金14万9.000クルゼイロの使い込みが発覚



文化センター工事現場を視察する山本初代会長

し、“衝かれた会計管理の盲点”として邦字各紙が大きく報道した。しかし、この事件は理事会の善処によって速やかな解決をみた。

こうしたコロニアの善意と陰になって働いた多くの人たちの努力によって、総額4.270万クルゼイロ（約18万8.000ドル）以上もの寄付金が寄せられたのである。

山本会長の訪日

1959年6月、山本私案が発表された当時は、コロニア独自の力で建設しようという動きが強く、日本政府の補助金を得て行なう案とで世論は二つに分かれていた。しかしセンターの使命と内容が理解されるにしたがい、補助金を仰ぐべきとする意見が全般に浸透するようになり、新聞論調にもそれが現れてくる。

こうしたコロニアの要望をになって、補助金獲得工作のため山本会長夫妻は60年10月、訪日の途についた。この訪日についてパウリスタ新聞（22・10・60）は、文化センターへの政府補助金は、その性質や将来果すべき機能などを考えると、日本側の補助は堂々と要請すべきだとする説を述べている。

一略一それは日伯両国間の文化交流という、きわめて重要な面で果すべき役割が大きく、

ただ単にコロニアの代表的殿堂であるばかりでなく、日伯両国間の深い縁と友好の象徴ともいえるからだ。その意味で、日本側からの政府補助金はもちろん、民間からも出来るだけ広く寄付を仰いで、一向に差し支えない筋合いである。—略—いま文協は山本・宮坂両氏というコロニアの元老的存在を中心として、中尾・中沢両副会長のような誠実で達識な人物が補佐、それにコロニア知名の有力有能な人士たちが協力して、次第にその基盤を固めて来ている。

これはコロニアとしてたいへん喜ばしい現象だといわなければならないが、文協の仕事、文化センターの建設について、一番大切なことは、もっと一般コロニアの積極的協力ということに違いない。—以下略—

と論じ、文協の性質と事業への理解と関心の昂まりこそ望まれるところであり、山本会長訪日に対する百万の味方となりえる…と結んでいる。

50日間にわたる滞在期間中、外務省の関係各局、政府機関、政党、マスコミ関係への工作などに奔走、その間、池田総理や吉田元総理の招待を受けた際にも文化センター補助金の件で善処方を要請するなど、山本会長の日程は多忙をきわめた。

文化センター補助金の決定

61年3月、国会中南米研究会が開催され、その席上、南条徳男代議士は、山本会長がサンパウロ日本文化センターの建設委員長として、補助金獲得のため政府および関係機関と折衝中であることを説明し、「日本移民50万のことを考え、また列国の文化会館のことを思うと、時宜に適した計画であり、外務省主管局からも努力するという言葉もあるので、本会も期待にそうよう努力したい」と述べ、田原春男代議士からは、小委員会を設けるという提案があり、いずれも満場一致で承認された。

この補助金工作は、4月に訪日した宮坂評議員会長に引き継がれ、山本会長は5月1日、帰伯の途についた。今回の訪日で山本会長にとって忘れ得ぬ思い出となったのは、天皇陛下へのご進講であった。この時の山本会長の心情は、絶筆（注）となった「天皇誕生日に寄せて」と題した祝辞のなかで、天皇一家と陛下のお人柄にふれ、ご進講申しあげたときの感想をのべたあとで、次のように文化センター建設に触れている。

『即ち今後の文協は文化センターに拠り、母国官民の理解ある支援とコロニアの協力によって、より一層文化の向上を図り、更に文化向上を通して日系コロニアの将来の向上を確保すべきであります』—略—この仕事は生き残り一世と、その方針に理解ある二世諸君と新しくブラジルへ来た移住者達が気を揃えて担当するより良い方法はないと考えます。ブラ

ジル社会に向かって前進して行かれる二世三世の方々を疎外するものでなく、そういう方々のために立派な母国との文化的つながりを用意しておきたいのが我々の願いであり、我々の意図に同調して頂くことこそ我々の希望なのであります。

山本、宮坂両氏の努力と、日伯中央協会、ラテン・アメリカ協会などの協力が実を結び、1961年12月、外務省より「小阪外務大臣と水田大蔵大臣が折衝の結果、昭和37年度政府予算案に文化センター建設補助金として3,500万円(97,220ドル)が組み込まれることが決定した」という電報が入った。

補助金申請額は22万ドルであったが、その約半額が補助金として決定をみたもので、関係者はこの朗報に喜びあった。この決定をみたかげには、党派を超えた国会中南米研究会の強力な活動があったことも見逃せない。補助金問題は一時外務省予算からはずされそうになったところを、南条代議士の斡旋で組み入れられることになり、さらに大蔵省の第1回省議で却下されたという報に、国会中南米研究会では、ただちに補助金問題を大臣折衝にもち込み、直接交渉によって復活させた…といういきさつがあったからである。

(注) 1963年4月29日の天皇誕生日祝典に出席する予定だった山本会長は、病気のため欠席。代わりに挨拶文を書いて祝辞にかえた。祝典の3ヶ月後に逝去。この文章

が絶筆となった。全文は『コロニア』誌38号に掲載されている。

7. 第1期工事の完了

日本文化センターの第1期工事は、自己資金による部分と日本政府の補助金によって建設する部分とのこつに分けられ、前者を第1期A工事、後者を第1期B工事とよんでいる。

第1期A工事は1960年10月から着工、翌61年6月に4階と外郭が完了した。4階建部分の骨組み完了を祝って、7月に建設委員会メンバーのほか労務者を中心とした棟上式が行なわれた。

同年8月には南条徳男代議士を団長とする国会中南米研究会視察団一行が、外務省の依頼でブラジルの経済問題、移住問題調査に来聖、文化センターの建設状況を視察するなど、61年度に文化センター建設現場を訪れたのは、憲法調査団の中曾根康弘代議士はじめ、政官界の要人多数が視察、いずれも建設補助金獲得への協力を約束している。

この年の9月、着任後始めてサンパウロを訪れた田付景一大使が文化センターを視察。初代駐伯大使を父とし、自身もリオ大使館に在勤したことがあり、日系コロニアに最も理解のある新大使を顧問に迎えて、建設委員会では強力に事業を推進させることになった。

募金も順調で、61年12月には寄付申込額が3.249万クルゼイロになり、うち地

方からの寄付は262万クルゼイロで総額の8%に達し、地方においてもセンター建設への関心が徐々に高まっていることを示している(注)。こうした時に文化センター建設補助金交付決定の報が、外務省から通達されたのである。

明けて62年度も、文化センターの建設で明け暮れた年だが、この年の新年祝賀会は工事が一応完了した4階建部分の地階で催され、1,000名が参加して新年祝賀会はじまって以来の盛況を呈した。

その後は仕上げ工事が急ピッチで行なわれ、完了した62年3月23日から文協本部の移転作業がはじまり、終了した25日をもって第1期A工事は一応完了した。

62年4月から第1期B工事に着手することになるが、補助金決定額が申請額の半額であったため、建設委員会で協議した結果、アウジトリオの建設を中止することに決め、予算案の再検討と建築図面の再作成が行なわれたが、外務省からは当初の計画どおりアウジトリオも兼用できるものを建設するよう要請があった。

建設委員会で審議された結論は、政府補助金で建設するのは①アウジトリオ兼用大サロン、②応接室と日本展示場、③基礎工事の3部門で、日系コロニアが内部設備費を負担することになり、当初の建設案は大巾に変更されることになった。このため建設委員会は資金繰りで苦闘することになる。しかも、外貨事情の悪化から政府は送金をおさえ、62年

10月の1回目から3回に分けて送金されたが、最後に受領したのは、建設工事がすでに完了した1963年4月であった。

(注) 1960年8月の理事会では、コロニアからの募金の割合は、サンパウロ市および近郊8割、地方2割と決めている。

吉田元総理の来伯

終戦後、敗戦によって荒廃した日本の再建に手腕をふるい、8年の長きにわたって総理として国政を担い、その後も政界に隠然たる力をもつ吉田元総理の来伯にあたって、サンパウロでは文協が中心となって、コロニアあげての歓迎を催すべく歓迎委員会を設けて準備をすすめた。

1962年5月、吉田元総理一行は、ブラジル政府の国賓としてコンゴニマス空港に到着。イビラプエラ公園の日本館で催された文協主催の歓迎会では、約1,500人の日系人がつめかけ、日本



吉田元総理の来伯を機に、アウジトリオ建設の気運がもりあがった。
写真は井上ゼルバジオ・コチア産組理事長から説明を受ける吉田元総理。

館の庭園は日伯の小国旗を手にした観衆でうずまった。カンピーナスの東山農場で一泊した吉田元総理は元気な姿を会場にみせ、歓迎の小旗に笑顔でこたえた。

山本会長は歓迎のことばで、日本再建の大業をなしとげ、今日の繁栄を築いた功績を称え、かつて北米訪問の際、同国銀行界より日本に対する融資の申し出があったのに対して、「私は金を借りるために来たのではないが、その融資を日本人の南米移住資金に充当できるのであれば借りてもよい」と返答し、その資金が基になって日本移住振興株式会社が設立されたことにふれ、さらにサンパウロ400年祭、日本移民50年祭、日本文化センター建設に対する援助に感謝、今後の協力を懇請した。

文化センター視察では、工事現場で山本会長の説明を熱心に聞き、アウジトリオの補助金問題では、山本会長がアウジトリオはぜひ日本政府の補助金で建設したいと進言すると、「6億くらいかかるのですか」と質問され、「いや、たったの6.000万円もあればよいのです」と答えるなど和やかな光景もみられた。吉田元総理の来伯は、日本の政、財界の眼をブラジルに向けさせ、日伯関係の緊密化にはかりしれない影響を及ぼしたことは言うまでもない。

文化センター建設の面でも、吉田元総理の来伯を機にアウジトリオ建設の気運が盛り上がり、正式に日本政府に対して補助金の申請が行なわれることになった。

8. 第1期B工事の完了と山本会長の逝去

当時他国の文化センターでは、諸設備を完備したアウジトリオをもって活発な文化活動を行っていた。ところが日本文化センターの場合、建設中であったアウジトリオ兼用の大サロンは、講演会や演劇用舞台などには不向きで、これらの催しを効果的に行なうには本格的なアウジトリオの建設が必要であり、日系コロニアの諸団体からもアウジトリオ建設の早期実現が強く望まれていた。

吉田元総理の来伯で具体化したアウジトリオ建設問題は、鈴木威技師を中心に研究が進められ、建設委員会によって建設規模、予算などが正式に決定し、62年7月、「日本文化センター・アウジトリオ建設補助金予算要求願い」を総領事館経由、外務省に提出されたが、63年度の日本政府予算には計上されず、以後、完成まで永い年月を要することになった。

62年7月、日本美術品展示場の外郭工事が完了した。この展示場の内部設計は当初、日本建築界の権威、前川国男博士に依頼していたが、政府補助金の交付による建築規模の縮小により、再設計を余儀なくされた。この設計変更を了解した同博士から、設計に参加した香月義徹技師がブラジルに留学しているから、同技師と連絡をとるよう指示があり、山本会長が接触した結果、同技師の設計監督担当が決まった。

香月技師の内部設計は和洋折衷の豪華なもので、第2期工事で不測の事態が発生した場合、修理が不可能であるということで、建設委員会では自己資金で4階部分の増築を決定した。ところが、この増築部分は日本政府の補助事業計画に入っていないため、日本政府の許可が必要となり、「建設補助金事業変更承認申請書」を大平外務大臣宛に提出、承認を得た。

大サロンのこけら落としともいうべき佐々木秀世代議員を団長とする議員団による講演会が催された62年10月は、政界大物の来伯がつづいた月であった。23日には小坂前外務大臣が来聖、文協主催の歓迎会で藤井事務局長が「いつも外務大臣の貴方宛に申請書を書いては、貴方からボツにされております藤井でございます」と自己紹介して、小坂前外相を苦笑させる一幕もあった。25日には清瀬一郎衆議院議長一行の南米親善訪伯議員団が来聖、『戦後の日本』と題する講演会を開催している。

また建設委員会では10月に、来聖中の裏千家・千宗興宗匠に日本美術展示場に展示する美



62年3月31日、第1期A・B工事とも一部を除いて完了した。

術品の蒐集を依頼、翌62年1月に27点の蒐集が完了したむね連絡があったが、それは時価1.000万とも2.000万ともいわれ、文協が負担した200万円は、宗匠の運動費にすぎないともいわれている。

文化センター建設工事は、資金難に悩まされながらも、日本政府に約束した3月末日までに工事を終了すべく急ピッチで工事がすすめられ、2年6ヶ月の歳月をついやして第1期A・B工事とも、美術品展示場の室内装飾の一部と、地下特別工事を除いて3月31日をもって完了した。

山本会長の逝去

ここで当時の世相を反映した明暗二つの話題をとりあげたい。まず62年8月、白昼のガルボン・ブエノ街で起こった“母娘3人殺傷事件”は、3人組の新来青年による凶行で、各方面にショックを与え、“新来青年”に対する不信感をつのらせた。

戦後の移住は1959年度をピークに以後下降をたどるが、それでも60年代初期までは、毎船かなりの独身青年が移住している。特に戦後の教育を受けた新来青年と旧移民との間に、新旧の精神的インパクトが生じたのは当然で、新移民に対する不信感が、大宅壮一が旧移民を評した「下士官根性」の下地となった。

こうしたことから都会へ流出する青年や、移住地からの脱耕者がサンパウロ市に集中するようになる。前述したように、文協が就職相談部を設けたのも、新来青年の補導と防犯が主な目的であった。

文協では事件後、理事会において移民選考の厳格化、指導その他の要望事項を日本政府に提出している。

1963年3月、第1回笠戸丸移民がジョン・ゴラル大統領より首都ブラジリアへ招待され、明るい話題をコロニアへ提供した。文協では移民55周年記念事業の一環としてこれを主催し、32名の笠戸丸移民と報道関係者や医師など計68名が、大統領差しまわしの空軍機2機に分乗してブラジリアを訪れ、大統領官邸でマリア・テ



63年3月、ジョン・ゴラル大統領の招待で、笠戸丸移民生存者がブラジリアを訪れ、大統領官邸でマリア・テレザ大統領夫人から真心のこもった款待を受けた。

レーザ大統領夫人と会見、その真心のこもった歓待は一行を感激させた。

須貝アメリコ団長が代読した大統領へのメッセージのなかで山本会長は、「建設中の日本文化センターは、日系人の文化的地位の向上と、日伯文化交流の促進を念願として建設されており、日伯文化交流の拠点となる日本文化センターの落成式には、ぜひ大統領の出席をえて盛大に行ないたい」と述べている。

63年4月の評議員会に出席以来、病床についた山本会長は、家族や医師の献身的な看病の甲斐なく、7月31日、輝かしい生涯の幕を閉じた。享年71歳、病名は肺ガンであった。

サンパウロ400年祭、文協の設立、移民50年祭、文化センターの建設と、日系コロンビアの支柱としての業績は誰もが認めるところであり、山本会長の夢の具現であった文化センターの落成式を目前にしての逝去は、日系社会の一大痛恨事であった。

告別式は文化センター大サロンにおいて、文協と東山事業の合同で行なわれ、ブラジルおよび日系社会の政、財界、文化人など1,000名が参列して故人の遺徳をしのんだ。

1963年度は移民55年祭にあたり、6月18日にセー寺院で行なわれた慰霊祭には田付大使、鶴我総領事をはじめ多数の日系人が参列した。この日、文協では「故高岡博士肖像画」(高岡由也制作)の贈呈式が行なわれた。1924年にブラジル日本人同仁会、3

5年には互生会を組織して、初期日本移民の衛生思想の普及と救護に献身、また400年祭協力会、文協の創立、さらに文化センター建設における貞献を称揚して、55年祭事業として肖像画の除幕式を行なったもので、丹治重三郎汎ノロエステ連合日本人会長より中尾熊喜副会長に肖像画の目録が贈呈された。

9. 文化センターの落成式

山本会長没後最初の理事会で、建設資金不足額1.680万クルゼイロが発表され、事業推進の困難さが予想された。この不足金の補填事業は、63年8月の理事会で満場一致で第2代会長に選ばれた中尾熊喜会長を中心に積極的な募金活動が行なわれた。

その結果、日系商社、企業、一般からの誠意ある協力を得て、予想を上回る2.041万2.000クルゼイロの寄付金が寄せられ、不足金をまかなってなお剰余金ができる成績をあげ、建設資金不足額の補填事業は終了した。

同年7月には、裏千家の千宗興宗匠に依頼していた日本美術品27点が、リオ日本大使館経由で到着。早速、スライドおよび日伯両語の解説書を作成して一般に公開された。

8月19日には全ての細部にわたる工事が完了し、塚本工事担当技師から中尾会長へ文化センターの鍵が渡された。以後、次第に内部装備も充実し、日本文化の殿堂としての体

裁を整えていった。

こうして1964年4月21日、3年の歳月と1億4.240万クルゼイロをつぎこんで建設した日本文化センターの落成式が挙行されたのであった。

式典当日は、トンプソン農務大臣、アデマール州知事夫人、ラウド・ナテル副知事、ほかブラジル側来賓、田付大使、鶴我、藤本、斎藤各総領事、平田連邦議員（下院議長代理）、

森本州議員（州議長代理）ほか各日系議員、その他約2.000名の日系人が参加して盛大な式典が催された。

また文化センター生みの親ともいえる故山本喜誉司博士に対し、田付大使より日本政府の勲三等旭日章が五十江末亡人に手渡された。

式典での挨拶で、日伯文化普及会々長のフランシスコ・マタ



1964年4月21日、新装なった大サロンで盛大に文化センターの落成式が挙行された。

ラーズ・ソブリーニョは、山本会長をしのび、その偉業をたたえる次のような感動的なことばを述べている。

一略ー50年を越すブラジルにおける日本移民史のなかで、山本氏は最もすぐれた人物であったことは誰しも認めるところであります。サンパウロ日本文化協会をはじめ、日伯文化普及会ならびに今日、日伯間の種々の交流を図る数々の団体の出現は、山本氏なくしては不可能であったでしょう。

これらの各団体と、このセンターこそ、真に山本喜誉司博士の名誉を称える記念碑であります。

いま落成される日本文化センターおよびセンター内で行なわれる各活動こそ、今後日伯両国間の文化交流を促進し、日系人をブラジル人社会に真に溶け込ませるであろうことを、私は信じて疑わないのであります。

(注) この章は主に『コロニア』(日本文化センター落成記念特集号ー1964年)に掲載の安立仙一「日本文化センターのできるまで」を参考にした。

第4章 皇太子殿下ご夫妻の訪伯

1. 文化活動の推進

文化センターの落成式が行なわれた1964年は、内外に話題の多い年であった。世界の動きではフルシチョフの退陣、アメリカの大統領選挙、中国の核実験、日本では佐藤内閣の誕生、東海道新幹線の開通と東京オリンピック開催など、歴史的な出来事がつづいている。そしてブラジルでは、3月の革命でゴラル政権が倒され、カステロ・ブランコ将軍が大統領に就任して軍事政権となった。

大統領に就任して7ヵ月後に突然辞任したジャニオ・クアドロスの副大統領ジョン・ゴラルが政権について以来、その左傾政策で国内の紛争がつづき、インフレ昂進率は63年80%、64年には150%が予想されるなど、ブラジルは空前の混乱期に遭遇していた。

新政権は経済の立て直しを図り、66年にはにははインフレ率38.8%、経済成長も4.4%に回復した。

以後、軍事政権のもとに行なわれた経済政策が奏効し、やがて1970年代初頭のいわゆる「ブラジル経済の奇跡」がおとずれる。(注1)

1964年2月、ブラジルは農村最低賃金法を実施して都市への人口集中を極度に警戒し、4月からは新移住者に5,000ドルの携行資金を義務付けるなど、外国移住者の入国を制限した。また都市での労働法は3分の2法の枠が、外国人労働者への就職の門をせばめていた。

こうした厳しい状況下で第2代会長に就任した中尾熊喜会長は、1964年度事業計画の具体策を次のように発表した。

- 1、会員との連絡、親睦を密にする。
- 2、地方の日本人会、諸団体との協力を推進し、文化センター内に所在する19団体（注2）と協力して、文化活動をさらにおし進める。
- 3、会員の増加をはかる。
- 4、進出企業および日系商社との緊密化。
- 5、文協内部の充実をはかり、文化センターの利用度を高める。
- 6、日本外務省に新設が予想される文化事業部との連絡を密にし、その受入態勢をととのえる。

また新規事業としては

- 1、日語教職員講習会。
- 2、婦人講習会。
- 3、弁論大会。
- 4、地方巡回文化講演会の開催。

5、地方巡回映画の開催。6、地方の日本人会や諸団体において美術品展示会開催。7、会員親睦会の開催。8、進出企業および日系商社との緊密をはかるための懇親会。

このほかに63年度より聖美会と共催しているコロニア美術展と、全伯写真連盟との共催で反響

2. 100万コント基金の設定

日本文化センターの第1期工事が完了して、大サロンの利用者が増加するにつれて、懸案のアウジトリオ建設の早期実現を要望する声が高まってきた。もともと文化センターの建設にあたって、本格的なアウジトリオの建設は不可欠な条件であり、大サロンはアウジトリオの待合室として設計されたものであった。

1965年を迎えての所感で中尾会長は、アウジトリオの建設について、「政府補助金」だけに頼ることの懸念を述べ、50年祭当時と比べてコロニアの力も充実してきたいま、アウジトリオの建設には、「我らの殿堂」というよりも「我らの力で」という点に力を入れてやりたい…と強調している。

中沢副会長は「第1期工事が落成したばかりであり、期間において必要性が切実に感じられるようにならないければ無理」とする慎重論。これに対して延満常任理事は「アウジト

リオが建つことによって解決する問題は非常に多く、奥地の方々の要望にも応えることができ、文協とコロニアとを結びつける大きな原動力になると考える」と積極的な提案をするなど、大半は早期建設責成論だが、補助金問題についてはさまざまな意見が出された。

なかで日本政府が補助するのは当然だとする鈴木威理事は「いままでコロニアはきわめて対内的であったが、これからは大いに対外的に行動せねばならない。文化国家日本の出先機関であるわれわれ移民はやらねばならないし、日本政府はそれに対して真っ先に面倒をみるべきだ」と強硬な発言をしている。

1965年3月、第3代会長に就任した宮坂国人会長は、就任と同時に施政方針として次の三要素を含む宮坂構想を公表し、広く日系社会の協力を呼びかけた。

- 1、100万コント（1億6,400万円）基金運動の推進。（注1）
- 2、サンパウロ日本文化センター【アウジトリオ】の建設。
- 3、日語教育の普及とモデル・スクールの創設。

ここで創立以来、全伯的な広がりをもつ文化活動を目標に、日系社会の中心機関としての性格と、公益団体として行なってきた事業を具体的にあげると次のとおりである。

I. 日系社会の文化向上と相互の親睦を図るを目的としたもの。

- 1、文化センターで行なう文化講演の開催。

- 2、地方巡回講演会、座談会、文化映画巡回上映。
- 3、総領事館と共催する各種展示会。
- 4、コロニア美術展。
- 5、婦人講習会。
- 6、会誌『コロニア』の発行（毎月2,500部）
- 7、図書館の経営。
- 8、日本館の運営。
- 9、日本移民祭事業（毎年6月18日）。
- 10、日系団体催物の後援と協力。
- 11、地方日本人会聖市見学団の案内。
- 12、慈善事業への協力。
- 13、文化センターでの文化映画上映。



宮坂委員長を先頭に各地に出張して説明会を催した。

II. 2・3世を対象とした育英事業

- 1、奨学生に対する奨学金の支給。
 - 2、県費留学生、工業留学生の送り出し。

- 3、児童絵画教室の開設。
- 4、日本留学生会への援助。
- 5、日本留学生講習会の開催（約3ヶ月）。

Ⅲ. 文化センターの建設とコロニアの中心機関的役割

- 1、日本文化センター第2期工事計画。
- 2、日本から来伯の知名人の歓送迎。
- 3、日本文化センターの運営管理。
- 4、全伯的事業の推進（50年祭の挙行など）。

Ⅳ. 日伯文化交流事業

- 1、日本美術品の展示と紹介。
- 2、日本学生海外移住連盟実習生の呼寄せと就職の斡旋。
- 3、フィルムライブラリー貸与と上映。

Ⅴ. 日伯両政府への折衝事業

- 1、日本政府への補助金申請。
- 2、日本政府へ日系コロニアを代表して要望書の提出。
- 3、ブラジル州政府および連邦政府に対する日系コロニア要望事項の伝達。

以上の活動を全伯日系人を対象として行なっているが、その財源は2,200名の会員会費と会場貸与、有志の寄付金などによるもので資金的な制約があり、活動は限られた地域にしか及んでいないのが実情であった。

この状態を打開するためには、永久的に安定した資金源を確保する必要があり、文化活動基金の設定以外には適当な方法はないという結論に達し、基金設定準備委員会が設けられ、基金委員会規定と基金募集実施計画案（注2）を次のように作成した。

基金の目標額を100万コントとし、募金期間を1966年4月から68年3月までの2力年間として、基金委員会の存続を3ヵ年とする。基金の利潤は①文化事業 ②スポーツ活動 ③社会福祉活動 ④地方活動 以上の目的のために使われる。

基金委員会の組織は、サンパウロ日本文化協会の一部門とし、役員は全伯の日系コロニアを中心に構成されるもので、その役員は文協が委嘱する。役員構成は文協会長を委員長

とし、副委員長5名、参与10名、専任委員10名、常任委員50名、会計委員10名、地方委員300名、方面委員2000名を置く。

募金の方法は次のようになっている。

- 1、一時金納入。
- 2、2カ年間の長期分割納入。
- 3、冠婚葬祭時の記念寄付。
- 4、遺産処分に際しての寄付（動産および不動産）。
- 5、株券の寄付。

この基金の設定によって、安定した文化活動の資金源を確保することができ、理想的な活動を可能とすることが目的であった。

(注1) 1コント=1.000クルゼイロ。(1965年度の対ドル換算はドル当り
C r \$ 2. 2 1 5)

(注2) 基金委員会規定および基金募集実施計画案の全文は『コロニア』誌57号を参照。

3. 各団体からの協力

1966年6月18日、恒例の移民祭の日に文協基金委員会の発会式が行なわれた。この日、文協・大サロンに田付大使、近藤総領事を迎え、サンパウロ市内各区代表をはじめ州内各地代表はもとより、遠くパラナ州各地からも代表が参集し、この事業に対する力強い協力を約束した。

なお、この発会式で文協10周年記念懸賞論文の入選発表と賞品授与が行なわれ、2等入選論文「日語教育の問題点」の筆者・田中敬吾が受賞した。(1等は該当者なし。この論文は『コロニア』誌59号に掲載されている)

基金委員会では全コロニアの協力を要請するため、宮坂委員長を先頭に地方遊説隊を編成して各地へ出張し、説明会を催して趣旨の徹底に務めた結果、協力体制は急速に進展した。コロニア文化活動の基盤をなす基金の設定は、時宜をえた企画として迎えられ、まず南米銀行の1億クルゼイロを筆頭に大口寄付がつづき、募金開始3ヶ月で早くも3分の1を積み立てるという幸先よいスタートをきった。

会誌『コロニア』も、61号から体裁をかえ、基金運動を中心とする広報括動に力をいれ、大巾に増刷してコロニア全域に配布した。また基金委員会では、地方への協力要請と同時に地元サンパウロを固める意味で、市内各区での説明会を行うことを決め、市内・近

郊あわせ約2万家族の日系人を対象とした募金計画をたてて、行動を開始した。

この基金の設定は、若い世代のために日系社会の将来の繁栄を願って運動がはじめられたものであり、2世団体が関心を持ってこの事業に協力するのは当然だが、2,500名の会員を擁して特色ある活動をしているパラトードス文体協会とピラチニンガ文体協会が、それぞれ基金協力バイレを催し、その利益を拠出している。

第1回コロニア芸能祭 戦前は各植民地の入植祭や天長節(天皇誕生日)に素人芝居が



コロニア芸能祭は毎年盛大に催されている。

催されたり、浪曲師、奇術師などが小遣い稼ぎに巡業したりして、わずかに移民の郷愁を慰めていた。やがて日本で多少経験のある者や芝居気のある器用な連中が一座を組んで、邦人 集団地をまわるようになる。

本格的な芸能が表れるのは戦後のことである。終戦直後のコロニアに活気を与えたのは、まずスポーツの復興であり、戦後どっと輸入された歌謡レコードによ

る「のど自慢」の流行であった。この一時的なブームが過ぎたころから、本当の意味での芸能がコロニアに根を張り育ってきたといえる。その後コロニアの芸能は、有能な指導者に恵まれて順調な歩みをつづけている。

文協ではこうした状況を見て、コロニアの芸能人を一堂に集め、演芸会を催す企画があったが、文協そのものの土台固めが先決で、容易には具体化しなかった。その参加が多少危ぶまれたが、第1回コロニア芸能祭の開催にふみきったのは1966年10月で、サンパウロ市の芸能団体はもとより、遠くノロエステ、モジアナ方面からの参加もあって、出演した芸能人は334人、演目は209番に および、2日間で4,000人の観客が舞台を堪能した。以後、毎年盛況裡に開催されていることは周知の通りである。

4. 宮坂会長と藤井事務局長の訪日

南米銀行と提携して、ブラジルに進出している富士銀行の新社屋落成式に出席するため、66年8月に訪日した宮坂会長は、この機会にブラジル日系社会に対する認識を一層徹底させるべく、次の3件への日本側の協力と支援を強く要請することを目的に出発した。

第1に、かねてからコロニアの懸案となっている日本文化センター・アウジトリオの建

設補助について、日本政府に対する要請を推進させる。

第2に、自ら委員長となって、全伯的な運動として強力におし進めている文協基金の設定について、日本識者の協力を懇請する。

第3は、日本語の普及に関して、日本とブラジルを太いパイプでつなぎたいという念願をもって、支援を集める。

このためブラジルにおける日系社会の実情を伝え、日本からの支接がいかに必要であるかを説いてまわった。この対日工作は具体的な成果をあげるに至らなかったものの、政財界の実力者と懇談することにより、日系社会に対する理解と認識をたかめることができ、日本の対コロニア観をつかんで帰伯したことは大きな収穫といえた。

また文協創立以来、事務局長として10年間にわたり縁の下の力持ちといった役割を果し、基金委員会の事務局長も兼任する藤井事務局長が、9月に日本外務省の招きで、海外日系人研修生の資格で訪日した。研修題目は「日本在住の外国人学校教育」および「外国人に対する日本語教育」で、研修後は滞日中の宮坂会長を補佐して、対日工作に奔走し、約3ヶ月にわたる日本、ヨーロッパ旅行を経て帰伯した。

66年4月には、ブラジル都道府県人会連合会（県連と略称）が創立された。この組織は日本の「日本海外移住家族会」に対応する団体で、戦後海外から引き揚げ、ブラジルに

移住した日本人の權益を擁護する団体として設立された。初代会長の中尾熊喜は、1967年2月、第1回笠戸丸移民9名を自費で訪日させ、以後順次6回にわたって、計73名の初期移民をすべて私費で日本へ里帰りさせている。

県連がイビラプエラ公園内に建立した『日本移民開拓先没者慰霊碑』の除幕式は1975年8月に挙行され、日本から福田起夫副総理と田中龍夫衆議員議員が出席、慰霊碑には田中角栄総理の揮毫による「開拓者慰霊碑」の碑銘が刻まれている。(第2部・日本館の項参照)

現在、6月18日の『移民の日』に行なわれる慰霊碑参拝は公式行事となり、日本からの公式訪問者にとっても慰霊碑参拝は通例となっている。

5. 皇太子殿下ご夫妻の来伯

1967年5月22日から1週間にわたった皇太子殿下ご夫妻のブラジル訪問ほど、笠戸丸以来59年、日系コロニアを歓喜させたことはない。サンパウロでは日系コロニアの活動の中心地として、盛大に歓迎を行なうことになり、全伯的な皇太子殿下ご夫妻歓迎委員会を結成した。この歓迎委員会は本部委員のほか、20余部門の実行委員にわかれ、全伯から500余名の委員によって構成された。

天皇の名代としてペルー、アルゼンチン、ブラジル3カ国を国賓として訪問。首都ブラジリアには22日に到着、コスタ・エ・シルバ大統領夫妻以下ブラジル側高宮、田付大使夫妻の出迎えをうけた。

24日、サンパウロのコンゴニマス空港には約2万5,000の日系人が集まり、宿舎のオットン・パラセ・ホテル周辺は、歓迎の日系人やサンパウロ市民約10万人で埋められた。

オ・エスタード紙は「この谷間で、かつてこれほど盛大な祝典がみられたことはなかった」と報じ、フォーリヤ紙は「10万の民衆がアキヒトに拍手を送る」、ディアリオ紙「アキヒトはサンパウロがいままで示した最大の歓迎をうけた」、ディアリオ・ポプラーレ紙「サ

皇太子殿下ご夫妻のブラジル訪問



1967年5月の皇太子殿下ご夫妻のブラジル訪問ほど、ブラジル日本移民100年の歴史の中で、日系コロニアを歓迎させたことはない。戦前1世が主役を演じた最後の移民祭といわれ、バカエンブー競技場を8万の日系人で埋めた70年祭以上の盛り上がりと熱気で、日系コロニアが総力をあげて歓迎した。



CEASAの農産展でのテープカット。



アブレウ・ソドレー聖州知事と懇談される皇太子殿下。



アニャンガパワーは歓送の人波で埋まった。

ンパウロはその歩みをとどめ、街路にアキヒト皇太子を歓呼した」など、各紙が一面トップで報じたように、アニヤンガバウは歓迎の人波で身動きできないほどであった。

歓迎の最高潮は翌25日のパカエンブー競技場で挙行された歓迎式典で、この日会場は8万の日系人で埋め尽くされた。宮坂歓迎委員長は歓迎のことばで、「日系コロニアはこの国の産業近代化に、社会活動の分野に大きな基盤をつくりあげ、もはやブラジル国家の構成分子としてなくてはならぬ存在であると評価を受け、過去の労働力のみでの提供でなく、優れた日本のモラル、文化、技術をこの国に移し、新しい価値体系の創造に挑み、ブラジル国文化の形成に参与しつつある…」と述べ、ブラジル国家躍進のために努力することが、移住者に課せられた使命であり、両国の親善関係をさらに緊密化するものだとの信念を披瀝している。

C E A S A (州食料配給センター)での農産・工業展でもパカエンブー同様の賑わいを見せ、さらに文化センターをご訪問、夜はソドレー州知事主催の晚餐会が盛大に催された。ブラジルのマスコミが報じたように、このとき示されたブラジル政府および国民の厚遇と、日系社会の全力を挙げての歓迎で、未曾有の成功をおさめることができた。

皇太子殿下ご夫妻訪問の成果について、宮坂委員長は次の点を指摘している。

- 1、日伯友好関係の強化。

2、ブラジル側に日系コロニアの誠実さと協力の精神と同時に、日系コロニアの重要性を認識させた。

3、日本側に与えた効果では、貿易・企業移転・文化交流に太いパイプを敷いた。

4、日系2、3世に大きな感激を与え、協力すれば偉大な仕事ができるという、その実力を認識させた。

さらに宮坂委員長は、日系コロニアのマスコミ機関はむろんのこと、ブラジル側報道関係の絶大な協力が、日伯親善の雰囲気を一層たかめ、歓迎諸行事が成功した一因だと述べている。この点で、広報委員会（斎藤広志委員長）では「日系コロニア紹介」のポ語冊子を作成したが、ブラジル側マスコミのほとんどがこれを利用し、全文を掲載した一流紙もあった。

歓迎行事はすべて日系コロニアの寄付でまかなわれたが、寄付金総額は3億2.127万7.000クルゼイロで、すべての費用を差し引いて、なお9.200万クルゼイロの剰余金がでたことは、この歓迎に対する熟意を示すものであった。

歓迎委員会の解散総会が7月に行なわれ、中心議題である剰余金の使途審議では、「剰余金でアウジトリオを建設し、これを皇太子殿下ご来伯記念講堂としては…」とする提案がだされた。この案は、かねてより建設計画中の大講堂の地下1・2階の建築費に当てよ

うとするもので、この部分に援護協会の事務所と診療所が入り、援護協会に対しては、剰余金をコロニアに還元する意味で、永久無償貸与の形をとる。従って中沢副委員長（援協会長）の提案する救済援護案と根本的に一致するものであり、他の委員の支持もあって、剰余金はアウジトリオ建設に使用されることが決定した。

記念講堂への政府補助金

1967年11月、日本政府補助金獲得の重責を担って、宮坂会長は再度訪日の途についていた。補助金については64年以降、4回にわたって申請がだされ、政財界の大物にも陳情をつづけてきたが、一向にラチがあかず、アウジトリオ建設が『皇太子殿下ご来伯記念講堂』と名がつく以上、着工を遅らせることもできず、ついに理事会では会長に訪日を要請したのであった。

文協は日本政府に対し、総額4,000万円の申請を行なってきたが、予算復括折衝で補助金交付が認められたのは2,000万円（約55,000ドル）で、これは宮坂会長の努力が功を奏したものの。藤井事務局長宛の書簡では「半額交付が認められたのは、皇太子ご夫妻の熱狂的な歓迎に対して、政府側の“労をねぎらいたい”といった意味から来ているものとみられる」と伝えている。

6. 明治100年、移民60年祭

1968年の年頭にあたって、延満副会長は文協の将来に対するビジョンとして、次のような抱負を述べている。

一略一文協はコロニアを基盤とするコロニアのための団体である。しかし現在考えているようなコロニアは永久につづくものではなく、今後は文協運営も順次日系ブラジル人に移らなければならない。すなわち2世の時代へ進んで行く。文協も時代に応じた脱皮が必要である。さらに15年、20年先になると、文協からコロニア的要素が減退し、結局、日伯両国の文化交流に関する最大最高の民間団体へ脱皮することが必要になるだろう。

ブラジルと日本は、いろいろな面で体質構造の相対的な国柄であり、長短相補い、有無相通ずるといふ原則のもとに、ますます緊密な関係を保たねばならない。一略一

さらに文協が取り組まねばならない重要事項として、次の3点をあげている。第1は記念講堂の工事開始であり、第2は全伯的な組織拡充であり、第3は100万コント基金達成への努力である。

1968年6月18日、ブラジル日本移民60周年を祝う催しが、明治100年、移民

60年祭合同委員会および各団体の協力で挙行され、文化センター大サロンで、開拓先没者追悼仏式大法要が行なわれた。

この日、記念大講堂の定礎式が建設予定地で行なわれ、参列者の署名簿、18日付の邦字紙、故山本会長や文協関係者の写真を入れた銅製の筒を納めた後、武内神父が祝福、千葉大使、近藤総領事、宮坂委員長など関係者がセメントで「ふた」をして式を終えた。つづいて大サロンでは、建設委員会の発会式が400名の出席のもとに行なわれ、祝賀レセプションでは、マガリヤンエス・ピント外相から宮坂会長へ、南十字星勲章が贈られた。

11月には日本政府秋の叙勲で、宮坂会長に勲三等旭日中綬章、宮腰千葉太顧問に勲三等瑞宝章が贈られたが、宮坂会長へのブラジル政府からの叙勲とともに、文協に対する内外の信頼を集めた成果といえよう。

皇太子殿下ご夫妻の訪問を契機に、両国の親善関係は急速に昂まり、日本からの企業導入、技術提携も活発化する。ヴァリグ航空の日本乗り入れは、まさにこのような時代の反映で、ブラジル経済の安定を基礎に、1970年代の大阪万博以後の“世界で一番長い橋”と呼ばれた日伯関係の緊密化がはじまる。

サンパウロ日本文化協会が、ブラジル日本文化協会へと脱皮（改称）したことも、皇太

子殿下ご来伯後の情勢と無関係ではない。文協が記念講堂の建設に着手し、それに伴う100万コント基金達成に主力を集中したのも、来るべき日系社会の地位に対処するためにはほかならなかつたからである。

(注) 68年10月10日の第36回評議員会で定款改正が承認され、ブラジル日本文化協会と改称された。

7. ブラジル日本文化協会への脱皮

文協機構は、①全伯的な規模にたつ会の運営、②2世層の運営参加、③進出企業、戦後移住者の運営参加、という体制づくりで、日系社会の枠内だけの活動範囲から大きく脱皮することを意味した。2世の運営参加は、文協自身がブラジル社会の中に拡散することであり、進出企業、戦後移住者の運営参加は、古い思想の停滞する日系社会に新風を入れることであつた。

1969年3月、改称してはじめての役員改選では、宮坂会長が3選され、専任理事に準2世の今野功が起用された。旧理事会25名のうち10名が新人と入れ替わり、2世からは文協留学生会長の山内淳と実松寛が選ばれ、地方理事をふくめて全般的な勢力均衡と、理事会の若返りをねらつた人事で、体質改善を果せる顔ぶれだと好評をもって迎えられた。

記念講堂の落成式

記念講堂の建設は68年6月に鈴木威技師の設計、エンジン建設会社の施行で着工以来、順調に進捗し、70年3月、エンジン建設会社より記念講堂の地下1、2階工事の完了通知が建設委員会へ提出され、田中義数委員長らが現場を視察、工事完了を確認。所要期間23ヵ月、総工費約100万新クルゼイロをもって記念講堂および地下1、2階、延総建坪2.805平方メートルを完成させた。

1970年9月3日、待望の記念講堂落成式が挙行された。日本からは田中龍夫議員はじめ金丸信議員ら国会議員団、千葉大使、大口総領事が出席。宮坂会長は挨拶で、文協が日系コロニアの中心機関としてその機能を果たしてきたこと、さらに母国日本の急速な発展を背景に、日系諸団体の活動がますます活性化するにつれ、本格的な講堂建設への要望が昂まり、日系コロニアの総



70年9月3日、コロニア待望の記念講堂の落成式が挙行された。

意で建設されたもので、「こんご日伯両国の文化、科学、芸術の交流の場として、日系諸団体ばかりでなく、ブラジルの団体にも大いに利用していただき、日伯文化交流の拠点として役立つことを念願する…」と講堂落成の歓びを述べている。

9月5日から3日間にわたって第5回コロニア芸能祭が開かれ、ツパン、マリリア、パラナ州や地方からの出演者も多く連日満員の盛況で、記念講堂の幕開けにふさわしい華やかな賑わいをみせた。また2日間にわたって行なわれた弓場バレエ団による記念講堂落成記念公演では、バレリーナたちの若い肢体が舞台いっぱいに躍動し、満員の観衆を魅了した。

愛知外相の来伯

9月22日、愛知揆一外相を団長とする外交ミッションが日伯技術協力協定に調印のため来伯。

メジシ大統領、ギブソン・バルボーザ外相と会談。24日来聖して州政府を訪問の後、文化センター貴賓室での日系社会代表との懇談会に出席した。

ブラジル日本移民の歴史も60年を過ぎて、初期移民史の各分野で活躍した人たちが年々姿を消していく。この2年間でも次の人たちが鬼籍に入っている。

69年には、笠戸丸以前の1906年に着伯し、文協設立時から運営に参加、日系コロニアの発展に尽力した後藤武夫(1889～)。終始アリアンサ移住地にあって入植者を指導した北原地働造(1894～)。

70年には、ブレジョン植民地創設者の一人、小笠原尚衛(1870～)。1906年に着伯した移民の草分け、鈴木貞次郎(1879～)。アマゾン移住導入の功労者、汎アマゾニア日伯協会初代会長、辻小太郎。

笠戸丸以前の移民前史に登場して以来、移民の歴史とともに歩み、その行動と数多いエピソードで、特異な存在として知られた移民の草分け、鈴木貞次郎こと歌人・南樹の死は、コロニア史にひとつのピリオドがうたれた感を与えるものであった。

第5章 ブラジル日本移民70年祭

1. 企画委員会の設置

1971年4月、3期つとめた宮坂国人会長が退陣、第4代会長に延満三五郎第1副会長が選出された。宮坂前会長は「文協中興の祖」ともいわれ、文協創立以来、評議員会長、会長と15年もの間、日系社会のリーダーとして文協の基礎づくりに専念した。在任中は皇太子ご夫妻来伯歓迎、100万コト基金運動の達成、記念講堂の完成の三大事業をなしとげ、これを文協基礎づくりの完成としている。文協では、多年の功績をたたえて、初代名誉会長の称号を贈り、その祝賀パーティが5月に貴賓室で催された。

延満体制では専任理事としてはじめて2世の山内淳が選ばれ、69年末で退職した前事務局長の藤井卓治が理事として運営陣に参加した。藤井前事務局長は、サンパウロ400年祭から文協の創立以来、山本会長との結びつきが非常につよく、以後、中尾、宮坂両会長を補佐して、実質的に最も活躍したといわれた。

後任には文協創立直後の57年に就職して以来、総務部長を経て事務局次長兼事業部長の安立仙一が70年1月に就任、以後事務局長として定年退職する2003年まで、文協

の『顔』として文協7代の会長に仕えた。

1954年、鐘紡ブラジル社長として赴任して以来、日系社会との関わりを深め、戦後進出企業の代表としてはじめて文協の運営陣に参加した延満は、山本会長時代の61年に第2会計理事、63年から中尾会長時代を通じて第1常任理事、宮坂会長時代は第1副会長として会長を補佐した。

新理事会がまず手がけたのは、企画委員会と日本館運営委員会を設けたことで、企画委員会は「文協運営に関する企画」「将来の事業に対する企画」を目的とした次の4項目を提示した。

- 1、理想総合学園の運営
- 2、会員リクリエーション施設の建設
- 3、大展示場施設の建設
- 4、大駐車場施設の建設

理想学園構想については、モデルスクール案の発展的解消で、文協の最終懸案といわれるこの学校経営は、“延満時代,, にぜひ基礎づくりを果したいとするもの。またリクリエーション施設は、体育館、室内競技場を意味しているが、大展示場や駐車場とともに、文化センター裏(大正小学校と周辺の空地)に建設しようとする基礎計画として提案され

たものである。

活動資金の財源は約3,300名の会費収入、寄付金、会場費収入、事業および広告収入ならびに基金利潤の一部繰入れとなっているが、公益法人の特質上事業収入の面では多くを期待できず、いずれにしても文化活動は報酬が少なく支出がかさむ事業が多いだけに、その運営は容易ではなかった。

活動資金源では、基金発足の1966年当時の構想である100万コントは、当時約45万ドルであったが、皇太子ご夫妻歓迎、記念講堂の建設と2大事業が重なって募金活動は難航した。しかし基金保管上の利潤が加わり、名目的には目標を突破、実質的には遂行率約80%の結果を収めた。このため従来の基金委員会は基金運営委員会と改称され、より有利な運営を図ることになった。

2. 延満会長のビジョンー総合学園構想

延満会長が将来のビジョンとして発表した論文(注)のなかで、文協活動に関しては、これを短期(2～3年)と長期(5～10年)に分け、短期の場合には次の5項目をあげている。

1. 記念講堂の利用度を高める文化活動

- 2、日本館を整備充実すること
- 3、日本留学生事業の充実
- 4、美術・工芸・音楽に関する事業の振興および援助
- 5、地方巡回講演会、講習会、映画会の充実

次に長期計画については、専門的な検討をしなければ公表すべきではないとしながらも、次の案を提示してコロニアの関心を喚起した。

1、総合学園構想

サンパウロ近郊に2～3アルケール程度の土地を求め、ブラジルの学制に基づく理想的な一大総合学園を運営する構想。

- 2、文協活動の充実を図る目的で、大駐車場、図書館、大展示場などの施設の増設。
- 3、日本館美術展示場の増設。

以上の事業案を提案し、「日系人社会の将来を想うとき、文協活動も順次コロニアの域を脱し、ブラジル社会内にあつての日本文化の機関として発展するため、このような長期計画を、1世が健在な時代にぜひとも実現させて後世に伝えたい」と記述している。

総合学園構想は延満会長年来のビジョンで、すでに69年11月発行の『コロニア』誌82号の巻頭言のなかで、「遠い将来の布石として、今のうちから活動の中核となるもの

を創りあげ、文協の生命の永久化を図る必要がある。」とし、私案として西暦2,000年を期して一大総合学園を建設する構想を述べている。

また従来、提議されてきた日系文化団体の統合問題では、私見として

- 1、日本文化に関する学術的研究機関
- 2、日本文化および日本語普及事業に関する実行機関

以上二つの機関に拡充強化統合することが望ましいと述べ、日本政府に対しては「日系文化団体の健全なる発展を希望しておられるのであれば、既存団体の強化統合をすすめ、これを理想的な文化団体へと近づけていくような方向へ進んでいただきたい」と要望している。



70年祭のメイン事業として建設された移民史料館で人気がある開拓小屋内部。

この日本側への意見は、当時、大口総領事が日系社会の未来像として文化団体統合論を提議したなかで、文協を“日本人会”“コロニアの親睦団体”と定義づけ「文化センターは“娯楽センター”にし、他に対伯文化活動センター、いま一つ社交クラブのようなものをつかって“3本の柱”とすべきではないか」と示唆したことをさしている。

この発言は大きな反響を呼んだが、延満会長は前出の論文の冒頭で、文協は創立以来、会の基礎づくりに主力が向けられた結果、文化活動の面で充分であったとはいえない…としながらも「文化協会の活動目的は、会創立の当初から定款に明記されている通りであり、我々はその目的に向かって一歩ずつ前進をつづけているものであって、文化協会を“日本人会”なりと決めてかかる一部の人の言う如く背伸びした文化活動”をしているものではない」と反論している。

(注)『コロニア』誌90号掲載「文化協会の素顔」参照。

3. 文化事業の活性化

1968年に設定された「コロニア文学賞」は、コロニアの文学を奨励し、その普及と向上をはかるため、毎年1回、前年度に新聞・雑誌その他の刊行物に掲載された日本語による作品から選ばれた最優秀作品に賞を贈るというもので、作品はブラジルの風土、社会

を題材にした小説、散文、短詩型文芸のほか、文学上の顕著な業績をも対象にしており、作者はブラジル在住の日系人となっている。

第1回コロニア文学賞は、鈴木悌一、尾関興之助、武本由夫、活谷益次、宮尾進、木村義臣の6選考委員によって、川原奈美の「移殖」が選ばれ、第2回は該当作がなく、第3回は醍醐麻沙夫の「朝の予感」、第4回には、聖美会創立者の一人で文協創立以来、文化面の向上に尽力してきたコロニア画壇の重鎮、半田知雄の不朽の記録「移民の生活の歴史」が受賞した。

日本館の改修

1969年に設置された日本館改修特別委員会（委員長・蜂谷専一）では、日本財界より16,000ドル（65,536クルゼイロ）の援助と、日系コロニアからの寄付計126,000クルゼイロで改修工事を行ない、71年2月に庭園、池、展示場の第1期改修整備を完了。3月には日本から到着した美術品、32点が公開された。

1973年には日本館運営委員長にブラジル東銀の加美山頭取が就任。第2期改修工事のために「日本館改修維持運営基金」を設け、進出企業の好意的な協力で基金10万クル

ゼロ募金は予想以上の成果をあげ、工事を完成することができた。

1972年4月、ブラジル独立150年祭日系協力委員会（委員長・延満三五郎）が発足。9月には同会主催、サンパウロ市観光局後援で第1回国際民族舞踊大会が文化センター講堂で間催された。

11カ国が参加し、舞台と同じく観覧席も国際色豊かで大成功を収めた。以後この催しは毎年開催され、盛会裡につづけられている。

独立150年記念事業としては、同年11月に文協主催の美術・工芸展が開かれた。美術展は従来、聖美会主催で『コロニア展』として催されてきたもので、間部学、福島近、大竹とみえ、戦後派からは若林和男、豊田豊、楠野友繁といった国際的に活躍する画家を輩出してきた。ところが70年の第14回コロニア展を機に発展的解消をすることになり、中断していた美術展を、150年祭記念事業として文協が主催し、新たに『サロン文協』として再発足させた。



71年から始められた国際民族舞踊大会は、年々盛会裡に開催。

日系画家の美術団体「サンパウロ美術研究会」（略称・聖美会）は半田知雄、玉木勇治、高岡由也らが中心となって1935年に創設された。太平洋戦争によって一時中断されたが47年に再発足、「第1回コロニア展」が52年に開かれ、フラビオ田中、間部学、福島近、大竹トミエといったブラジル画壇を代表する画家を輩出した。さらに戦後移住の再開によって若林和男、豊田豊、楠野友繁、近藤敏、木暮光孝たちが移住、ブラジル画壇に確固とした地位を築いた。

4. コロニアの資料収集と保存

1970年代に入ると、日本移民に関する資料を集めて保存したいという考えや動きがおこる。この構想は半田知雄が提唱し、河合武夫、斎藤広志といった人文研メンバーによってはじまった。70年10月の理事会で、次年度予算編成に関する件で、大浦文雄理事が移民資料館建設案（当時は史料ではなく資料という字を用いた）を提議している。

1971年の『コロニア』誌87号では「今こそ実現のときーコロニア移民資料博物館」というテーマで資料館建設についての座談会記事を掲載、日本移民に関する資料収集、保存の必要性を提唱してコロニアの協力を呼びかけている。その結びのことばとして、編集委員長の藤井素介理事は「歴史は失われることはないが、資料は消えることがある。今な

らそれを集めることができるし、やらねばならない」とその必要性を指摘し、「この問題を日系社会における1970年代初期の一つの課題として取り上げなければならない…」と強調している。

当時、この資料館（後に史料館）建設については相当の風当たりがあった。日系社会が必要とする施設として病院、スポーツ・センター、総合学園その他の要望があったからだ。しかし、日系社会の歴史も60年を過ぎると世代の交代が進み、早急に資料の収集をはじめなければ、開拓者である1世が使った貴重な資料が散逸する恐れがあるという危惧を誰もが抱き、次第に気運が盛りあがっていった。マスコミも大きな関心を示し、世論の積極的な推進役として気運の盛りあがりにつとめた。

こうして史料館建設体制が進行していた73年、訪日した斎藤広志サンパウロ大学教授は札幌郊外の北海道開拓記念館を見学、そのユニークな展示法に強烈な衝撃を受けて帰伯。以後、史料館建設の支柱となって尽力したことは周知のとおりである。

1973年6月、移民史料館の建設を目標として、資料保存委員会が発足。日本移民に関する資料の収集、整理、保管を行うことが決まった。委員長に延満会長が就任、各委員300名と、全伯19の地方日系団体代表約400名がリストアップされ、総数700名のメンバーを擁する大委員会が組織された。

第1回資料保存委員会は73年7月に開かれ、約10年での完成を見込んだ長期計画に向かってスタートが切られたのであった。

5. 田中角栄総理一行の来伯

1973年5月に訪日した延満会長は、和田周一郎県連会長とともに田中角栄総理を訪問、「現在、日本とブラジルは経済交流は盛んだが、これからは文化、スポーツ活動でも交流を盛んにしてほしい」と要望、さらに「総合スポーツ・センター」と「総合学園」設立の必要性を強調して、文協はじめ在伯日系文化団体への認識強化につとめた。

また外務省、経団連関係者その他、各文化団体の要人と会見、二大目標実現への協力を広範囲にわたって要請、日系社会代表機関の長としての役割を果たした。しかし、この二大目標は後述するように、遅延が許されない史料館建設を優先することで先へもちこされ、74年度の事業計画としては、資料



1974年8月に来伯した田中角栄首相を迎えるガイゼル大統領とゲレイロ外相。

保存委員会による関連事業と、10万クルゼイロの基金で、日本館を整備することの二つに決められた。

73年にはコチア小学校が文協の手で永久保存されることになった。この小学校は1916年11月設立直後のコチア日本人会によって開設されたもので、土地購入の余力がなかった日本人会の苦衷を察した大地主のジョゼ・ジョルジェが「教育に使用するのであれば、永久貸与したい」と申しでて、日本人入植者を感激させたというエピソードがある。

72年に維持母体であったジョゼ・ジョルジェ文化教育会が運営にいきづまったため、文協が援助の手を差しのべ、地主側の継続貸与の承諾を得て、移民資料の収蔵庫として所有することができた。

移民史年表で73年の項をみると、この年1月、1954年以来19年間に約1万6,000名の移民を運んだ“ぶらじる丸”が、最後の航海で245名を乗せてサントスに入港。3月には、最後の移民船“にっぽん丸”がサントスに入港して、船での移住が終幕。7月には飛行機による初の移住者35名が到着して、空路移住がはじまっている。

田中総理一行の歓迎

現役では岸総理について15年ぶりに迎える田中総理一行の歓迎委員会(委員長・延満

三五郎)が74年8月に発足。同年9月20日、田中総理歓迎会が文化センターで開かれたが、定刻の1時間前にはセンター正門前に約500人、記念講堂には2,000人を越す聴衆で埋まった。総理の挨拶につづいて延満歓迎委員長から記念品が贈られ、総理揮毫の『開拓先没者慰霊碑』の碑銘が和田周一郎県連会長(歓迎副委員長)に手渡された。この日の歓迎会には、奥地からやアルゼンチン、ボリビアからも代表が出席している。

ガイゼル大統領と田中総理の間で交わされた、両国政府間の経済協力に関する覚書には「ブラジルの農業開発に対する日本側の援助」という1項が加えられており、それは日本の余剰外貨を導入して、セラードを開発しようというものであった(注)。これに関連して田中総理の「ブラジルを日本の食料基地にする」という発言が、後日ブラジル側マスコミの厳しい批判を受けた。

74年10月に開かれた歓迎委員会解散総会では、剰余金6万5,000クルゼイロが全額、史料保存委員会にふりむけられることになった。

同年10月には、文協貴賓室で『皇太子ご夫妻の肖像画』(現両陛下)奉掲式が挙行された。この肖像画奉掲は、文協が正式に宮内庁に申請したもので、フロンティア協会、国際協力事業団移住部による実行委員会によって実現した。宮永岳彦画伯(1919~1987)が、宮内庁の許可を得て制作したもので、文協での奉掲式には来伯して出席。この

作品によりブラジル政府よりグランクルース章を受章した。79年には日本芸術院賞を受賞。二紀会々長を務めるなど「光と影の華麗な作品」で知られた画伯の代表作。

4年間の在任中、延満会長は文化活動の充実に専念した。その対象も日系人だけでなく、日本館運営、サロン文協の開設、絵画教室の設置、国際民族舞踊大会の開催、工芸展、聖市の年間プランに生花展とラン展を織りこませるなど、日伯文化交流に予期以上の成果をおさめた。また日系代表機関としての特別行事としては、皇太子殿下ご夫妻の肖像画奉掲、田中総理一行の歓迎、ジョゼ・ジョルジェ文化教育会への運営参加がある。

パウリスタ新聞（10・04・75）は社説で、延満会長の功績にふれ、「延満会長は表面的に華やかな大事業には手を出さなかったが、文協本来の仕事を再検討し、着実に文化事業の充実をはかった。これまで日系コロニアだけの催しに終わっていたものを外に向



皇太子ご夫妻の肖像画奉掲式に出席した宮永岳彦画伯と岡本寅蔵夫妻。



宮永岳彦画伯の制作になる皇太子ご夫妻（現 天皇・皇后両陛下）の肖像画。

け、対ブラジル社会にも参加を呼びかけていく努力を情しまず、これが新しい事業を生む結果となった。」とその具体例をあげ、「この4年間“私”を犠牲にし、文協のために献身してきた真摯な姿勢は高く評価されるべきであろう」と論じている。

（注）コチア産業組合中央会「60年の歩み」162ページ。

6. 中沢体制の誕生と史料館の建設

第5代会長を選出する評議員会を目前にして、候補に推された橘富士雄第5副会長が辞退したため、後任会長選挙は難航し、最終的に中沢源一郎評議員会長が承諾、75年4月の評議員会で新理事会と評議員会（西村一喜会長）の役員が選出され、中沢体制の構成メンバーが決まった。

当時、文協には取り組まねばならぬ二つの大きな課題があった。一つはすでに史料の収集をはじめていた移民史料館の建設で、10年計画で建設しようとする基本方針は決まっていた。

いま一つは、下元八郎州議員の提案により、サンパウロ市郊外に10アルケールの土地を確保して、若い世代のために総合スポーツセンターを建設しようとする計画で、この案は延満会長時代から再三検討され、結果的には建設資金の目途がつかず、立ち消えになっていたものである。

中沢会長は任期中に取り組む事業として、史料館の建設を優先させることを決意、8月の理事会、評議員会において審議の結果、満場一致で承認された。建設場所として当初予定されていたコチア小学校の敷地は、地権の問題や立地条件などの理由で見送られ、文協ビルを増築して建設することに決定した。総工費450万クルゼイロ(半額は日本政府に補助を要請する)の募金は、1976年6月18日を期して開始された。

9月になると、5階分を増築して4・5・6階を日系諸団体に分譲し、7・8階を史料館とする中沢構想がまとめられた。この構想では、分譲した利益を、裏の空地に建設が予定されている駐車場の建設費に充当させるというもので、当初の文協ビル建設計画は一気に完成をみることになる。

この5階分増築計画は次の理由による。

1、建設当時の建築基準法で、5階分までの増築許可を得ていたが、この有効期間が迫っており、新建築法では取得できない。

2、当初予定の史料館2階増築のためエレベーターを設置するのは不経済である。

しかし、そのために解決しなければならない大きな問題があった。それは、文協ビルの敷地3.700平方メートルが日本政府の補助金によって購入されたものであり、文協ビル3階も同じく補助金を得て建設されたものであるため、増築し分譲するには、日本政府の許可が必要だったからである。

そこでサンパウロ総領事館を通じて、外務省に分譲許可を申請するとともに史料館建設と文協ビルの増築分譲の必要性を強く訴えた。この結果、日本政府の承認を得て具体化した増築分譲案は、75年9月の評議員会で可決され、同時に中沢会長を委員長とする増築譲渡委員会が設置された。

委員会がまとめた分譲案（注1）は、各邦字紙に発表され、購入希望の受け付けがはじめられた。当初、口頭による購入希望は分譲の総面積を上回り、明るい見通しがたったが、最終的に正式申込みをした団体は、エスペランサ婦人会、ブラジル裏千家支部、藤間流日

本舞踊学校の3団体にすぎなかった。

しかしこの問題も、援護協会、国際協力事業団、救済会の購入が決まり、当初予定していた分譲面積の全てを分譲することができた。

南伯農協中央会が1990年に刊行した『中沢源一郎・人と業績』に「ブラジル日本文化協会々長としての業績」を執筆した安立仙一は、当時の中沢会長の苦衷を、以下のように記している。

一略一締切日までには一県も購入を申し出るところはなく、それどころか最終的には県連も購入をことわり(注2)。1階分のみがやっと分譲できたという惨憺たる結果に終わったのである。この頃の中沢さんの苦悩に満ちた顔は、いまだかつて見たこともないものであった。

福田副総理の来伯

前出の中沢構想が公表された9月にさきだつ8月20日、ブラジル政府の招聘で、福田起夫副総理夫妻一行が来伯。23日、文化センターで日系社会事情説明会の席上、文協「移民史料館建設」、援協「リハビリテーション・センター建設」両企画への援助要請に対し

て、福田副総理がはっきりと「責任をもって処理します」と確約したことばが、中沢会長を力づけたであろうことは言うまでもない。

福田副総理の来伯は、ブラジル側が憂慮していたアマゾン・アルミ精錬プロジェクトなど、田中総理が約束した協力事業は忠実に守られるという確認を認めることで合意をみたもので、翌76年に決まったガイゼル大統領の訪日について副総理は「官民挙げて歓迎し、来年はブラジルの年、ガイゼル大統領の年にしたい」と述べている。

このように75年には福田副総理、倉石忠雄農相、76年には河本敏夫通産相と大物の来伯によって、日伯合弁の巨大プロジェクトは次第に煮詰まり、1976年9月のエルネスト・ガイゼル大統領夫妻の日本訪問で正式調印の運びとなった。ガイゼル大統領の訪日は、両国間の緊密化を象徴するできごとであり、日系社会にとっても大きな歓びであった。

75年6月28日、第2代文協会長、初代県連会長、サンパウロ人文科学研究所の創立者として、日系社会に大きな業績を残した中尾熊喜（75歳）が逝去。同年8月28日には、ブラジルのシュバイツァーとして日本にも知られ、日系社会では道庵先生として移住者とともに歩いた細江静男（77歳）が鬼籍に入っている。

（注1）『文協四十年史』118ページ参照。

（注2）分譲開始当初は各県人会とも非常な関心を示し、当時の和田県連会長も文

協ビル内に県連事務所を設置したいと表明したこともあって、各県人会でも購入の気運が盛りあがっていた。しかし、母県の助成金に依存する県人会にとって、支払い条件が難点とされた。

7. 史料館建設委員会の設立

ブラジル日本移民史料館の建設が決まって、中沢会長がまず着手したことは、建設委員会を組織して具体的に推進することであった。ところが、最も肝心な財務委員長の人選で難航することになる。難事業といわれ、建設資金の予測もつかないとされる財務委員長を引き受ける人物がはず、むしろ反対にブラジル経済の悪化を理由に、当分建設を見合わせるべきだとする意見が、文協主脳部の多数を占めたのである。

当時、文協が中心になって行なった募金の70%は企業からのもので、文協の会計理事で商工会議所の副会頭でもある東京銀行の宇佐美錬頭取に依頼しては…という安立事務局長の進言を受けた中沢会長の要請に、宇佐美頭取は「私を含めて進出企業はコロニアの皆様にお世話になっており、出来るだけのお手伝いをさせていただきたい。まして移民資料を保存するという有意義な仕事であれば、協力し甲斐がある」と、この大役を引受け、東京銀行の寄付として10万クルゼイロをその場で申し出て中沢会長を感激させた。

1976年1月、文協大サロンでブラジル日本移民史料館建設委員会の発会式が行なわれ、平野文夫総領事、永田良三事業団サンパウロ支部長ほか日系団体代表およそ300名が出席した。この建設委員会は総裁に吉田健三大使、副総裁・平野総領事、委員長・中沢源一郎以下およそ1,000名の委員が推薦委嘱され、次のような建設計画案が承認された。

- 1、史料館の規模＝文協ビル7・8階で1,156.14平方メートル。
- 2、建設予算＝建設費500万、資料収集費50万。計550万クルゼイロ。
- 3、資金調達計画＝日系コロニアからの募金350万、日本政府補助金200万、計550万クルゼイロ。
- 4、展示史料＝文書史料、物品史料、生活文化史料。

こうした時期に中沢会長は、史料館建設を移民70年祭の記念事業とする方針を固めていた。その発案は、ブラジル側はもとより日本側からの協力も得やすくなる、というのが主な理由であった。そして同年5月の常任理事会で「日本移民70周年記念事業に関する件」が討議され、史料館建設を70年祭のメイン事業とする案が承認された。

募金活動は大手宗教団体からの寄付が相つぐなど順調に進捗し、8月にはすでに8割に達し、9月には目標額を突破、申し込み額は410万クルゼイロに達している。しかし完

成後の運営資金のため新たに「基金」を設けることになり、日本政府の助成金以外に550万クルゼイロを集め、増額した200万を基金にまわすという方針が決められた。

76年11月、中沢会長と安立事務局長が補助金交付について政府側に陳情するため訪日、政府要人や各官庁、団体を訪ねて協力を要請した。さらにこの訪日の目的は、日本の代表的博物館といわれる国立民族学博物館、北海道開拓記念館、明治村などの見学、梅樟忠夫民族学博物館長から建設についての基礎的なアドバイスを受けること、明治村と大阪商船三井船舶にそれぞれ笠戸丸とブラジル丸模型の寄贈を要請することなどであった。

1977年1月、日本側に要請していた建設補助金は、国際協力事業団交付金の名目で5,000万円(208万クルゼイロ)が認められた。また建設予算は、設計管理を日本の丹青社に依頼するなど具体化するにつれて増額を余儀なくされ、総計1,200万クルゼイロが計上されている。このように史料館の建設は、丹青社と建設委員会との間で、基本設計、実施設計、施工管理等の契約が交わされることになり、日本の技術によって建設がはじめられたのである。

史料館建設委員会がスタートした1976年2月には、同じ趣旨でバストス開拓館建設委員会が発足。さらにパラナでも史料館建設を決定。史料収集面での競合の可能性が憂慮された。

この点について、翌77年2月に建設委員会の招聘で来伯した国立民族学博物館の梅棹博士は、「地方史料館はその地域の特色を生かした史料展示を行うとともに、レクリエーション機能を加味したものを建設すればよい。北パラナ史料館は‘北パラナ農業開拓博物館’として、北パラナのカフェーなど農業史料に重点をおけばいいのではないか。」と示唆し、地方の史料館との対抗意識をすて、サンパウロを中心とした史料館のネットワークをつくる考え方をすべきだと教示している。

文化交流の問題点

1977年3月、中南米諸国の文化活動視察と、日本との文化交流に関する調査を目的に、増田義郎東大教授をふくむ調査チーム一行7名が来聖。文協でコロニア文化団体代表との懇談会が開かれた。席上、コロニア文学会の野尻アントニオ会長は「日本文化の普及といっても、1世が健在なうちは活動をつづけられるが、2・3世層にとっては日本は外国であって、自腹を切ってまで普及する義務があるのかという意見もある。こんどは日本政府が、こうした普及に全面的に乗りださないと、日伯文化交流はかけ声だけに終わるのではないか」と述べ、日本政府の強力な援助を要望している。

『ブラジル日本移民70年史』のなかで、「戦後の日伯交流」を執筆した清谷益次は、文化、

学術面を見るかぎり、構想と企画性に富み、かつ継続的な交流の少ないことを指摘し、「日本の文化、学術を紹介し、認識を深めさせるといったことを、これを移民の側に求めるのは、いかにその経済的な地位が高まってきたとはいえ、到底不可能なことに属する。“日本文化センター”といったものを日本サイドでサンパウロ中心街に設置せよという声が、移民70年を契機として挙がってきたのもそのためである」と論じている。

この日本サイドでの『日本文化センター』設置案は、77年2月に来伯した梅棹博士が提唱、梅棹構想として反響を呼んだ。これはかつて大口総領事が提案した説と似ているが、同構想では全額日本政府負担で、サンパウロの中心地に建設するというものであった。

毎日新聞（04・08・77）の『若者を待つブラジル—梅棹忠夫氏と語る』（注）と題した対談記事のなかで「もっと文化的バックアツプを」の小見出しで、梅樟、斎藤広志の両氏はこう語っている。

斎藤 私はブラジルの学生によくこんなことを言う。ブラジルは移民で成り立っている国で、それぞれの国から、いろんなものをもってきている。ドイツ人はドイツ人の持味を、イタリア人はイタリア人の持味をもってきて徐々にブラジル文化を形成しているんだが、イタリア人がすぐにブラジル人になりきってしまうんではそれぞれの国民の持味が殺されて生きてこない。だから、2代、3代かかってもいいから、イタリア人らしいブラジル人、

日本人らしいブラジル人ができるところに意味があるんだ、と。

梅棹 その通りだ。何千年という日本の文化的伝統のなかで作られた日本人が行っているんだから。新しいブラジル文化に溶け込むんじゃないで、新しいブラジルを作る大きな要素になっている。

斎藤 その意味でも日本はもっと(ブラジル日系人社会に)文化的バックアップをしてほしい。

梅棹 そうなんだ。いま、ここで日本文化が、あの連中はもうブラジル人だから我々は知らんといえ、ほんとの“棄民”になる。ブラジル国家が未来に向かって大きく成長するために日系ブラジル人を文化的に支援しなければならない。常に日本から何かエネルギーを送らねばならない。それが新しいブラジル文化を作っていくんだ。

アメリカ合衆国はアングロサクソンとかプロテスタントとかのドミナント(支配的勢力)とマイノリティー(少数派)がはっきりして社会的に困難なことがいっぱい起こる。ブラジルにはそれがない。だから、ドイツ文化、イタリア文化と同じように日本文化が参画できる。この点が合衆国とちがう。

(注) 斎藤広志『ブラジルと日本人』65ページ

77年3月21日、宮坂国人南銀名誉頭取、文協名誉会長が逝去。享年88歳。幾別春の雅号で俳句をよくしたことで知られた。

8. 移民70年祭企画委員会の発足

1977年4月、新理事会発足と同時に新たにスポーツ委員会(竹中正委員長)を設け、竹中、峯定美副委員長(注1)の名コンビが、スポーツを通じて1世と2世層との“断絶の溝”を埋める大役を果たしてくれるものと期待された。この委員会設置案は、76年の第1回移民オリンピック開催のころから計画されていたもの。

新理事会ではこの日、移民70年祭企画委員会(中沢源一郎委員長)を発足させ、日系の主要4団体(注2)の会長、副会長、文協評議員会長、史料館収集委員長ら18名で委員会を構成した。

祭典準備はガイゼル大統領の名誉総裁就任が決まったことにより順調に進展し、1977年9月、文協サロンにおいてブラジル日本移民70年祭委員会が結成された。

委員会の構成は、名誉副総裁＝吉田健三大使、パウロ・エジジオ聖州知事、オラーボ・セツバル聖市市長。名誉顧問＝各州知事、日本側関係団体代表者。顧問＝各日系議員団、邦字新聞社社長、移住功労者とし、委員長・中沢源一郎(文協会長)以下サンパウロを中

心に約600名、地方協力委員をふくめると約1,000名の委員を選んでスタートが切られた。

発会式で承認された記念事業および予算は次のとおり。

1. 記念事業

- ①日本移民70年祭式典（パカエンブー競技場）。
- ②皇太子殿下ご夫妻の歓迎行事。
- ③先没者仏式追悼大法要（文協記念講堂）。
- ④先駆者慰霊ミサ（セ大寺院）。
- ⑤記念音楽会（市立劇場）。
- ⑥移民史料館落成式。
- ⑦日本移民70年史編纂。
- ⑧笠戸丸移民およびそれ以前の移民表彰。
- ⑨日系社会紹介パンフレットの刊行。
- ⑩全伯的な催物の後援。
- ⑪移民70年祭の歌詞とその作曲募集。

Ⅲ. 総予算 250万クルゼイロ

移民史料館の内部設計および施工を丹青社に発注したため、契約料と日本で調達する機器の購入費など5.880万円が新たに建設予算に追加されたため、祭典の募金と重なって、国内で集めることは非常に困難な状況であった。

そのため中沢会長と安立事務局長は10月に訪日して、約3週間の予定で募金活動を行ない、全国知事会（2.350万円）、経団連（3.000万円）、全中（2.000万円）、方博基金（3.000万円）、日本船舶振興会（6.400万円）を歴訪して協力を要請、さらに福田総理大臣を訪ねて、募金に必要な大蔵省の免税処置を請願した。

また東宮御所で皇太子殿下ご夫妻にお会いして、70年祭記念式典へご臨席が決定したことに対してお礼を申しあげた。

1977年12月、中沢会長は、日本移民70年祭典委員会の名誉総裁を受諾したガイゼル大統領をプラナルト宮に訪問し名誉総裁快諾を感謝した。この日、大統領は中沢会長に贈った70年祭へのメッセージのなかで、「日本人移住者とその子孫が、尊い経験と不撓不屈の精神をもって、その使命の遂行にあたり、わが国家の開発に尽したことは特記に値するものであり、さらに我々の習慣、国家目標、また生活の中に名実ともに融和している事実をここに改めて強調したい」と述べ、「今やその子孫たちは、明日のブラジルを誇りをもって、皆とともに担う国民となっております」と結び、日本移民とその子孫に対す

るブラジル国民の信頼と期待を表明している。

(注1) 峯定美(64歳)、78年逝去。マウアー組合理事長、日系陸上スポーツ界の功労者。

(注2) 文協、援協、県連、商工会議所。

9. 移民史の節目 — 移民70年祭

1978年6月18日の“ブラジル日本移民70年祭”を迎えるにあたって、サンパウロ州政府は、皇太子殿下ご夫妻の歓迎祝宴をはじめ、中沢会長ほか8名に功労賞(イピランガ勲章)の授与、サンパウロ市議会は70年祭特別委員会を設置して羽藤マリオ市会議員を委員長とし、田村幸重、松田セルソ、マリオ・アメリコ、ブラジル・ピッタの各市議が委員となり、祭典式場としてパカエンブー競技場の提供、祭典当日のバス提供、日本館に皇太子殿下ご夫妻来伯記念碑の建立、市立劇場での記念音楽会開催などに協力した。

日本側では、日本ブラジル中央協会が中心となって、海外日系人協会、ラテン・アメリカ協会など11団体で構成された移民70年祭推進委員会(土光敏夫委員長)が設立され、政府民間への協力、慶祝使節団の派遣を決定している。

また毎日新聞社は6月8日から10日まで、文化センター記念講堂で、「日伯新時代と

国際交流シンポジウム」を主催。日伯の学者、知識人を集め、三つの分科会にわかれて行なわれたこの試みは、移民70年祭を飾る最もふさわしい文化行事として評価された。

各分科会のテーマは、第1分科会「日本・ブラジルの文化交流―日系社会の役割」、第2分科会「日本・ブラジルの経済関係―その評価と展望」、第3分科会「21世紀の日本とブラジル―共通目的の模索」で、シンポジウムは座長の梅棹忠夫国立民族学博物館々長の「日本的資質で貢献を」と題した基調講演ではじめられた。

朝日新聞（16・06・78）は社説で、このシンポに関連して日系ブラジル人の若い世代には、「日系人といってもあくまでブラジル人」「日本語は外国語」という意識が急速に進んでいることをとりあげ、日伯文化交流のあり方を次のように論評している。

一略一国際協力事業団を通じての政府の日系人対策は、奨学舎、寄宿舎設立などかなりキメ細かいものがあるが、日本国民の税金を使うからには、直接日本に役立ってほしい、という日系人を在外資産視する思想が、吹っ切れていないように思われる。

しかし、移住70周年を迎える今日、なによりも心せねばならないのは、ブラジルが多元的文化のなかで社会統合を進め、21世紀に向けて、新たな文化を築きつつあることだ。その課程で隣国としての日本が、どのような協力ができるか、ブラジル人としての日系人

の自己確認にどう寄与できるかを考えねばなるまい。ー以下略ー

記念式典が行なわれた6月18日、ガイゼル大統領夫妻、皇太子ご夫妻は、文化センターでの移民史料館の開館式に臨んだ後、ガイゼル大統領は皇太子殿下とオープンカーに同乗してパカエンブー式典会場に到着、約8万の日系人で埋まった会場を一巡して万雷の拍手を浴びた。この式典の様子はNHKの衛星中継で日本全国に報道され、真夜中にもかかわらず、約2千万人がテレビから伝わる感動を共有したといわれる。



移民70年祭は、一世主導の最後の移民祭といわれた。

ガイゼル大統領は異例の長いメッセージのなかで、「移住者は独特の伝統を持っているが、これはすべてブラジル国家の形成に合流する。私が強調したいことは、日伯間は常に補完的關係にあることである」と述べ、日伯両国の補完關係、日系人の功績を称えた。

皇太子殿下は移住者への励ましと、ブラジル国民への感謝のことばを次のように述べられた。

一略一今日移住者の子孫から優れたブラジル国民が輩出し、各方面で活躍している姿は、血を分けあった日本の私共にも海を隔ててまことに力強く感じられます。この陰には移住した人々の勤勉さと、その子女に注いだ尊い努力があったことを忘れることはできません。同時に、これら日本人移住者と日系ブラジル人の今日をあらしめた陰に、ブラジルの人々の温かい配慮と協力のあったことも私共の決して忘れてはならない事実であり、ここに集まった皆さんと深い感謝を共にしたいと思います。

式典の盛りあがりが高潮に達したのは、1,200名の日系女性による踊りで、会場いっぱいに華麗なアトラクションが展開された。日本からの参加者も慶祝使節団をはじめ、多くの団体や個人が参加、その総数は1,200名にのぼっている。

70年祭での皇太子ご夫妻の来伯では、サンパウロのほかブラジリア、パラナ、サルバドール、ベレン、マナウスを歴訪されたため、歓迎の日系人数も史上最高であった。

1978年12月、70年祭委員会解散総会が開かれ、14ヶ月にわたる活動に終止符がうたれた。祭典のための募金総額は610万4.688クルゼイロに達し、これに対する協力者が約4万人で、まさに“草の根”協力であった。なお、祭典での総収入は寄付のほか記念メダル販売利益や預金利息など合わせて762万9.826クルゼイロとなっており、これに対し支出は563万346クルゼイロで、約200万クルゼイロが剰余金として残った。

この剰余金の使途については委員会も慎重をきわめ、広く意見を求めた結果、「体育館建設のための基礎工事」に当てることが決まり、70年祭記念事業は史料館のほかに、体育館建設を推進することになった。

ブラジル日本移民70年祭は、1世（戦前）移民が主導する“最後の移民祭”といわれるように、日本移民の歴史も齢70年の古希を迎えて、旧世代が主役を演じた最後の桧舞台であった。

第6章 ブラジル日本移民史料館の建設

1. 史料収集委員会の設置

1970年代のはじめ、サンパウロ人文研のメンバーが中心となって、ブラジル日本移民に関する資料を収集し、記録を保存することが真剣に討議されていた。その発案者である半田知雄は、2・3世の時代を迎えた日系社会について「移民史はこれで終わった。これからは新しい歴史の幕があく、つまりコロニア史がはじまる」と指摘、1世移民の足跡を永久に留めるために、文書資料とともに眼でみるもの、それと同時にそれを裏付ける物品資料の必要性を提唱していた。これが動機となって73年6月に資料保存委員会が結成され、いらい資料の収集と保存について一般の協力を求め、マスコミも推進役として盛りあがりに努めてきた。

75年4月、会長に就任後ただちに史料館の建設を決断した中沢会長は、「移民史の分水嶺に立つ今こそやらなければならない」とする信念からこの難事業に取り組み、当初10年後の完成を想定して進められていた史料館建設、さらに移民史の節目としての70年祭、文協ビル5階（4～8階）の増築譲渡とあわせた3大事業を、4年の任期中になしとげたことは既述のとおりである。

1976年1月、ブラジル日本移民史料館建設委員会（委員長・中沢源一郎）の発足に際して公表した建設趣意書では、日本移民の実績を史料によって保存することは、われわれの責務であるとして、次のように主張している。

日本移民も第1回笠戸丸より既に67年を経過し、日系人活動の主軸がようやく1世より2、3世に移ろうとする昨今、われわれはこれまでの日本移民の実績の数々を、単に文章のみならず、その実生活の軌跡を語る史料、言いかえれば当時の生活器具、作業器具、写真、印刷物、書簡、肖像画等の展示を介して記録保存することは、われわれ1世の責務であると痛感します。すなわちブラジル日本移民史料館を建設して、日本移民の足跡を後世の日系人のためにも、またブラジル社会のためにも末永く保存いたしたく存ずる次第であります。

ブラジルの日本移民史は、異質の言語、異質の文化をもつ一国民が全く別天地の他の国家において、概括的にみて著しい成功を収めた、世界史にも稀な移民史でありますので、ブラジルにおいても大いに研究に値する移民史といえるのであります。この史料館はその移民史研究にも資するところが最も大なるものであります。日本より当地を訪れる視察者は一目で日本移民の動向を察知、理解し得る、史料館のごときものの存在を異口同音に希望されますが、日本移民史料館はこうした研究と要求にも応えることができ

るものであります。

また不況にもかかわらず建設する理由として、つぎの4点をあげている。

- 1、この企画は3年前にはじまり、史料保存も緩慢ながら実施されつつあるが、建設の気運が盛り上がってきたので、その気運を生かすことが必要なため。
- 2、ブラジル日本移民がはじまって以来すでに68年、1世移民の老齢化、他界する者も多く、この建設を延期すれば、貴重な史料が散逸霧消する恐れがあるため。
- 3、インフレの昂進度はかなり激しく、建設費が時を追って急騰していくため。
- 4、今これを建設しなければ、人的にも時間的にも永遠にこの建設に踏み切る機会を失する恐れがあるため。

1976年4月、史料館建設委員会のなかに史料収集委員会（委員長・斎藤広志）を設置、全伯を網羅した地方委員を選任して、募金運動とあわせて史料収集に力を入れた結果、数々の貴重な史料が寄せられた。この史料収集では、各地の文化体育協会や日系団体、またコチア組合、南伯組合、中央会など組合の地方倉庫が、史料の集荷や保管、輸送面で大きな役割をはたしたことは特筆に値する。

同年9月、安立事務局長は各国コロニアの博物館調査を目的に、リオ・グランデ・ド・

スール、サンタ・カタリーナ両州のドイツ系、イタリア系の博物館（史料館）の視察を行なっている。この視察報告書は、サンパウロ総領事館を通じて外務省に送付し、日本政府助成金申請の補足説明書とされるもので、「他のコロニアにも移民史料館がある場合、その規模や建設資金はどうなっているのか、その点をはっきりしない限り助成金はだせない」という日本政府の通報にもとづいて行なわれたものである。

安立局長は「サン・レオポルドの町は90%がドイツ系、同じくカシアス・ド・スールの町は90%がイタリア系だ。つまり町の史料を残すことが、その移民の歴史を残すことになる。その意味では日系の史料館には難しい点が多い。日系コロニアは歴史も新しく、ドイツ系、イタリア系をまねるのではなく、現代的なセンスの史料館を造るべきだと感じた」と語っている。

同年4月には、1,500句にのぼる応募作から史料館標語として、次の3点が選ばれた。



ジョインビレー記念館。本館（上）と収蔵庫（下）。

子に孫に残そう移民の史料館 堀田 栄
移る世に遺す移民の史料館 樋口 敏明
開拓史未来に繋ごう史料館 陣内しのぶ

また移民史料館のシンボルマークの応募は、応募者 93 名、作品 165 点のなかから厳選された勝又グループ（サンパウロ市）の作品が決定した。

2. 梅棹博士の来伯と基本構想

史料収集は順調に進捗したが、肝心の展示設計には専門家がおらず、博物館学の権威である梅棹忠夫博士を招聘して基本構想の作成を依頼しては、という斎藤委員長の提案で、76 年 11 月に訪日した中沢会長と安立事務局長は、梅棹博士を訪ねて次のアドバイスを受けている。

- 1、博物館には展示場面積とほぼ同等の収蔵庫が必要である。
- 2、博物館の経営には莫大な維持費がかかり、このため運営基金が必要である。
- 3、博物館の展示設計は専門家でなければできないもので、そのため丹青社という専門会社を紹介するので、相談されたい。

このアドバイスのなかで③については、ブラジルの専門家優先の考えから中沢会長は関

心がうすく、丹青社を訪問した安立局長を応接したのが、その後、史料館建設にたずさわることになる佐々木朝登総括ディレクターであった。

ブラジルの技術で展示設計をやりたいという中沢会長の希望も、適任者がみつからず、76年12月に訪日した斎藤収集委員長が梅棹博士と佐々木ディレクターと締密な打合わせを行なった結果、77年2月に両氏を迎えて史料館の本格的な構想づくりがはじまった。

この梅棹博士招聘計画は、博物館は単に古い史料を陳列するだけのデッド・ミュージアムでなく、社会教育の場ともなる“生きた博物館でなければならないという、古い博物館の観念を破る梅棹構想に共鳴してのものであった。

史料館建設は趣意書にもあるように、これまでの日本移民の実績の数々を史料に基づいて記録保存し、日本移民の足跡を後世の日系人のために、またブラジル社会のために保存したい… という発想から出発している。

梅棹博士は「地球上の民族の移動を誰にでもわかりやすく見せ、理解させるというのはじめてではないか」とこの発想を評価し、基本構想については「特に強調したいことは、理論がいること、この理論とは、日本民族にとってブラジルとはなんであったか、またブラジルにとって日本民族とはなんであったか…、この両面にスポットをあて“日本文化”を背負った日本民族の新世界の形成に参加した証し、これが史料館の大きな筋としてつな

がらなければならない」と明示した。

さらに「特に繰り返し言っていることは、展示は非常に時間と金がかかること、運営・管理を十分に考えることが大切で、建てたあとの運営如何で生きもし死にもする。それには史料館を動かす学芸委員が必要で、この学芸委員を育てることも建設委員会の重要な仕事の一つであろう。歴史は止まることなく、毎日毎日つくられている。こうした歴史の流れをたえず史料館に反映させるのが学芸員の責任である。史料館はたえず生きて動いているが、これに対応できる“人づくり”が重要であることを十分に認識してほしい」と要望している。

梅棹、佐々木両氏からの展示設計への助言を得た結果、78年6月た史料館をオープンするには、時間的に一刻の猶予もゆるされない状況となっていたのである。こうして丹青社と建設委員会との間で、基本設計、実施設計、施工管理等の契約が交わされ、日本の技術で建設がはじめられた。またブラジルで調達できない資材や機器も、すべて日本で制作、購入することに決まった。

建設委員会では新たに「展示委員会」を構成、3月中に基本シナリオの原案となる展示計画書を作成して丹青社に送り、丹青社は原案を土台に当方と意見の交換をしながら展示シナリオを4月中に完成し、その後基本設計の作成に入った。

3. 展示実施シナリオの作成

1977年5月、丹青社から佐々木ディレクターと青田嘉光チーフ・デザイナーが来伯、展示委員会と検討を重ねながら、翌78年6月18日の開館を目指す史料館全体の工程を次のように決定した。

77年5月～6月＝展示基本設計、
7～8月＝展示実施シナリオ（原稿資料）、9～11月＝展示実施設計、12月～78年5月＝展示制作。

青田デザイナーは約2週間の滞在中、展示委員と1日1項目の割合で検討を行ない、「展示実施シナリオ」作成の基本的な要項を煮詰めていった。

こうしてブラジル日本移民史料館の基本テーマが次のようにまとめられた。「ブラジルに移住した日本人がその開拓と適応の歴史を通じて、この国の産業・文化・社



史料館建設委員会。右から佐々木ディレクター、梅棹博士、中沢会長、後方に斉藤博士。

会に残した足跡を記録し、やがてその子孫が先祖の事績をふまえ、しかも先祖の国日本との交流を保ちつつ、ブラジルの発展に参加し貢献できるための拠点を作る」(注1) 梅棹博士が全体の構想を練り、初代史料館々長になった斎藤広志が細部を詰めた展示内容は、次の三つのテーマに大きく分かれている。(詳細は第2部で紹介) ◎テーマA 新天地へ渡った日本人。◎テーマB 産業開発への貢献。◎テーマC 新たな進路を求めて。

予算面では、当初予定していた予算が大幅に狂い、建設費総額500万、史料収集費50万、計550万クルゼイロが750万クルゼイロとなり、77年1月には1.000万クルゼイロ、5月にはさらに1.200万クルゼイロに増額された。募金目標額変更の原因は、展示工事費、事務費、史料収集費、人件費の予想以上の支出、専門家を招聘した旅費や滞在費などの支出があげられる。

総工費は日本政府の補助金(5.000万円)、全国知事会(2.350万円)、経団連(1.590万円)、全中(1.985万円)、日本船舶振興会(6.400万円・注2)および日系進出企業、日系コロニアの拠金によって、募金総額・(円価換算)3億7.000万円(うち日本側2億325万)が史料館建設に費やされた。

史料館建設は日系コロニアの総意に基づくものだが、予算面ではそれ相当の覚悟もし、自助努力をつづけてきた。進出企業も積極的に協力し、日系コロニアも各企業、団体をは

じめ一般個人も協力券購入という形で目標達成に協力した。この寄付も、日本移民の歴史を後世に遺すという史料館建設事業に“意義”を認めたからであった。

ところがある団体の2世幹部から史料館への寄付にたいして反対意見があり、「慈善団体としての会の趣旨に反する」というのがその理由であった。この問題を取りあげた新聞記事のなかに、「シリョウカンってなんですか」と質問する箇所があり、この問題を取りあげたパウリスタ新聞(04・06・77)は「1世なら誰一人知らないものはいないであろう移民史料館建設が、2世にはほとんど知られていないとなれば問題である。」として「建設当初は、まだまだ1世が健在であり、運営管理も十分やっつけていける自信はある。しかし、開拓の精神を盛り込んだ移民史料館が2、3世に理解され、これをバックアップしていくような環境づくりが大切だと考える」と述べ、2世諸氏へのポ語によるPRは、いますぐに手をつけるべきだと論じている。

移民70年祭は戦前1世にとって「最後の移民祭」という気持ちが支配的であった。そう感じてこの移民祭に精力を傾注した1世が少なくない。そのために2、3世層へのPRが不足したことは否めない。

(注1) サンパウロ人文科学研究所「研究レポート」(1978年)

(注2) 日本船舶振興会への補助金申請は、史料館建設委員会より、完成後の運営基

金を補助してほしいむね、サンパウロ総領事館を通して外務省から運輸省船舶局長に申請されていたもの。

4. “笠戸丸” と “ぶらじる丸”

史料館への嫁入りを前に、化粧直しをしていた「あるぜんちな丸」の50分の1の模型が化粧を終え、ブラジルに行くのだからと「ぶらじる丸」に書きかえられて横浜港を出航、77年8月にサントスへ到着した。

この「ぶらじる丸」の模型（当時時価一億円といわれる豪華で精巧なものは、昭和14年に建造された「あるぜんちな丸」（ほとんどぶらじる丸”と同型）の完成を記念して造られた模型で、20年間、神奈川の江ノ島水族館に展示されていた。



ぶらじる丸贈呈式。左から和田周一郎、永田事業団支部長、中沢会長、平野総領事、野村丈吾、大石大阪商船サンパウロ代表、田村幸重の各氏。

史料館への嫁入りは、76年秋に同船を所有していた大阪商船三井船舶の福田久雄相談役（前会長）が来伯した折、中沢会長が「ぜひ史料館に展示したい」と要望したのに応えたもので、同社では、「この船は移住者の方にとって記念すべきもの。日本に置くよりもブラジルにあった方がいいだろう」と同船の寄贈を決めたという。

模型の長さ3.1メートル、巾42センチ、高さ1.42メートルで、重量は飾る台までいれて約400キロ。展示室への収納作業は午前10時からグランペーザ運輸会社によって行なわれたが、400キロを超える梱包を35トン起重機で7階まで吊り上げるという大掛かりな作業であったため、所定の位置に納まったのは午後4時過ぎであった。なお同社は創立5周年を記念して、通関手続き他全作業を無料奉仕で行なっている。

またブラジル日本移民を象徴する第1回移民船“笠戸丸”の模型は、博物館明治村（愛知県犬山市）が移民史料館へ寄贈するために制作を東京新宿の靱山船舶模型製作所に依頼、78年3月に完成した。

模型は96分の1の縮尺で、重量16キロ、制作日数約6ヶ月、制作費は300万円（約24万クルゼイロ）であった。

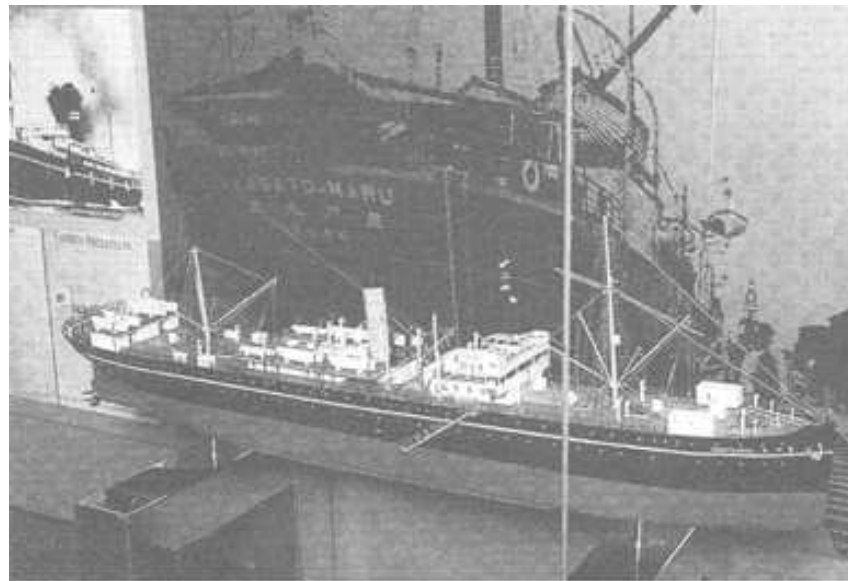
制作を担当した靱山蔵太郎は船舶模型づくりのベテランで、依頼された当初、笠戸丸についての資料がほとんどなく、笠戸丸を製造したイギリスの造船所関係に問い合わせたと

ころ、同型船の図面があったのでそれを取り寄せて設計図を引き完成させたという。

当初、史料館2階（文協ビル8階）の展示場奥には特別展示室があり、東郷青児画伯寄贈の壁画（現在9階に展示）があった。これは77年5月、サンパウロで開催された日伯現代美術展に出席した際、「筆舌に尽し難い移民の苦労話を聞いた」ことから制作を思いついたといわれ、78年2月に再来伯して、笠戸丸が着岸したサントス港の第14埠頭や、カンピーナスの東山農場のコーヒー園をスケッチ取材して制作した。

78年4月に急逝、この作品が絶筆となった。

この壁画寄贈では、「史料館の壁画は移民画家が描くべき」とする反対気運が日系中堅画家や有識者のなかから起こり、反対署名運動で署名は100名を超えた。なお署名リストは、若手画家ら代表から中沢会長に手交されている。



博物館明治村から寄贈された笠戸丸の模型。

目玉商品だった電気うなぎ

建設工事が最終段階に入った78年4月、丹青社へ依頼していた展示用資材が到着。このなかには電気うなぎを展示する特製ケースなど、当地では入手できない特殊資材、備品が含まれていた。

開館当初、移民小屋とともに史料館の目玉商品として人気があった“電気うなぎ”を展示したいきさつについて、安立事務局長が本山省三・第5代史料館々長に語った対談記事のなかで、世界の博物館で作っている縮尺模型（ジオラマ）に代わるものとして、実物大の移民小屋を再現したことや、日本の博物館では大きなテーマが終わった段階で、一時頭を休めることができる“あそび”が必要とされるが、狭い場所に70年間の史料を全部入れたものだから展示に余裕がなくなり、“あそび”の空間を作ることができなくなったため、“電気うなぎ”を展示することにした…と、次のように語っている。

安立　そこで丹青社のアイデアを入れて、7階の展示が終わった最後の段階で電気うなぎを入れたのですよ。それが丹青社のいう気分転換をはかる“あそび”のコーナーだったのです。電気うなぎを見たことのない人が多いものですから、今まで移民の歴史を追っか

けてきたのをポツと忘れて電気うなぎに見とれ、それから8階に上がって行くという感じだったので、残念ながら生き物ですから、随分苦労して餌をやったり、手入れをしたりでしたが、たいてい半年か1年くらいで死んでしまうのです。

その都度、こちらの熱帯魚を取り扱っている人から買ったり、アマゾンから取り寄せたりしましたが、なかなか大変で、本当は置きたいのですが、止めようということになったのです。

本山 この前も入館した人からすぐ、電気うなぎはどうなっているかと聞かれました。まあ、目玉商品みたいなものでしたね。

(一部省略)

確認された。というのは、万博基金より史料室（作業室、研究室、文書史料収蔵庫、館長室）の建設資金として、2.000万円（申請は3.000万円）の補助金が決定をみたが、これが78年8月現在、伯貨で約200万クルゼイロとなり、補助金の範囲内で建設しようというもの。

施工は史料館建設で工事管理

会社となったエспанシールが史料室工事も担当、1979年2月に工事が完了した。

1979年10月、史料館建設委員会の解散総会が開かれた。建設はブラジル側、日本側の二本建てで進められ、ブラジル側は史料館の建設、史料の収集、分類、展示を行い、日本側では館内設計、VTR装置、トライヴィジョン、人形、レプリカ、照明器具、展示オプション等の製作を行なった。

史料館完成に要した経費は運営基金4.212.940クルゼイロを含めて支出総額21,740.286クルゼイロ、収入総額は寄付金、協力券、日本政府補助金、万博基金補助金、船舶振興会補助金等合計21.809.693クルゼイロで差引き69.406クルゼイロの剰余金が出たが、この金額は史料館運営委員会勘定に振りこまれた。(注)1983年10月、斎藤広志史料館初代館長が逝去。史料館の建設が立案されると、史料収集および展示企画委員会の長として、また館長として80年6月までの2年間、館の運営に尽力した。



史料館開館式で祝辞を述べる梅棹博士。(1978年6月18日)

翌84年12月には史料館の生みの親ともいえる中沢源一郎前援協、前文協会会長逝去。移民70年祭の記念事業として建設された史料館の建設委員会の中心となってこれを完成させ、斎藤初代館長辞任後は館長として運営と拡充に力を尽した。

1996年6月18日、日伯修好条約100周年を記念して文協、史料館主催で「移民の記録の保存に関する国際シンポジウム」が開かれた。その閉会式が史料館で行なわれ、史料館建設に功績のあった初代館長の故斎藤広志、史料館建設委員長の故中沢源一郎、初代財務委員長を務めた宇佐美錬の3氏に対する表彰が行なわれた。

(注) ブラジル日本移民史料館建設費収支の詳細は『文協四十年史』142ページを参照。



史料蒐集の提唱者、半田画伯（右）と、初代史料館長：斎藤博士。
(70年代初期、於人文研)

第2部

I. 日本館の50年

II. ブラジル日本移民史料館

III. 国士館大学センター





林民70年節ではバカエンター競技場を8万の日本人で埋めた。

思い出のアルバムから



瀧川善徳博士夫妻の栄光



バウラー空港で三笠宮の夫妻を大迎えする時の光



吉田元首相の東空を機に、アウストリア建設の気運
昭和11年秋の光



笠戸丸帰国の完結後一兵と純身会長

I 日本館の50年 コロニア再統合のシンボル



日本館と日本庭園

日本の敗戦を契機に勝ち負けの対立から分裂状態にあったブラジルの日系社会が、日系コロニアの名称のもとにまとまりを見せるのは、1954年に举行されたサンパウロ市創

設400年祭に際して市当局の要請をうけ、日系コロニアに祭典協力委員会が設立されたときからである。日系社会にまだ統括する中心機関もなく、また国交の再開とともに開設された在外公館の代表にかつての権威はなく、日系コロニアは新しい指導理念と中核となるべき拠点を求めていた。こうした時期にサンパウロ市創設400年祭への参加を求められたのである。

1950年、枢軸国人の資産凍結が解除され、東山事業総支配人に復帰した山本喜誉司は、この祭典への協力を通じて日系社会の一元化を促し、さらに日本の伝統文化をブラジルに紹介する好機とみて参加の必要性を説き、400年祭典日本人協力会を発足させた。こうして戦前・戦後を通じてはじめて日系社会の統一組織が誕生したのである。

日本人協力会では、この意義ある記念事業に協力することは、日本移民がこの地に栄え得たことを感謝すると共に、44年間にわたる開拓の足跡をブラジル歴史にとどめることにもなるとして、イビラプエラ公園内に日本館を建設し、サンパウロ市に寄贈する案を発表して日系コロニアに事業達成への協力と支援を要請した。

1953年6月、君塚慎大使は祭典協力会役員を同伴して建設途上のイビラプエラ公園の下検分を行ない、マタラーズ祭典委員会総裁（ギレルメ・デ・アルメイダ総裁は後任）の案内でかねて協力会が保留していた3ヶ所の候補地のうち、内国館に隣接するユーカリ

樹林の先端で、三方湖水に囲まれた景勝の地を日本館建設地として選定した。
(注1)

この選定地について日本館の設計者・堀口捨巳博士は『日本館の設計について』と題した寄稿文のなかで「面積や量感や材料の点で力弱い建物を守るために、一つの静かな空間を作り出さなければならない。この含みで、ニーマイヤー建築が同時に視野に入らない場所という条件が必要であった。池の中に突き出た崎の敷地、百尺ほどあるユーカリ樹の森が他の建物と緑を切っているところ、これは全く嬉しい土地が定められた…」と述べ「建物は、ニーマイヤーのやるような曲線や、色彩や、量感の圧倒とは全く別のもの、細い直線、薄い平面、軟らかい量、そしてモノクローム、これが私の選んだ設計の行き方である。日本の木、日本の紙、日本の土、それに少しばかりの硝子、少しばかりの金属、これが私の使う材料である。一中略一私の建築には、近代的材料も近代的工学技術の応用もないのである。それ故に誠に古めかしい、だが日本の古い建築が、世界的な視野の中に、現代建築の在り方を示唆するもの極めて多いことを、外国の建築界が驚きの目をもって見つめたこと、今日以上の時はないであろう。そのよう



堀口捨巳博士

な機に乗って、日本の材料、日本技術の近代建築にふさわしい取扱いを示すことも、博覧会の出し物としてあり得べき一つの性格と思う」と記している。

募金運動は全伯にわたって行なわれ、日本側の官民あげての協力もあって、1954年9月6日、ルーカス・ノゲイラ・ガルセス州知事夫妻、ギレルメ・デ・アルメイダ祭典委員会総裁を迎えて、公式落成式が挙行された。（第一部 文協50年のあゆみ・第1章を参照）

ちなみに日本館の建設は1953年の中頃から、当時日本建築界の権威・堀口博士の設計と、竹中工務店の施工担当で日本において準備がはじめられ、資材はすべて日本で調達されたもの。堀口博士は日本館ならびに日本庭園の設計について「日本独特の数奇屋建築、殊に世界の注目を浴びている桂離宮にヒントを得て設計し、建築および庭園そのものが出品物となるように意図した」と語っている。

日本館建設工事の着手と、総括監督の大江



建設技師団、右から山本会長、高瀬、大江、山口、野田技師。
歓迎晩餐会で（山本邸）

教授を含む技師4名の到着を報じたブラジルの有力紙のなかには、宮城内の茶室を解体してサンパウロに再建するなど、再建築の意味を履き違えた記事も掲載された。(注2)

当時、日系コロニアには物量的に極めて貧弱な上に、一見平凡な日本館建設について、十分な認識を持たず、兎角の批判が横行していた。このため54年4月24日に大正小学校で開催された「日本館について」の講演会で大江教授は、日本建築の世界に占める地位と、日本館資材調達の苦心、桂離宮の歴史に遡り、日本館建設の意義を強調している。

5月30日に行われた棟上式の様子を『サンパウロ四百年祭』では「玄関に作られた祭壇の中央には、丸鏡の御神体を奉じ、榊と弊束に三方を囲まれて、その前には神酒、大鯛、果物などが三宝に乗せて捧げられた。塵一つない庭には、白砂を敷きつめ、俗塵を超えた神域を彷彿とさせる準備が整えられた。午前十時、早くも二千人の人が押し寄せた。この豪華な日本館の材木、巨石、畳、襖などに手を押し当てて、日本の香を偲ぶ老若の群れが感激の瞳をうるませ、すすり上げる光景が、そこそこに見出された。」と記述している。

1954年4月に資材を積んだ和光丸がサントスに入港、日本から付き添ってきた日本建築技師4名と大工2名、現地参加の大工たちによって、わずか4ヶ月の突貫工事で同年8月15日に竣工した。

「4月19日に就労以来4ヶ月、仮小屋の寝起き、方言のやりとりも懐かしい思い出となっ

て、名残の尽きぬ思いであった。」と8月21日、労務者幹部が集まって日本館建設の由来記と労務者名を記した杉板が、本館天井に記念として残された。

由来記ではブラジル日本移民の経過を述べ、聖市400年祭に際し日本館を献納して、永久に民族の足跡を残すことを決議したとして「山本喜誉司博士を会長に推し、八千コントスの予算を計上、在伯同胞の拠金を以って建設に着手す。これに先立ち山本会長は、母国を訪問し設計者・堀口捨巳博士、工事請負・竹中工務店を選定してその監督者をこの地に呼び、鈴木工務所並びに現地職人と協力して、遂に日本館建設の大業を完成せり。時に1954年8月21日、ここに関係者一同の名を録して後世に伝えんとす。」と記し、起

工＝1954年4月23日、竣工＝1954年8月21日、山本会長以下、建設部長＝鈴木威、現場主任＝渡辺政夫、堀口博士代理＝大江宏、竹中工務店＝山口良介、野田七郎、酒井喜太郎（棟梁）、横井進之丞（左官）。在伯大工として亀沢寛一以下14名、その他関

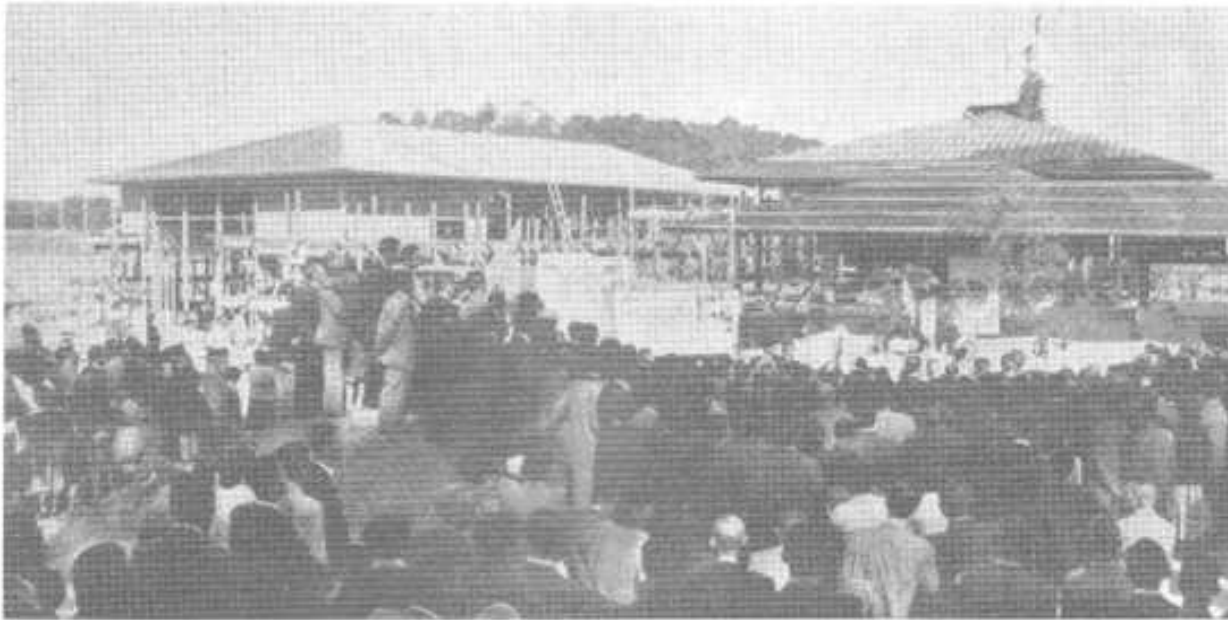


1954年4月、日本館資材と共に棟梁・左官が到着（上）、
54年3月26日、日本技師団の現場下検分（下）。

係者24名の名が記されている。(注3)

(注1)『サンパウロ四百年祭』91ページ。(注2)同119ページ。(注3)同148ページ。

イビラプエラ公園内の宝石



5月30日の様上式には2000人の日系人かつめかけた。

サンパウロ市400年祭々典委員会では日系コロニアのこの挙をよろこび、イビラプエラ公園内で日本家屋建設に最もふさわしい人造湖の一郭を敷地として提供した。その中央部1500平方メートルの地域に、北に面して本館部、付属館部とそれを連結する渡り廊下が建てられ、建築総面積は568平方メートルである。

本館部は日本館の中心をなす永久建築で、日本の伝統的な工法と材料を用い、伝統的な構想をもって現代風に設計されている。この本館部は建築そのものが展示品であって、それによって現代日本のもつ木造建築の雰囲気を示そうとするもので、環境と相まってイビラプエラ公園内の宝石であるという評を受けた。

建築材料は木材が主で、壁は京都の土壁、屋根は母屋を尾州一文字瓦で葺き、庇、軒先には鋼板を葺いており、茶室や水屋は畳敷きで、これら主な建築材料は造園用の種々な自然石、礫とともに、すべて日本から運んできたものである。

大広間前面の庭園は築地塀によって約700平方メートルの長方形に区画され、中央部は池になっている。

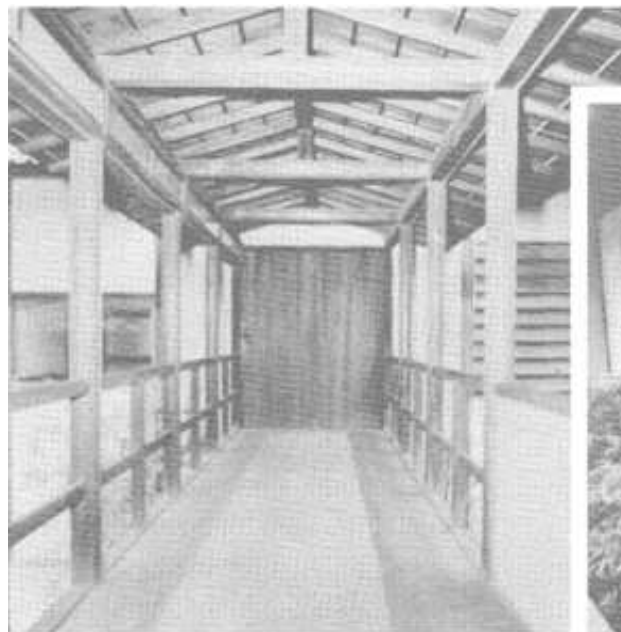
この庭園の構想は日本の伝統的な作庭の精神に深く根ざしたものだが、これも本館の建築同様、現代庭園として設計されたものであるという点が重要である。

付属館部の建築は本館とは異なって、日本から贈られた文化財の展示を主眼とする展示場である。

構造の面で少なからず洋風の手法が用いられているが、その構成はやはり日本の伝統的な構想に発している。

日本建築の伝統的な構想について法政大学の大江宏教授（日本館設計助手・現地設計監督）は、次のように解説している。

地震国である日本では昔から木材による架構、すなわち建築の根本を形成する骨組みがまず第一に尊重される。すなわち力学的に家を支えるためのもっとも重要な部分である柱や梁や桁をそのまま忠実に外部にあらわして、決してこれを壁などで覆い隠してしまわな



展示室への渡り廊下。



中庭から本館を望む。

いのが一番目立つ日本建築の特徴である。—中略— 建築の基本的な視覚的構成を示す柱や梁は、それ自身、まったく塗装（ぬり）をほどこさず、木の素肌のままに残されるし、それらに囲まれてできた矩形部分の表面もまた、自然の土の色のまま、または木材の自然の生地のままにおかれるのが普通である。これは、日本の建築が、それを作り上げる材料の持味を特に重要視し、それ自身の性格を建築意匠のための重大な要素としてあつかっているからである。これは、日本の建築が非常に自然の姿を愛し、強制的な人工を労することを極度にきらう特性の現れで、自然の法則（力学的法則）に柔順であるということにも相通ずる根本的な性格なのである。

1955年11月、協力会解散後、日本館管理委員会(注)



ブラジル日本移民70年祭を記念して市役所より贈られた銅板。

〈碑文〉

日本移民70年祭に当り、皇太子殿下、美智子妃殿下のご来伯を記念して之を建つ。
1978年6月18日、サンパウロ市役所



庭園

が設けられ、祭典委員会のあとをついだイビラプエラ特別委員会と交渉して、その永久管理権を獲得した。管理委員会は法的責任者というだけで、実際の管理事務は一切文協が代行し、1960年10月に管理委員会が解散して以来、文協がその事業の1部門として管理経営を行っている。

(注) 管理委員会 委員長＝山本喜誉司。 委員＝宮坂国人、蜂谷専一、西村一喜、武田俊男、羽瀬作良、杉田ジョージ、山口昇三郎、花城清安、鈴木威。

日本館名物の“泳ぐ宝石”錦鯉

現在、日本館の池泉に泳ぐ同館名物の錦鯉は、1980年5月にブラジル錦鯉愛好会主催の第1回錦鯉品評会が開催された際に、大阪市から姉妹都市サンパウロに贈られてきた85匹の“泳ぐ宝訂”錦鯉放流式が、レイナルド・デ・バーロス市長と金子忠雄大阪市長代理(全日本愛鱗会国際委員長)によって行なわれ、日本館建設25周年記念にふさわしい雅趣豊かな催しとなった。

若林輝夫・初代愛好会々長が訪日した際、バーロス市長のメッセージを携えて大島清大阪市長を訪問、日本館池泉で飼う錦鯉を寄贈してほしい旨要請したのに対し、大島市長はその場で快諾し、“華麗な国際親善”が実現した。大島市長はメッセージで「どうか皆様

方の愛情により、この錦鯉が親善大使の役を末永く果すことを念願いたします」と述べている。

放流式には伊藤義文総領事、野村ジョウゴ連議、田村ワルテル州知事補佐官、相場真一文協会長、日系社会の各代表や州政府、市役所関係者など多彩な顔ぶれで、およそ200人が参加した。

それまで泥池にすぎなかった池は、品評会の開催を機に、若林・愛好会々長と尾上久一・同音会長の援助と献身的な努力で、錦鯉の鑑賞池として立派に改造された。放流式場では池泉のほとりで野立てを催して茶の接待が行なわれ(裏千家協力)、館内各所は生け花で装いをあらためるなど(生け花協会協力)、招待客は日本情緒豊かな雰囲気の中で錦鯉を觀賞した。日本館を管理運営する文協の相場会長は「愛情かけて育てられた錦鯉を通じ、人間同士が結びあえることは素晴らしい。そのことに強い印象を受けた。そして日本的な文化、芸術をブラジル人に紹介できる格好な機会であった」と喜びを語っている。

この日本館の池は、もともと錦鯉を放流するために堀口博士を煩わし、設計替えを依頼したもので、サンパウロ400年祭を機会に、新潟県特産錦鯉のブラジル進出を企画した同県色鯉養殖漁業協同組合が、日伯中央協会の手を経て、まず40匹の試験輸送を行ない、

成功すれば君塚大使の手を経て大統領、サンパウロ州知事、同市長に贈呈するはずであった。ところが赤道通過の頃からつぎつぎと斃死し、リオに到着したものの僅かに3匹、それも陸揚げ後斃死して、その目的を果たすことができなかった。(注)

堀口博士は前出の寄稿文のなかで、庭園の設計について「日本庭園は枯山水などという類のない珍しい技術を古くから持っている。そこで竜安寺の石庭のようなものをまず考えてみた。しかしこれは鯉を放ちたいという話が出たので、水と水草と河石の庭に変えてしまった。新潟県から出る錦鯉が、飛行機でパリ経由サンパウロに向かうことになっているが、はたして私の池で泳いでくれるであろうか。」と記している。

1982年1月3日、日本館の錦鯉250匹が全滅するという事故が起きた。管理人によれば、池の水の浄化ポンプには高さ2メートルの柵がしてあるのだが、何者かがその柵をよじ登り、ポンプにいたずらをしたため、池の水がすべて流れ出てしまい、このような事態となったという。

全滅した錦鯉は、前述のようにサンパウロ市と姉妹都市関係にある大阪市長名で寄贈されたもので、日本でもこれだけの錦鯉を集めることは、かなり困難を極めるものだけに同館への錦鯉寄贈の仲介をしたブラジル錦鯉愛好会では、事故が起きたことに非常なショックを受けた。

1983年6月、第4回錦鯉品評会に来伯した加藤柁男審査員が、黒木健夫・全日本愛鱗会々長らの協力で集められた錦鯉100匹を携行、品評会に先立って日本館で放魚式が行われた。事故で錦鯉が全滅して以来、文協と錦鯉愛好会が中心となって「なんとか日本特産の錦鯉をふたたび池に泳がせたい」と運動、それが実って全日本愛鱗会からの寄贈となったもので、放魚式にはマリオ・コーバス市長はじめ若林ブラジル錦鯉愛好会々長、尾身倍一文協会長、日本航空の北島猪一郎サンパウロ支店長ら約50名が出席、マリオ・コーバス市長は「純日本的ともいえる錦鯉。色とりどりの鱗が放つ日本的な情緒が、ブラジルそして世界平和に役立つものと信じる。大事に育てたい」と謝辞を述べた。

2000年にも日本館の錦鯉に伝染病が蔓延し、一時は絶滅の危機にさらされるという異常事態が発生した。異常乾燥がサンパウロを襲い深刻な水不足に見舞われた5月、突然50～60匹が急死、池の水を州立病理研究所で検査したところ水質悪化が原因で、水がバクテリアに汚染されて急性病が蔓延する兆候にあったことが判明。

運営委員会(尾西貞夫委員長)では急遽錦鯉愛好会(尾上



第1回錦鯉品評会では入場者が長蛇の列をつくった。
(「ブラジルの錦鯉」より)

久一会長)に応援を求め、鯉を池からあげ、薬品槽に25分間浸けて殺菌するとともに、池の水抜きを行って乾燥させ、給水車4台分約6万リットルの水を入れ替えた。この処置が功を奏し、錦鯉は次第に元気を取り戻した。尾西委員長は「サンパウロ市の観光資源ともいえる錦鯉の飼育には人一倍気を使っているが、今回の事故で飼育の難しさが骨身にしみた。今後このような事故が再発しないよう管理に万全を期したい」と語っている。

なお、若林初代錦鯉愛好会々長以来、日本館の運営委員に愛鱗会支部の役員が協力するようになってからは、常に錦鯉の見事な群泳が見られるようになり、日本館の入場者は倍増するようになった。

(注)『サンパウロ400年祭』56ページ



第4回品評会に来伯した加藤審査委員長が錦鯉100匹を携行、泉水に放魚。
(「ブラジルの錦鯉」より)

日本館の修復“中島工務店とボランティア”

1997年、オスカー・ニーマイアーのイビラプエラ公園改修プロジェクトで撤去される可能性があった日本館と開拓先没者慰霊碑が、サンパウロ州文化局建築物保存委員会の許可により永久保存が決定された。サンパウロ州では古い建築物は、州文化局建築物保存委員会の許可がなければ解体できないことになっている。そこに目をつけた野村アウレリオ市議が、同年4月に文協がサンパウロ市緑化環境局から通知を受けた取り壊し計画の撤回を、同保存委員会に申請したところ8月5日付け公式文書で認可の回答があった。

ニーマイアーも納得の上での決定で、「天皇・皇后両陛下の来伯時に、リオの総領事館から式典に招待されたのがきっかけで、日本に対して理解を示してくれた」と野村ジョウゴ・サンパウロ州知事特別補佐官は語っている。同年5月3日にピッタ市長とヴェルネル・サンパウロ市緑化環境担当局長が日本館と慰霊碑を初訪問したことに加え、日系団体が集めた署名を同年5月20日に同局長に手渡した成果が実った形となった。

これを受けて中島工務店が移民90周年にむけ、日本館を修復・改修するための改修計画を本格的にすすめることになり、同工務店の中島紀干（のりお）・代表取締役を中心とする一行9人が97年4月29日に来伯した。同事業は96年3月にカルドーズ大統領訪日の際に同行した山内会長からの要請を受けたもので、同工務店では前年4月に調査を行

ない、2月に瓦6,000枚と板金材料などコンテナ2個分を送っており、中島社長はじめ竹本保雄・棟梁ら9人の無償行為で、総額20万ドルを同工務店が負担している。

中島社長一行は移民80年祭の時にも来伯し、日本館の修復作業を行なっている。前回の作業では「鋼板の裾ぶきや壁の塗り替え、障子、畳、襖などを取り替えた。34年振りの改修作業であったため大工事だった。それから10年たって、新しく瓦を取り替えなければならない」と中島社長が説明。今回の修復は主に瓦の善き替えのほか、ルーフィング（防水用の油紙）の張り替え、障子、襖の張り替え作業などが行なわれた。

中島社長の呼びかけで丸新美濃瓦店が瓦6,000枚を提供、深谷配合粘土店が土を、安江電気工具店が金物や釘などを提供している。ところが日本から発送した瓦がサントス港の税関で足止めをくったため、滞在期間中に作業を終えることができずに帰国。ブラジルには本格的な瓦職人がいないため作業は中断され、束になった瓦が日本館の屋根に積まれたまま放置された。

そのため8月5日に瓦の葺き換えに再び来伯した中島社長一行4人は、着伯するとそのまま日本館に直行。7日目となった11日に作業は完了した。中島社長一行による今回の修復作業にかかる旅費、滞在費を含めすべての経費は自己負担である。なお、中島工務店の貢献を称えて、サンパウロ市議会から名誉市民章が贈られ、ネロ・ロドリゲス市議会議

長から市の功労者に贈られる銀のお盆、セルソ・ピッタ市長からも表彰を受けている。

サンパウロ市創立450周年にあたる2004年1月25日には、無料開放して館内をフルに使って日本文化を紹介。この日、約6,000人の市民が訪れ、日本の伝統文化に触れる機会を持った。

(注) 詳細は、第1部ラ第14章・5. サンパウロ450年祭と日本館を参照。

保存すべき歴史的遺産

現在、日本館では次ぎの基本的な5つの柱を中心に運営が行なわれている。

①歴史的遺産を意識しての保存 ②修復計画 ③文化・教育活動としての事業実施 ④広報 ⑤自助作業をもつ企画。

これらの方針は「共同作業」で可能になるとの認識の上で活動が展開されている。1954年に建設され、一面が人造湖に、そして一面が日本庭園の木々、周辺がユーカリ樹に囲まれた日本館の恵まれた自然環境は、反面、木造建築である日本館にとっては仇となり、シロアリの被害に苦慮しているのが現状だ。シロアリ対策は経費がかさむだけでなく、虫の種類の特長や発生の条件など、徹底的な調査が必要とされる。しかし150匹の錦鯉が泳ぐ池を考慮しての作業と、池そのものに水漏れが発見されたため、早急な解決が求めら



1980年7月、江崎真澄元通産大臣より寄贈された、先祖代々江崎家に伝えられた鎧兜。
江崎家の先祖は織田信長(1535～1582)の家臣。



ブラジル短歌の父と称される岩波菊治の歌碑。



ブラジルにおける俳句の普及に尽力、門下生は6千名を数えたといわれた佐藤念腹の句碑。

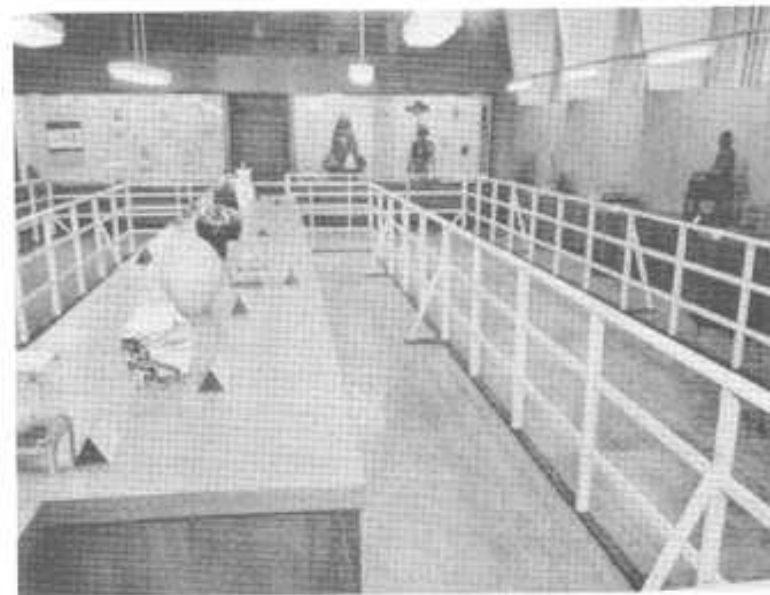
れた結果、P P V社に作業を依頼、住友化学の協力で化学薬品の提供を受けたことでコストが大幅に削減された。

展示室のシロアリ駆除は、美術品を化学薬品から守るため避難作業に約2週間を要したが、ブラジル日本移民史料館所属の専門家(伊藤アナ・マリア、前村エメリ・カヨ、マルコス・ペルシチ)の協力で解決した。

芸術品のデータベース

日本館と移民先没者慰霊碑は、在聖日本国総領事館の後援のもとに、サンパウロ市の歴史遺産・みどりと自然環境局管轄の公園管理部のイビラプエラ公園運営計画と相互協力できるよう検討されている。

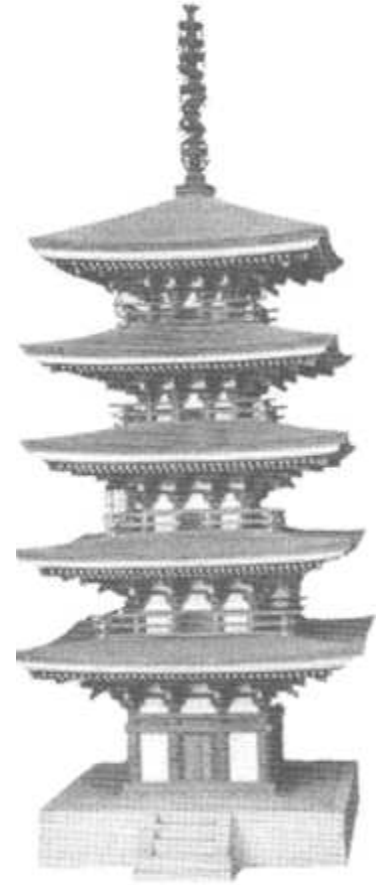
日本館の修復に際し、本館に隣接する展示室の芸術品の細密なデータベースが作成された。所蔵品の中には落成式当時に総領事館から寄贈されたもの6点、総領事館より委託さ



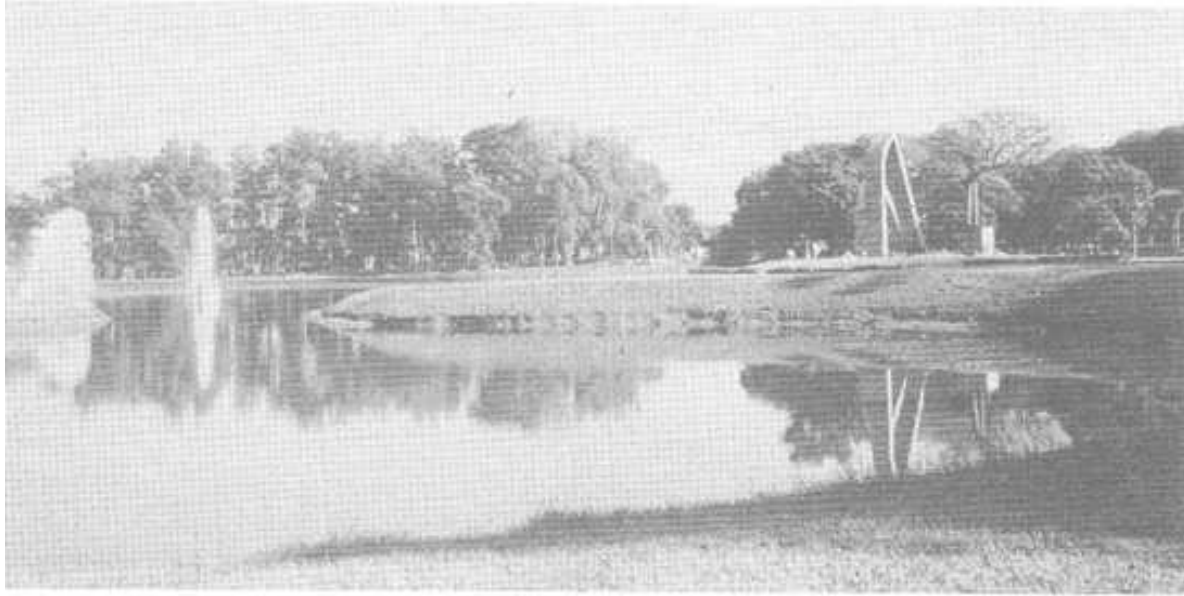
美術品展示場

れたもの35点などがあり、その他購入品の出所を明らかにし、これらのデータを総領事館に提供し、同時に展示説明文の訂正なども施された。

日本館で行なわれた文化・教育に焦点を当てた活動としては、文協創立50周年記念事業として2005年10月に開催された「おもちゃウイーク」と、11月24日から12月23日まで日伯の工芸作家28名の工芸作品を展示した「ブラジルにおける日本の眼差し」展が催され、文協創立50周年記念事業の目玉イベントのひとつとなった。また企画としては、日本文化関連の書籍を扱う売店やカフェの設置など、来館者とのふれあいを深めるための工夫なども考慮されている。



五重の塔



日本館と慰霊碑はイビラプエラ公園内の最適な場所にある。

ブラジル日本移民 開拓先没者慰霊碑

ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑は、イビラプエラ公園内の日本館に面した絶好の場所に建立され、ユーカリ樹に囲まれた最適の環境を備えている。1975年8月23日、ブラジル日本都道府県人会連合会(県連)によって、開拓先没者慰霊碑が建立されて2005年8月で建立30周年を迎えた。この間、天皇・皇后両陛下によるご供花をはじめ、

日本からブラジルを訪れる公式訪問者は政府や県庁関係その他一般訪伯団など、慰霊碑への参拝は必ずスケジュールに組み入れられている。

1965年と1970年に南米各地の移住地を視察した日本海外移住家族会連合会初代事務局長の藤川辰雄は、サンパウロ州奥地の無縁仏を回向しながら調査した結果、ブラジルの奥地には、まだまだ多数の先駆者が無縁仏となって弔う人もなく眠っていることが判明した。この調査報告によって家族会では、1972年に県連および汎アマゾンア日伯協会に対し無縁仏の調査と慰霊碑の建立を呼びかけた。

1974年に再度ブラジル各地の無縁仏の実態調査と供養を行なった藤川は、奥地の無縁仏を弔うとともに募金行脚を志し、そのむね県連に申し入れた。県連としても異論はなく、当時の和田周一郎会長は日系コロニア挙げての事業として、ブラジル日本文化協会、サンパウロ日伯援護協会、ブラジル日本商工会議所に協力を要請して開拓先没者慰霊碑建立垂員会を結成し、建設費募金運動を行なった。

碑銘は『開拓先没者慰霊碑』と決まり、時の田中角栄総理大臣に依頼、1974年9月に田中総理が来聖の際、文協記念講堂での歓迎式場の席上、総理から和田会長に手渡された。1975年4月、鈴木威建築技師の設計と工事監督で工事が進められ、同年8月に完工した。

慰霊碑除幕式で和田周一郎は先駆移民の苦難の歴史にふれ、慰霊碑建立に打ちこんだ心情を次のように述べている。

一略一移住者の2世、3世は善良なるブラジル国民として、今や政界に学界に、はたまた実業界にとあらゆる分野に活躍して、ブラジル国家の発展と日伯親善交流に尽力しつつあり、地球上もっとも遠隔の地にありながら、もっとも親密なる友邦国で、共存共栄の実を挙げつつあります。

これひとえに先駆者たちの血と涙と汗とで築きたる地盤の上にあることを肝に銘じ、雄図なかばに志し空しく不退なる生涯をとげた先駆者たちの鎮魂碑を建立して、その功績を称え後世に伝えんと計画した所以であります。一略一

慰霊碑の礎石の下には先駆移民の御霊を合祀した地下霊廟があり、各県人別の過去帳が納められて精神的な結束の役割を果している。

地下に霊廟が増設されたのは、日本館を管理する文協理事会から、観光地に線香の抹香くさい香りが流れることに反対する意見があったため、急遽、慰霊碑の地下に増設する設計替えがあって完工した。毎年、6月18日の『移民の日』に行なわれる慰霊碑参拝は、

ブラジル日系社会の公式行事となって、故国日本を常に想いながらブラジルの土と化した多くの日本移民先駆者の霊を祭るこの慰霊碑は、今やブラジル日本移民の心情的拠点となっている。

参考資料

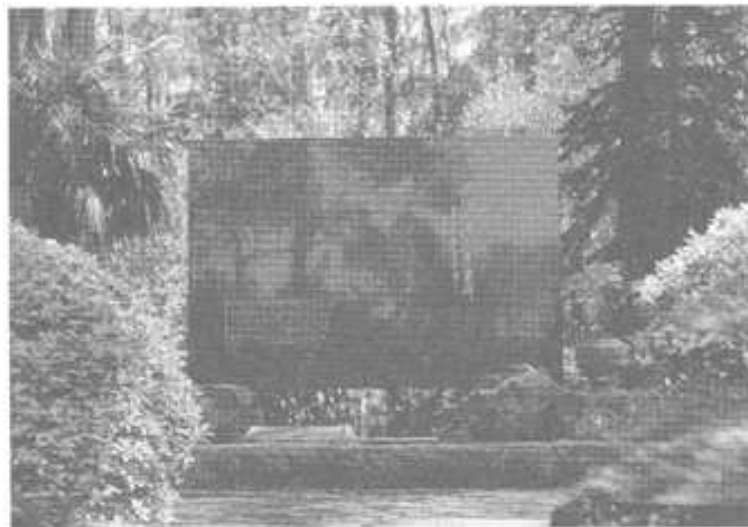
サンパウロ四百年祭 聖市四百年賀典日本人協力会 1957

ブラジルの錦鯉 ブラジル錦鯉愛好会 2000

文協40年史 ブラジル日本文化協会 1998

日本館紹介パンフレット 同 1980

ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑 ブラジル
日本都道府県人会連合会 2005
(写真も上記資料より)



慰霊碑(上)と先駆移民の御霊を合祀した霊廟(下)。
(写真はいずれも県連資料より)

ブラジル日本移民史料館



戦後 50 年史展示場入口 (9 階)

ブラジル日本移民史料館

1976年1月、ブラジル日本移民史料館建設委員会が発足するに際して公表した建設趣意書では、「ブラジルの日本移民史は、異質の言語、異質の文化をもつ一国民が全く別天地の国家において、概括的にみて著しい成功をおさめた、世界史にも類稀な移民史でありますので、ブラジルにおいても大いに研究に値する移民史といえることができる…」と、日本移民の実績を史料によって保存することは、われわれの責務であると述べている。

1978年6月18日にブラジル日本移民70周年祭のメイン事業としてオープン。文協ビル7・8階に常設展示室が設置され、「ブラジルに移住した日本人がそのその間拓と適応の歴史を通じて、この国の産業・文化・社会に残した足跡を記録し、やがてその子孫が先祖の事績をふまえ、しかも先祖の国日本との交流を保ちつつ、ブラジルの発展に参加し貢献できるための拠点を作る」ことを基本テーマとしている。

2000年11月5日、9階に開設された「戦後50年史常設展示場」は、第2次世界大戦後における日系社会50年の歴史を展示したもので、移住者だけでなく日本からの進出企業の活発な動きや、2、3世層の多方面にわたる発展状況が物品・文書・写真資料によって展示されている。文協45周年記念式典にあわせて落成式が挙行された。

現在、3階にわたる1,250平方メートルの空間に展示されている文書・物品資料は

約1・800点で、この他、大半の文書・物品史料は各収蔵庫、倉庫など文協ビル3階の史料庫に収められ、大型史料は旧コチア小学校を改造した文協コチア倉庫に、それぞれ物品5,000点、文書28,000点、写真10,000点が保管されている。なお、この史料整理の一環として特性の容器(紙・プラスチック・金属)に収容する作業や、現物の保管・整理を容易にするための種々の収納法が試みられ、並行してこれらの史料検索のIT化も進められている。また、以前から論議されている国士舘スポーツ・センター内に史料館収蔵庫の建設プランが実現すれば、史料館業務は大幅に進展するものと期待されている。



移民の生活の知恵を示す品々を展示

時代の移り変わりにつれて日本移民の歴史に精通した人が少なくなり、膨大な史料の保管・補充、さらにこの分野における調査研究の実施が、今後の課題となっている。200

2年12月4日に開館した横浜国際センターの落成式には、二宮正人運営委員長と大井セリア館長が招待されて出席したが、同センター内の海外移住史料館への収集作業には当史料館も積極的に協力している。

移民史料館は、ブラジルの日本移民が残した歴史的な証言であり、言葉や習慣をはじめ、気候や風土条件がまったく異なったブラジルに移住し、新しい生活の道をひらき根づいていった日本移民とその子孫の軌跡を、移民たちが残した史料によって辿り、その過去・現在・未来の姿を現そうとするもので、それは日本人を受け入れたブラジルの、ある時代の姿でもある。

テーマ展示

展示計画はさまざまなテーマで構成されている。つまりテーマ構成は7・8階展示と9階展示ともに3大テーマ（ABC）に区分され、このテーマの下に、その時代を特徴づけ



間崎三三のパスポート

る中テーマ（ⅠⅡⅢ）を設定、中テーマに包括される具体的事象を小テーマ（1 2 3・・・）としてとりあげている。

A. 新世界へわたった日本人（以下7・8階展示）

Ⅰ. 日本から新大陸へ①日本人の海外移住 ②日伯関係の幕あけ ③新天地ブラジル

Ⅱ. “先祖さま”となる日本人 ①笠戸丸の移民たち ②波濤をこえて ③コロノ移民

Ⅲ. 新しい生活をひらく①原始林の生活 ②植民地の生活（③生活の工夫 ④移民の楽しみ。

B. 産業開発への貢献

Ⅰ 日本移民と農業 ①奥地型農業の推進 ②近郊型農業の創始 ③熱帯農業の振興

Ⅱ. 移民と技術革新 ①新しい作物の導入 ②集約農業の誕生

Ⅲ. ブラジル近代化への参加 ①農協運動の芽生えと発展 ②都市生活のはじまり ③産業の成長。

C. 新たな進路を求めて

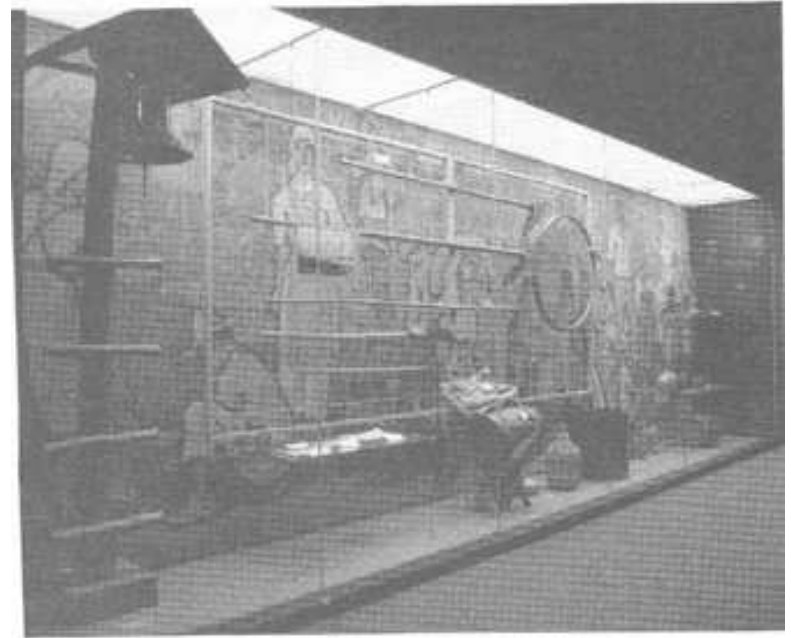


移民が親しんだスポーツ用具

I. 転換期の悩みを越えて①戦争から激動の時代へ

II. 日伯関係の新しい展開 ①コロニアの夜明け ②戦後の移住 ③企業の移住

III. 若い世代は羽ばたく ①大地をひらく ②いろいろな職場で ③社会生活と家庭 ④ブラジルと日本の交流。



初期移民が使用した農具と生活用品

『戦後50年史常設展示』9階

A. 新たな幕開け

I. ブラジルに生きる日系人 ①コロニアの夜明け ②日系人の都市集中化 ③日本移民50年祭。

II. 戦後の移住 ①移住者の特徴 ②移住地の生活。

B. 日系社会の変容

I. 企業の進出と地場産業 ①企業の移住 ②地場産業の発展と変化③日伯経済交流

II. 日系社会の変容 ①日系人の高学歴化 ②職業の多様化 ③日本

移民祭 ④異民族結婚と混血化の進行 ⑤日系社会の高齢化 ⑥日系家族の変容 ⑦日本語教育の変遷。

C. 新時代の展開

I. 日本とブラジルの交流 ①日本との交流
②出稼ぎ現象。

II. ブラジル社会への参加 ①政治への参加
②日本文化のブラジルへの浸透。



原始林開拓のころ身近にいた動物のはくせい。

移民史料館の概要（7・8階展示）

A. 新世界へ渡った日本人

日本人の海外移住は1868年(明治元年)のハワイ移民を皮切りに、1980年ころからアメリカ本土、1899年のペルーに続いてブラジルへの移住が1908年にはじまった。こうしてはじまった日本人の新世界への移住は、すでに16世紀から植民地を建設したヨーロッパ諸国に比べると、実に3世紀のへだたりがあり後発組だったが、日本人にとっては新世界の発見であり、同時に国際社会への実質的な仲間入りを意味した。

I. 日本から新大陸へ

ここでは新大陸への移住がどのような経過をたどってはじまり、ブラジルでは移民たちがどのようにして生活を築いていったかを示し、日伯関係の幕開けでは、「日伯修好通商航海条約」の写しやブラジル調査報告書、移民契約交換文書、さらに移住の下地をつくった笠戸丸以前の渡航者の肖像が展示されていて、農業移民を主体とした日伯関係の夜明けを知ることができる。

II. “先祖さま” となった日本人

ブラジル日本移民のいわば原点ともいえる笠戸丸の第1回移民から、コーヒー耕地でのコロノ生活までが展開されている。

笠戸丸模型や移民が移民会社と交わした契約書、日本移民に対するブラジルの新聞報道などが、初期移民の姿や当時の状況を浮びあがらせ、つづいてサントス上陸の情景を物語る史料が展示され、このコーナーの中央には移民が最も多かった当時の代表的な外洋船ぶらじる丸の模型がある。

コロノ移民コーナーでは半田知雄画伯のコーヒー採集の風景画を背景に、コーヒー耕地の労働者にとって欠かすことのできない農具、生活用具が展示されている。



初期移民の開拓小屋と生活状況を再現したレプリカ

Ⅲ. 新しい生活をひらく

コロノ時代を経た移民たちは、やがて独立への希求が強くなる。独立志向には都市への流れもあったが、大勢としては農業が主流となり、コロノから独立農への第1歩は原始林

の開拓からはじまる。ここに復元されている小屋は自然の材料を使い、室内も当時の風俗習慣を物語っている。原始林での生活は大きくイラストで背景にあしらい、開拓用具や農具、また移民たちの身近にいた鳥獣類の一部が展示されている。

植民地建設の過程は、集団的な生活ができることで、①日本人の風俗・習慣を残した生活ができる。②子供たちに「日本人の子」としての教育が可能である。③娯楽・スポーツ・文化面での団体活動ができる。などの便宜があって、気持ちの上での安定感が得られた。植民地に団体組織ができると、村をあげての催物などの楽しみが案出され、なかでも運動会はブラジル人の間にもUNDOKAIとして定着していく。

展示品を仔細に見れば、植民地初期の移民たちの生活の一端が浮びあがってくる。このように移民たちは植民地の生活を続けながら農業経営の基礎をつくり、規模を拡大して、次第にブラジル農業に大きく貢献するようになる。

B. 産業開発への貢献

戦前、つまり1941年までにブラジルへ移住した日本人は、その99%までが農業契約労働者であった。従って農業を出発点として基盤を築き、そこから商工業へも伸びていったといえる。言語、習慣に馴染むにつれて農業以外の分野にも転出する者がでてくるが、当初は農産物の仲買や簡単な加工業など、農業に関係のあるものを“足がかり”とし

て活動の分野が拡大されていった。このテーマでは、農業面での推移と、農業を基盤として他の職域へと行動半径を広げていった日本移民の姿を追っている。

I. 日本移民と農業

モジアナ鉄道沿線を主とする旧コーヒー地帯のコロノ生活を出発点とした移民たちは、やがてサンパウロ州の中・西部地帯の原始林を購入して小地主あるいはコーヒー栽培契約者として展開していく。このコーナーでは移民の手によって生産された主な農産物をケースに納めて展示し、新旧の栽培状況を写真によって示している。これらの中には、ラミー、はっか、まゆなどのように、移民たちが開拓し、今ではブラジルの重要な生産物の一つになっているものも少なくない。

近郊型農業は蔬菜の栽培からはじまり、バタタ、トマト、それに後から加わった鶏卵が、近郊日系農家の3大生産物と呼ばれた時代もあった。蔬菜類の生産は日系農家の独占といってもよく、果樹栽培では、新しい品種の導入、在来種の改良などで功績があり、花斉栽培についても同様なことがいえる。



戦前に使用された教科書や女子青年会誌

熱帯農業では1930年代に、日本人にとっては全く無経験なアマゾン流域に入植し、試行錯誤と苦しい生活を重ねた後、自らの手で導入したジュート麻と胡椒の栽培に成功し、アマゾン地域における一大産業にまで発展させた。

Ⅱ 移民と技術革新

ブラジルの農業への貢献という点では、日本移民の功績は他国移民に比べ格段に大きいというのが定説になっており、特に技術の革新と普及の面において高く評価されている。これを概括すると次の4事項が挙げられる。

①新しい作物の導入と育成 ②既存の品種についての育種改良 ③栽培技術、生産技術の改良と向上 ④生産形態の革新。

しかもこれらが、政府機関による組織的な指導助成によらず、ほとんどが移民の工夫と研究によって達成された点に特異性がある。

Ⅲ. ブラジル近代化への参加

農業での成功を夢見て渡航してきた日本移民も、時がたつにつれ農業に見きりをつけ、他の分野に進出するものが次第にでてくる。特にサンパウロ地方では農業以外の分野に進

出する機会が多く、商工業への転出も、また都市化を背景とする組合運動の展開も、サンパウロの近代化という大きな流れの中で起こっている。

このテーマでは、サンパウロ近郊の日本移民が協同組合を組織し、それを介してサンパウロ市場に進出した経緯と、サンパウロ市をはじめ都市に移動した移民たちの生活および産業活動を取り上げている。都市に定着するようになった移民たちは、初めはささやかな商工業に携わり、やがてブラジルの商工界に進出していく。

大きなピンガ樽を中心にした展示コーナーでは、創業期のピンガ工場や初期の醤油工場などの写真と共に、日本から移住した商社などに関連した写真・文書を展示して、日本人とその産業の成長を初期の段階で捉えている。



日本移民の工夫による技術革新によって食生活の変革に及ぼした影響は大きい。

C. 新たな進路を求めて

移住開始後ほぼ30年を経て、日系コロニアとしての形態もほぼ整ってきたとき、移民達は思いがけない情勢の変化のために苦しい立場に置かれることになる。それは1930年代の後半にブラジルに起こったナショナリズムの潮流で、いきおい外国移民に対する抑圧の政策となって現れ、日本語教育が禁止され、日語新聞の発行が停止された。

時を同じくして日本では国粹主義、軍国主義がつよく台頭し、それはブラジルの日系社会にもつよい影響を及ぼし、移民たちはブラジルと日本のこつのナショナリズムの間に挟まれて、より深い精神的な悩みを味わわねばならなかった。

さらに祖国の太平洋戦争突入、ブラジルの対枢軸国との国交断絶、それに続く対日宣戦布告と暗い事態が生じ、戦時中の暗鬱な日々がつづく。

1945年8月15日の祖国の敗戦によって、日系コロニアは数年にわたって勝ち負けの対立による混乱期に突入する。やがて混乱と模索の日々が過ぎると、ようやくブラジルに安住の地を見出し、この大地が子孫の国であることに気づき、あらためて2・3世の驚くべき成長を発見する。

一方、再開された移民の導入によって、新移民を迎えた日系コロニアは“若返り”現象を起こす。

さらに日本からの企業の移転は、ブラジルの産業への参加をより多面的なものにしていった。このテーマは、戦争の日々の“暗いトンネル”をくぐり抜けた日系コロニアが、大きな試練を越えて安住の境地に達した姿を描き、さらに若い世代の成長、移住の再開、企業の移転などと共に、新しい時代への動向を展望している。

I. 転換期の悩みを越えて

このコーナーは戦争から激動の時代を象徴しており、外国語教育禁止に関する新聞報道、さらに「聖州新聞」廃刊の辞は、当時の移民全体の心情を代弁したものといえる。大戦勃発とブラジルの対日国交断絶、枢軸国人の資産凍結発令、サントス市および海岸地帯からの強制立ち退きなどに関する文書資料によって、よりどころを失って動揺した移民たちの姿を如実に再現している。

“暗いトンネル”の正面には、明るい陽光を浴びてブラジルの国花イペーが咲き誇っている。これは模索の時代をくぐり抜けて、移民たちがブラジルの大地に明るい未来を見出した喜びの気持ちを表現している。

II. 日伯関係の新しい展開

戦後のコロニアに“夜明け”の感を与えたのは日本語による新聞の発刊で、1950年の古橋選手ら水泳選手団一行の来伯は、明るいコロニアの戦後史の第1ページを飾るもので、パカエンブー競技場はじめ各地で揚げられた日の丸の旗によって、移民たちは戦争中からの長い暗鬱の雲が吹き払われることを感じた。さらに資産凍結令の解除、日本の芸能団や映画俳優の来伯、1952年9月の戦後初代大使君塚慎の着任は、日伯関係再開を具体的に印象づけた。

戦後10年の空白を経て、1953年から移住が再開され、1958年をピークとする農業移民は、日本経済の高度成長とともに漸減し、代わって技術移住がはじまる。1960年代の後半からは企業移住がはじまり、1969年以降の高度経済成長期を迎え、1973年の“オイル・ショック”まで、日本の大手企業が活発な移住をはじめ、日伯の新しい関係への胎動が感じられるようになってくる。

Ⅲ. 若い世代ははばたく

日系コロニアは戦中・戦後の激動期を経て安定と発展の段階を迎え、さらに1970年前後の大規模な企業の移住によって、日伯関係はますます緊密なものとなってきた。日本人を“先祖さま”とする若い世代の日系人は、名実ともにブラジル人として、ブラジルの

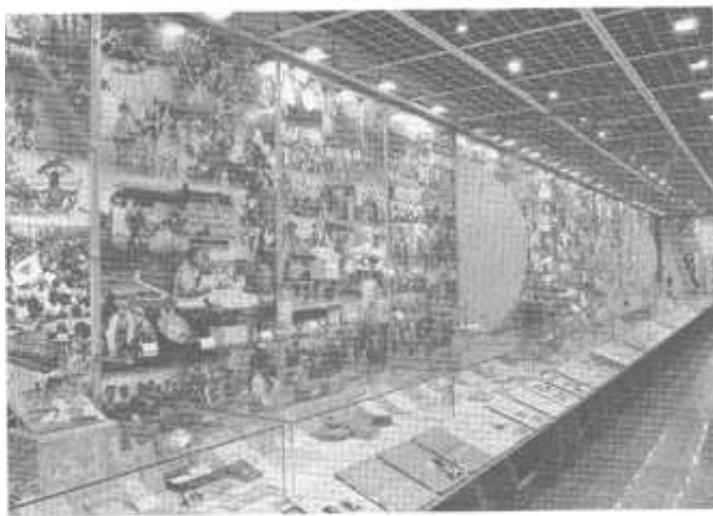
大地にはばたいている。

史料館開設当初には、このテーマを展開するために、多様な情報をまとめて解説する展示手法としてスライドによる映像空間を設定した。マルチ・スクリーン室がそれで、3面マルチ・スクリーンは日本移民の足跡をたどり、その未来を展望するこの史料館の構想をいわば総まとめしたものとなっていた。

戦後50年史常設展示場の開設

文協ビル7・8階に展示されているこれまでの展示内容は、前述のように1908年の第1回笠戸丸移民から太平洋戦争終結とその直後までを示すものである。しかしブラジル日本移民の歴史も戦前の33年の歩みに比べ、戦後移住はそれをはるかに越える50余年を数えるに至っている。この間、日系社会も大きな変貌を遂げ、その推移を新たに検討して展示することは、史料館事業として不可欠のこととなり、1997年6月、史料館9階部分を完成させ、天皇・皇后南陛下をお迎えして「皇室とブラジル」特別写真展を開催した。

これに引き続き“戦後50年史”の展示計画が実施され、2000年11月5日、文協創立45周年記念式典にあわせて、文協ビル9階で戦後移住開始後の日系社会の50年の



戦後の移住を展示

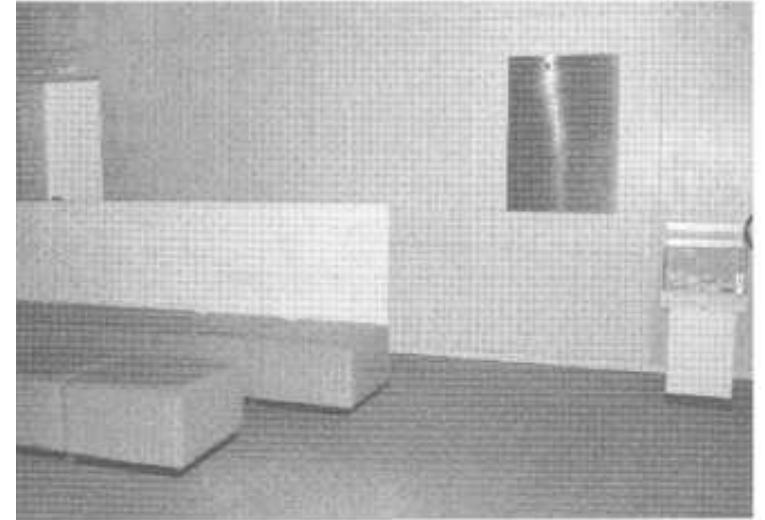


歴史をたどる「戦後50年史常設展示場」の落成式が行なわれた。

9階部分の展示は、戦後50年の日本からブラジルへの移住、ブラジルにおける日系人のブラジル社会への参加、さらにブラジルと日本両国間の交流の歴史を展示することを基本構想としている。

2003年4月に完成した9階展示場奥の「カワサキ・スチール・コーナー」は、日本の川崎製鉄グループが月本鋼管との正式合併を前に、ブラジルでの活動のまとめとして史

料館への寄贈を決めたという。寄付はツバロン製鉄を含む川鉄グループの現役とOBに協力を依頼したもので、180人から総計383万円(44.000レアイス相当額)が寄贈された。ブラジル川崎製鉄の山本哲男代表は『ツバロン製鉄を引退した今もブラジルに愛着をもつOBは多い。合併により「川崎製鉄」の名前がなくなる前にブラジルでの活動のまとめとして、関係者に寄付を呼びかけたところ一気に話しが盛りあがった』と語っている。



カワサキ・スチール・コーナー

戦後50年史の展示

A. 新たな幕開け

戦後、邦人社会に生じたカチ・マケの対立抗争は、ブラジル政界にも反響し、憲法審議会の本会議において日本移民入国禁止の条項が提出され、議長メーロ・ビアンナの決定投票で否決されるという危うい状況のもとで、邦人社会の有力者の間で展開されていた「時

局認識運動」が、母国に対する救援運動となって「日本戦災同胞救援会」の結成となり、邦人社会に団結の気運が盛りあがってくる。

I. ブラジルに生きる日系人

戦後の混乱と模索の日を過ごしたあと、戦前1世たちは帰国志向から定住傾向が強まってくる。

成長した2世たちはブラジル社会への進出をはじめ、それに伴って日系人の都市近郊への移動が増加する。こうした時期にサンパウロ市創設400年祭への参加を契機にコロニア統合の動きがはじまり、その拠点づくりの中核となったのがサンパウロ日本文化協会(現ブラジル日本文化福祉協会)の設立であった。さらに1958年の日本移民50年祭では、全伯の日系人が一体となって祭典を盛り上げ、戦後日系コロニアに起きたカチ・マケの対立に一応の区切りをつけた。また戦後の混乱期にも若い世代は日系ブラジル人としての意識をもって成長し、ブラジル社会へ活躍の場を広げていった。

こうした日系2世の増加につれて、これまでの「在伯同胞社会」「在留邦人社会」といった呼称は実情にそぐわなくなり、それに代わって「コロニア」の名称が50年代から使われるようになる。



東郷青児画伯寄贈の作品(A)

II. 戦後の移住

戦後移住の特徴として挙げられるのは、移住形態の多様性と地域的な広がりである。受け入れにもいろいろな形態があり、移住地も移住振興会社が造成した移住地のほか、連邦植民地、個人による移住地が各地につくられ、戦前と異なってブラジル全域に広がっていった。また農業移住で来ながら農業に従事しなかった者の多いことも特徴で、これは戦後移住の最盛期には既に日系人の都市化が相当進んでいたことを示すもので、都市で種々の職を求めることができたからである。



作品(B)

しかし1959年をピークに、約5万5,000人へのぼる戦後移住者の日系社会の活性化に果たした役割は大きい。その移住も日本経済の高度成長と共に漸減し、1973年、移民船「ぶらじる丸」「にっぽん丸」の航海を最後に、空路による移住へと移行し、実質的な移住は終焉する。

B. 日系社会の変容

戦前同様、戦後移住者の大半がサンパウロ州に入ったため、全日系人の70%余が州内

に居住し、さらに大サンパウロ圏だけで全日系人の約40%を占めている。この都市集中は、1950年代からはじまる日系企業の進出にも影響した。企業が多くの日系人を採用し、また日系社会のなかにも下請けなど多くの関連企業が派生した。さらに日系人の商工業への進出は、農村経済を基盤としてはじまり、次第に多角化して現在では広い業種に及んでいる。

日系子弟の上級学校への進学志向は、1950年代の後半から60年代にかけて急増し、この高い学歴の結果が都市型職業への就労につながり、日系人の都市部集中に拍車をかけることになった。反面、日系社会では、1世の高齢化による老人福祉、出稼ぎ問題、非日系との婚姻・混血化など、さまざまな変化が生じてきている。

I. 企業の進出と地場産業

日本企業の対ブラジル投資は、1954年にはじまり、50年代にはウジミナス製鉄、石川島造船、トヨタ自動車など大型投資があり、60年代後半から70年代の半ばまで「ブラジル進出ブーム」期で、76年までに537社が進出した。

1970年代の末期からブラジル経済にひずみが生じ、同時にインフレが激化するようになると、撤退するところも出たが、大半の企業は悪条件の中で着実に発展をつづけた。

日系社会からも、農業で資本を蓄積した者のなかから、次第に商工業の分野への進出が

はじまり、戦後の都市集中化の波に乗って加速、現在では多くの分野に及んでいる。

Ⅱ. 日系社会の変化

祖国の敗戦により永住の決意を固めるにつれ、子弟に高度なブラジル教育をほどこすことの必要性を自覚するようになる。高等教育はブラジル社会に参加していくための唯一の手段であり、日系の場合、ブラジル社会への参加は大学を卒え、それぞれの分野で職業人として進出していったことから始まる。

1970年代以降、日系社会に見られた変化は、職業の多様化と戦前1世の退潮で、1978年に举行された日本移民70年祭は、戦前1世主導の最後の祭典だといわれた。そして非日系人との結婚が多くなると、混血日系人が増え、日系コロニアの境界線が不明になってくる。

日本語学習部門でも、1990年をピークに日系子弟の学習者は減少の一途を辿っている。その一方で非日系人の学習者は徐々に増えるという現象も現れており、日系・非日系を問わない新しい日本語学習体制への転換が求められている。またブラジルの経済悪化からはじまった出稼ぎ現象は、日系社会に空洞化をもたらすなど日本サイドとともにさまざまな影響が現れている。

C. 新時代の展開

ブラジル日本移民の歴史もやがて100周年を迎えようとしている。新世紀という新しい時代の幕開けを迎えて、日系人はブラジル社会へ、あるいは日本との交流において、どのような展開を見せるだろうか。日系人はいまや戦前には見られなかった政治面にまでも進出するようになり、他の分野においてもブラジル社会に深く浸透している。こうしたあらゆる面でのインテグレーション(統合)のなかで、日本移民がもたらした日本文化はいろいろな面でブラジルの新しい文明の創造に影響を与え、「日本移民」がこの国にあったことの意義を永久に残すことになるだろう。



戦後資料の展示

I. 日本とブラジルの交流

ブラジルと日本の交流は、戦前においては“移住”を中心に一方向で行なわれていたが、

戦後になってその交流が多様化した。学術部門の交流は戦前からあったが、本格化するの
は戦後になってからである。両国の大学間の協定に基づいた相互交流事業も活発に行なわ
れている。

戦後活発になったものに各分野の研修交流があり、移民社会らしい交流としては県費留
学生制度がある。ブラジルから日本へは、学術関係のほかにスポーツや芸能界からの交流
が盛んで、特にサッカーでの相互交流は活発だ。宗教界からも、あらゆる宗教団体が布教
活動をしており、日系以外の信者を多く擁するに至っている。

ブラジルと日本との関係は、移住の歴史とともに開始されたが、80年代後半からの日
伯関係のキーワードは、日系人の「出稼ぎ」現象といっても過言ではない。この現象はブ
ラジルの経済悪化と日本経済の好景気を要因としてはじまり、90年6月の日本の入国管
理法改正によって拍車がかかり、現在では約30万の日系人とその配偶者らが日本で就労
しており、日伯双方にそれに関連した多くの影響を与えつつある。

Ⅲ. ブラジル社会への参加

1950年代から増加する大学卒の日系人の活動の場がひろがり、現在、あらゆる分野
に日系人の進出していない分野はないといわれている。政官界への進出も、1970年代

に入って急増する。ブラジル社会への参加は、さまざまな形態と内容をもった日本からの経済協力が行なわれ、それはブラジル経済の発展に重要な役割を果たしてきた。特にブラジルの大規模開発プロジェクトは、日本産業の発展にとっても重要な意味をもち、さらには、日伯関係の緊密化に大きく貢献している。

参考資料 斎藤広志「サンパウロの移民史料館」人文研「研究レポート」・1978年
「ブラジル日本移民・史料館ガイド」ブラジル日本移民史料館1979年
「増床部展示基本計画」（9階）史料館増床部委員会1999年

移民の記録をデジタル化

現在、移民史料館に収蔵されている史料は約4万点、そのうち約1・800点の史料が7、8、9階のスペースに展示され、他の文書・物品は3階の収蔵庫や倉庫に保管されており、展示されていない史料がほとんど。この膨大な史料の管理もままならないのが現状だが、移民の歴史に精通している人たちが亡くなる前に、貴重な歴史を再確認し、移民の足跡を残す必要性から、移民100周年に向けて「国内100年探検隊」プロジェクトが史料館から100周年祭典協会に提出された。

このプロジェクトは国内各地に調査班を派遣して、移民の歴史を映像・写真・文章で記録するというもので、それら資料をCDなどデジタル媒体で残していく計画。同計画では数人の調査班を組み、車に機材を積みこんでビデオ、撮影を含めた調査旅行を行い、集めた資料を整理して、全伯の主要日系団体の会館などで巡回展を行うというもので、実現すれば将来への大きな遺産になることは間違いない企画だったが、資金的制約から取り止めとなった。

移民史料館合同会議

2005年11月18日、国際協力機構後援による第1回合同会議が行われ、6地域（サンパウロ、ローランジャ、バストス、レジストロ、ペレイラ・バレット、東山農場）の史料館代表者が参加した。

同会議は、史料館の横の繋がりを深め、所蔵品の管理、腰示などについて意見を交換するだけでなく、日本移民100周年への準備としての意味合いも含まれた。

会議の第1部は文協で「史料館の現状と問題」について討議、午後からの第2部ではサンパウロ移民博物館を会場に、ベアトリス・アウグスタ・クルス博物学士（聖州文化局）による「ブラジルの博物館における運営の動向」が発表された。

ブラジル日本移民史料館(大井セリア館長)の呼びかけによる「第2回史料館合同会議」が2006年11月17日にカンピーナスの東山農場で開かれた。今回参加したのは前回の6地域に弓場農場、グアタパラ、カンピーナス、ブラジリア、インダイアツوباなど、移民に関する史料を管理、収集している地域からも代表者が意見交換に参加した。

会議では各史料館での100周年にむけた取組みなどが発表されたあと、ブラジル日本移民史料館の大井セリア館長は、各史料館が合同して行なう企画として、移民の歴史を写真でつづる写真集の刊行と合同展示会を提案、計画の意向が具体的にまとめれば、早急に委員会を立ち上げ、資金や実質的な方法について検討を始めたいとしている。

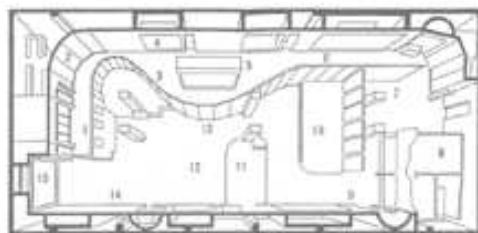
また、前回話し合われた現状と課題をふまえ、「手軽にできる所蔵史料台帳のモデル紹介」(中村茂生 JICA 青年ボランティア)などが発表された。

現在、マリリア、リンス、アサイなど史料館の開設準備を進めている地域もあり、今後各地の史料館が連携を強め、日系社会の移民史料をいかにまとめていくか、その活動が期待されている。

(文庫編集部 「文協50年史」はここまで収録しました)

7階

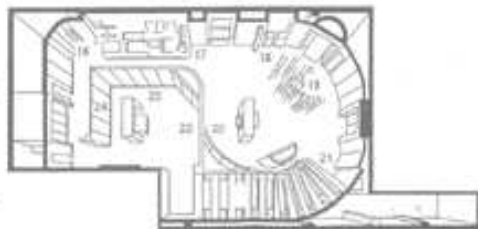
1. 日本人の海外移住
2. 日伯関係の幕開け
3. 新天地ブラジル
4. 笠戸丸の移民たち
5. 出航から配膳まで
6. コロノ移民
7. 原始林の開拓
8. 移民の開拓小屋
9. 植民地の建設
10. 移住者の知恵・工夫



11. 移民の楽しみ
12. 奥地地型農業の推進
13. 近郊型農業の創始
14. 熱帯農業の振興
15. 移住者の保健

8階

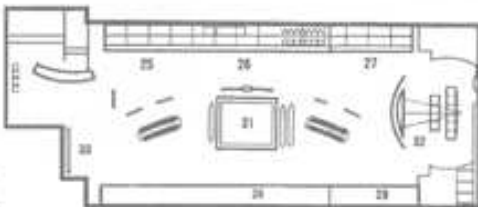
16. 新しい栽培種導入
17. 集約農業の誕生
18. 農協運動の芽ばえと発展
19. 都会生活への第一歩
20. 産業の育成
21. 戦争という暗いトンネル
22. 戦後日系社会の黎明期
23. 日本移民の再開



24. 日本企業のブラジル進出

9階

25. 新たなる幕開け
26. 日系社会の変動
27. 新時代への展開
28. 東郷青児の絵画
29. スポーツ用具のコーナー
30. ブラジル国内の日系人所在地
31. イシプラス・コーナー



32. テーマシアター

「文協 50 年史」 編纂委員会

委員長 大原 毅
委員 松尾 治
関根 隆範
大井セリア
中島エドアルド剛
編纂コーディネーター
栗原 猛

協力 スダメリス銀行

文協創立 50 周年記念
文協 50 年史

発行 2007 年 4 月
発行者 文協 50 年史編纂委員会
執筆・編集 田中慎二
発行所 ブラジル日本文化福祉協会
SOCIEDADE BRASILEIRA DE CULTURA JAPONESA E DE ASSISTÊNCIA SOCIAL
Rua São Joaquim, 381 - CEP 05108-900 - São Paulo - Brasil
Site: www.bunkyo.org.br - e-mail: bunkyosp@bunkyo.org.br